

不明な艦娘が建造されました？！

BeatFran91

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※注意※

この物語には以下の成分が含まれています

- ・キヤラ崩壊、オリキヤラ多數出現、俺の嫁がガガガ
- ・作者の妄想、独自解釈、にわか成分多々
- ・計画性皆無
- ・ネタ満載てんこ盛り
- ・不定期投稿

等々もう色々含まれております。それでもOKな方だけお読みください。

仕様変更のお知らせ！

非ログインの方でも感想を書けるようにしましたので、「なにこれ、おもんな」「いいぞ、もつとやれ」等の感想どしどし書いてください。

♪Twitterやつてますよ♪

え？規制がきつくて文句も書けない？そんな時こそ

<https://twitter.com/@BeatFran96> ↑ここでしょ

?ここ!!

目次

第1話 「とある日の午後」	1
第2話 「不明な艦娘が建造されました。」	1
第3話 「名前決め演習開始!!」	14
第4話 「第十八鎮守府」	25
第5話 「自己紹介」	42
第6話 「出撃」	64
第7話 「戦闘」	82
第8話 「打ち合わせと言う名の集合」	91
第9話 「制限時間」	108
第10話 「仲間」	118
140	118

第11話 「作戦準備」	152
第12話 「作戦開始」	165
第13話 「矛盾」	176
第14話 「狂気」	193
第15話 「桜と蓮と決着と」	206
第16話 「作戦終了」	227
第17話 「響の報告書」	246

第1話 「とある日の午後」

暖かい日差しが窓から差し込み俺のいる執務室をちょうどいいぐらいに温める昼下がり。

昼食後で満腹を感じている脳から、睡眠したいと体に伝えてくる。

寝てたまるか、また徹夜してたまるか、そう思いながらも

俺「・・・・・ z z z」

寝てしまう俺氏。

俺「・・・んがつ?! 寝てない! 寝てないからな!!」

つて、誰に言つてるんだ俺?

・・・まあいい、気晴らしにちょっとコーヒーでも飲むか。

そう思い、ふと秘書艦の机を見る。

その机には、誰もいない。なぜなら・・・

俺「・・・昼休みはとつぐに終わつてるんだが・・・どこで油売つていやがる・・・

なぜなら、秘書艦が昼休みに行つてからまだ戻つてきていないのだ。

俺「もう2時・・・いや3時になるぞ。いくらなんでも遅すぎるぞ・・・」

コーヒーをマグカップに注ぎ終わり柱時計を見てつぶやく俺。
その時、

卷之三

本館の中で大声で叫ぶ声が聞こえ、ドタバタと廊下を走る音が聞こえる。確かこの声は・・・

暁「まて————!!このバカひびきい————!!」

・・・暁型駆逐艦、そのネームシップである1番艦『暁』だ。
(追いかけっこか？やるんなら外でやつてくれよ・・・)

そんなことを思いながら、コーヒーを口に含んだとたん

ドオオオオオオオオオオン

ドアが宙を舞つた。

ドアが宙を舞つた。（大切なことだから2回言うけど）

「…あつ、しまつた。ここ執務室だ。」

先に入つて来たのは、暁型駆逐艦2番艦、不死鳥の二つ名をもつ駆逐艦『響』だ。

?

そう言いながらこつちを向く響。

俺と目があつた。

「目と目が合うー♪しゅんかーん♪」

俺 「だれがあいつだつて？響さんや？」

響 「・・・」 サー

アイエエエエ！ナンデ？ナンデオキテルノ?!と言わんばかりに顔を青くする響。

響 「ど、ドーモ、オハヨウゴザイマス。シレイカン＝サン。」

アイサツは大事、古事記にもそう書かれてある。アイサツを返さないのは

俺 「いや、書かれていたとしても返さないよ？ニンジヤのフリを投げられても返さな

いからね？」

響 「なんだい指令官、ノリが悪いね。君には失望したよ。」

俺 「いやいや、失望してるのはこつちだからね？お前今何時かわかってる？」

響 「さつきおやつのケーキを食べたから・・・3時ぐらいかな？」

俺 「昼休みって何時から何時までかしつてる？」

響 「12時から1時だね。」

俺 「この鎮守府の秘書艦は誰だか、知つてる？」

響 「当たり前じゃないか、この私響だよ！」

どこぞの吸血鬼が登場する時の効果音が聞こえんばかりに威張るうちの秘書艦。

人

選間違えたかな・・・。

暁「ひい～びい～きい～、もう逃がさないわよお～！」

響「?! しまつた、司令官と話し込んでいる場合じやなかつた！」

ものすごい形相で執務室に入つてくる暁。いつたい何があつたんだ・・・。

暁「よくも・・・よくも私のケーキをおおおお!!!」

ケーキかよ。うらやまゲフン くだらない姉妹喧嘩か。

響「姉さん、何度も言うけどあれは姉さんのじやない。正真正銘、この私のケーキだつ

!!

暁「うるさいっ！あれは私が先に見つけたケーキなのよっ！あれは私のケーキよつ

見つけたって・・・

!!

響「いいや違うね！あれは私が先に見つけたケーキだよっ！
二人とも自分で買つてきたやつじやねえのかよ！」

俺「おい二人とも、そのケーキほかのやつのじやないのか？」

響「なんだい司令官？私たち姉妹の話に首をつつこまないでよ？」

暁「そうよ！それにみんなに聞いてもみんな自分のじやないって言つてたもん！！
あ、 そうなの？ならなんでケーキがあつたんだ？」

響「それに姉さんみたいなお子様舌はあんな大人の苦さのビターチョコケーキなんてたべないでしょ？」

暁「お、お子様言うなあ!! 食べれるもん! 大人な苦さなんて一人前のレディである私にしたら、ちようどいいもん!!!」

俺「ビターチョコケーキ?? それって……」

俺「なあ二人とも、そのケーキって、どこにあつた?」

暁「え? 食堂の冷蔵庫だけど……?」

俺「そのチョコケーキって、上にトリュフチョコが乗つかつてるやつか?」

響「そうだよ。よく知つてるね?」

俺「そりやそうさ、だつてそれ、俺のだし。」

・・・・・・・・・・・・

執務室が一瞬にして静かになるのが分かつた。

二人とも俺のその言葉を聞いて固まつてしまつた。

暁「あつ、えつと、そ、そのつ……」

響「……」

暁&響「(ゞ)めんなさいいいい」 orz

土下座をする二人。小さな体をこれでもかと小さくする。ちょっとかわいい。

俺「ま、いいよいよ二人とも。食堂の冷蔵庫なんかにしまった俺に落ち度があるんだし。」

響「司令官……」

俺「なに？」

暁「怒つた??」

俺「怒つてないよ?」

喧嘩の種をまいたのは俺だし、本気で悪いということが見えたので、怒る気がしない。

ただ・・・

俺「ただし響、テメエは別だ。」

響「ナンデツ!?」

俺「そりやそうだろ?!秘書艦の仕事ほっぽりとして! 挙句の果てに遅刻した理由が俺のケーキを食べていたからとか!」

響「ち、違うよ司令官! 誤解だ!! 司令官のケーキを食べて、そこを姉さんに見つかって追いかけられていたから遅れたんだっ!!」

俺「響さん? さつき君はなんて言つたつけ?」

みんなも少し戻つて響のセリフをみてみよう!!

響「・・・」カオマツサオ

俺「さて？響。どうなるかわかつてんだろうなあ??」

そういつた後、響は涙目になりながら暁を見る

響「姉さん……」

暁「助けてって言つても何もできないわよ?」

響「私の最後の名はВерныйだ……До сvidaания……」

まさかのここで轟沈時のセリフ

暁「し、れ、い、か、ん、うううく響を解体させないでええええ」

おもつくそ助けているじゃないですか暁さん。

俺「しないし、弾除けにもさせないよ。騙されてますよ暁さん??」

暁「ふえ……そうなの??」

響「チツ……ばれたか」

こいつ……騙し通す気無いのかよ……。

暁が顔を真っ赤にして怒り始めようとする前にさつさと響に与える罰を言おう。

俺「響お前にはフタマルマルマルに俺の部屋に来てもらう。」

響「えつ、なに？私にいやらしいことする気なの？エ□同人みたいに!!」

俺「隠せてねえし、やらねえよ。」

暁が一瞬顔を別の意味で真っ赤になりかけたが見なかつたことにしよう。

俺「あ、暁。君も雷、電を連れて響と同時刻に俺の部屋にきなさい。」

響「ま、まさか私たち姉妹全員にいやらしいことを・・・」

俺「だからやらねえっての！お前の目の前で俺のとつておきのケーキをみんなで食べるんだよ!!」

響「な、なんだつて―――!!」

暁の顔が一瞬にして輝きだした。

響「それじやまるで拷問じやないか！鬼！悪魔！DTロリコン!!」

俺「うるせえ！だれがDTロリじやボケエ！これはもう決定事項!!さあ！とつとと持ち場に付け!!」

納得してない響はほつといて暁はスキップしながら執務室から出て行つた。去り際に

暁「しれいかんつ！ありがと！楽しみにしてるわねつ!!」

と残して。

あれからすぐに響には建造を頼んだ、レシピは大型建造の40000／60000／60000／40000／1000

レシピを見ての通り大和ねらいのレシピだ。

D（どーせ） M（みんな） M（陸奥になる）にはなるなよと願いつつ……執務を続ける俺。

その時、執務室前で声が聞こえる。

??? 「なっ?!なんなんだこれは?!一体なにがあつたのだ?!」

この凜々しい声は……

俺「おう長門、最近暑いから扉を夏の間だけ撤去することにしたんだよ。」

長「そ、そうなのか??」

長門型戦艦1番艦、連合艦隊旗艦にもなつたネームシップ、長門だ。

俺「んなわけねえよ。響に吹つ飛ばされただけだよ。」

長「まあ、そうだろうと思つたさ。」

執務室のドアは壊されるもの。だれだ最初にこのことを言つたやつは……。

俺「で、どうしたの?」

長「ああ、そうだつた。作戦の結果を報告しに来た。」

長門のその言葉を聞いて、部屋の空気が鋭くなつた、俺も彼女も真剣になつたのだ

俺「・・・ん、成果はどうだ?」

長「提督のおつしやつていた通り、やはりあの鎮守府では……」

長門が報告内容の要を言いかけたその時

チユドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!

鼓膜が破れそうになるほどの爆発音が聞こえた。

俺「!?な、なんだ?!?」

長「提督!!ご無事ですか?!」

俺「俺は大丈夫だ！お前は?!」

長「大丈夫です！・・・!!て、提督!!

長門が指す方を見ると

俺「な、なんだあ?!?」

黒煙が鎮守府内で上がっている。確かあの方向は・・・

長「工廠から煙が!!!」

俺「すぐ向かうぞ!!」

工廠の周りには鎮守府に残っている艦娘みんなが集まっていた。

俺「なんだ！何が起きた!!」

青葉「い、いえ、私にも何が何だか・・・」

俺「明石！夕張！」

明石「一番ドツクが急に爆発しました！」

夕張「近くに響さんが!!!」

俺「なんだつて?!」

響が爆発に巻き込まれた・・・・?

響は? 無事なのか? まさか爆発に・・・・?

頭が嫌な想像ばかりを映してしまった。いくらあんなにふざけていても、いくらあんなにうざくても

響は・・・鎮守府の・・・俺の・・・

俺「ひびきいいいい!!!」

家族だ!!!

? 「司令官、なんだい?」

俺「?!」

聞き覚えのある声。

見覚えのある髪の色。まぎれもない、あれは・・・

俺「響!! 無事だつたか!!!」

響「うん。爆発ですこし吹っ飛ばされたけど、けがはないよ。」

俺「そ、そとか・・・よかつた・・・。」

はあああああ、と大きくため息をつく俺。そりやそうだ、あんな大爆発が起きたんだ。

陸奥の第三砲塔なんて比じやないくらいの爆発だ、誰しもが心配するだろう。

響「それより、司令官」

俺「なんだ?」

響「新戦力が加わったみたいだね。」

俺「・・・は?」

爆発が起きた1番ドックを指す響、煙の中をよく見ると・・・

俺「!?

そこには、艦装を背負い立っている少女がいた。

体型からして、巡洋艦クラスだろうか。それにしても、

見たこともない艦装だ。

右手には、巡洋艦クラスがよく持つている20・3cm連装砲。

左手には、バツクラー（小型の円い盾）？に似たようなもの、よく見たらプロペラがついている。

太ももには、魚雷発射管

背中には、煙突を中心にして左右対称に四角く縦に長い箱が3つずつ。

左右の肩には、背中の艦装から小さく顔をみせる対空砲。
そして頭には、ヘッドホン。

？「あ、あの・・・その・・・」

その少女が口を開く。

？「は、初めまして!!!」

この艦娘の建造完了から、俺の鎮守府が動き出す。

第2話 「不明な艦娘が建造されました。」

——『??鎮守府、正面海域』——

時をさかのぼり、響がケーキを食べるずっと前のこと。

日向「……」

長門「どうだ、日向？」

日向「……どうやら、ここらしいな。」

長門「そうか……」

日向のその言葉を聞いて、苦い顔をする長門。瑞雲からの報告を受けた日向も長門と同様な、苦い顔をする。

その会話を聞いていた、川内、時雨も顔をうつむせて、暗い表情になっている。

長門「……よし、一度我が鎮守府に戻るぞ」

？「その必要はありません」

長門の言葉を遮るように、後ろから声を掛けられる。かけた相手は、

不知火「あなた方は、何処の所属の船でしようか？」

陽炎型駆逐艦、その2番艦である不知火だ。

不 「何故、このような場所に隠れているのですか？」

日（まづいな・・・）

長（どうする・・・）

長門と日向が策を考えていると。

川内「あたしたちは、第14補給鎮守府のものだ。」

時雨「隠れているんじやなくて、僕たちは帰還途中でちょっとここで一休みしていた

だけさ。」

フォローに入る2人、

長「そ、そうだ。我々は任務を全うして、いま少しここで小休憩をとっているだけだ。」

日向もそのセリフに合わせて、ゆっくりうなずく。

不「・・・・・・・」

不知火の鋭い視線が少し痛い。

かなり怪しまれている。

不「なるほど。わかりました。」

ほつとする川内、時雨。しかしさし

不「あなたの方の言っていることは、全て偽りであることが十二分にわかりました。」

「「「！」」」

不 「あなたの方の任務は、差し詰め、我が鎮守府の偵察といったところでしようか？」
まづい、バレてる。完全にバレてる！

不 「申し訳ありませんが、あなた方は、ここで沈んでいただきます！！」

長 「総員！ 散開!! 川内!!」

川 「了解!!!」

不知火がポケットに手をいれ、何かを取り出そうとする前に、長門は指示を出した。
長門の指示を受けて川内が撃つたものは、

不 「・・・チツ」

煙幕だ。

周囲が真っ白で何も見えない。

煙幕が晴れたころには、そこには誰の姿もない。

不 「・・・不知火です。申し訳ございません。ネズミを取り逃がしました。」

? 「・・・」

不 「!!違います!!決してそのような気はありません!!」

? 「・・・」

不 「申し訳ありません！次こそは！次こそは必ず!!!だから・・・」

不 「だからあれだけはあ・・・」

響 「そして時は動き出す・・・。」

俺 「いや何言ってんの？」

——響が言つた様に、時は戻り現在、『鎮守府執務室』——

俺 「んで、君の名は？」

響 「やつとおゝ目をくゞさましたかああゝい♪」

俺 「あんたはだあつとれ！」

あの爆発の中、建造されたであろう艦娘の情報を聞くために、その子と提督である俺、
秘書艦の響の3人で執務室にいる。

? 「えつと・・・その・・・」

俺 「? どうかしたのか??」

? 「あ！ いえ!! たいしたことではないのですが・・・なんていうか・・・その・・・」

名前を聞いただけで困り果ててしまつてゐるようだ・・・まさか

響 「んじや、名前は後回しにして、艦種は？」

? 「・・・・・・」

響の質問にも、困り果てたような顔をしてしまつてゐる・・・

俺「おい、まさか君・・・」

響「記憶喪失、あるいは名前も艦種も全く自分のことを知らないかの、どちらかだね。」「ううつ・・・」

うそでしようそでしょ??え?なに??そんなパターンあるの??

響「んで、どつちなんかい?」

?「・・・たぶん、自分のことを全く知らないの方だと思います。」
まじか?マジで??

俺「え?なに??名前も艦種も不明なの?」

?「は、はい・・・」

響「不明な戦力が加わったようだね。」

?「大きな音に驚いて起きて、目を開けたら皆さんがいて・・・。」

少女の説明を聞いている限り、本当に自分に関する情報が無い様だ。

俺「じ、じゃあ君のことはなんて呼べば・・・」

響「“ああああ”でいいんじやないかな?」

響の言つたことは無視しよう。うん。

響「んじや・・・くあwせd r f t g yふじこl p』で。」

少女の顔から見ても「いや、それはないんじや」と言いたそ
うだ。

響「……んじや”ヴァツ○ユ・ザ・スタn」
ていとく のじとめ!こうかはばつぐんだ!

ひびき は おしだまつてしまつた!

俺「にしても、さすがに名前がないのはこまつたなあ……。
?「すみません……。」

少女が暗い顔で謝る。

俺「いやまあ、君が謝る必要はべつに……。」

響「謝る前に、ちやちやつと名前きめようか?」

お、響が復活した。

とりあえず、もう一回ジト目で響を見る。

響「司令官、ここからは眞面目にやるよ。」

俺「……次ふざけたら、1ヶ月、甘いもの禁止な。」

響とそう約束して、話を戻す。

俺「んく、にしても名前かあ……。」

響「その艦装……どういう戦い方をするんだい?」

?「え?えっとお……この四角い箱の中には『対艦ミサイル』が各箱の中に一発ず

つ収容されます。」

ふむふ・・・・ん?

俺「いま、なんと?」

? 「え? ですから、各箱の中に一発ずつ『対艦ミサイル』がはいっています。」

俺&響「・・・・・ふえ?」

2人とも驚いた顔をする。

そもそも、ミサイルを運用する艦娘なんて、見たことも聞いたこともない。 いうなれば、この子のみがもつ大きな特徴の一つだ。これは・・・

俺「・・・閃いた。」

響「あ、もしもし憲兵?」

俺「・・・・・。」

響「ごめんなさい。」

全く、やつぱり秘書艦間違えたかな・・・。

そんなやり取りをやつていると

? 「失礼します」

誰かが執務室にやつてきた。

長「長門、入ります。」

川「川内、入ります。」

日「日向、入るぞ。」

扉のない執務室に入つて来たのは長門、川内型軽巡洋艦のネームシップ、川内と、伊勢型航空戦艦二番艦の日向だ。

俺「ん？ どうした、3人とも。」

長「先の工廠爆発の被害報告と、先ほどの報告の続きを、と思いまして。」

俺「ん、いまは被害報告だけを聞いておく。作戦報告は、今夜にでも聞こう。」

本当なら作戦報告の方を優先して聞きたいが、今はこの子の前であまり暗い話をしたくない。

長「では、工廠爆発の被害は、負傷艦は0ですが、1番建造ドックがしばらく使えなくなりました。それ以外にも、もともと旧い工廠でしたので、あちらこちらにヒビが入つていて、倒壊寸前です。」

建造ドックが一つ使えなくなつたのは、少し痛いが、まあけが人0なら良しとしよう。
俺「そうか、わかつた。すぐに修復作業に取り掛かるよう、明石ら技術班に伝えてくれ。それと、安全が確認されるまで、誰も工廠に近づけさせないようにしてくれ。」

俺はそう長門に伝えると、長門は一礼して執務室から出て行つた。

俺「んで、川内と日向は？ 入渠完了の報告か？」

川 「あ、うん。そうだよ」

日 「ちなみに、まだ時雨は入渠中だ。」

長門以外の3人は帰還途中に深海棲艦による奇襲を受けて今まで入渠していた。

俺 「そうか。ま、時雨少し損傷が酷かつたもんな。とにかくお疲れ。ゆっくり休んで……」

そこで口を止めてしまう俺。さつき閃いた内容を川内を見て思い出してしまったのだ。

俺 「……川内、お前今から『演習』つてできるか？」

川 「？もちろん大丈夫だけど？もちろん！夜戦なら何回でもOKだよ!!」

俺 「そうか……なら決まりだ！」

俺が考えていたこと、それは、

響 「なるほど、歓迎パーティーか。」

？ 「歓迎……パーティー？」

響 「そうだよ、我が第十八鎮守府のやりかたさ。」

注：そんなものございません。

響 「我々はきみのこと歓迎しよう、盛大にね。」

絶対それ言いたかつただけだろお前。

——鎮守府、演習用海域——

300m×500mの長方形になつてゐる演習用の海域、そこの見物台に俺、響、そして何故かいる日向。

俺「日向、休んでもいいんだぞ?」

日「何を言つてゐるのだ提督。戦力不明な新顔、どのように戦うのかとても気になるだろう?」

まあそうだけどさあ。

・・・まあいつか。とりあえずこつちが先か。

俺「よし、二人とも準備ができたら返事をしてくれ。」

無線を通して呼びかける俺。

?『私はいつでも大丈夫です。』

川『川内、準備完了よ!』

2人の合意の返事が聞こえてきた。

俺「川内、相手は新兵だ。手加減してやつてくれよ?」

川『了解。でも、相手がかなりやるようなら、こつちも本氣で行くからね?』

俺「ほどほどにな。」

名前を決めるだけなのに、こんな大事になつてしまつたが、まいいか。

俺「よし・・・演習開始!!」

俺の合図をもとに、戦闘がはじまつた。

第3話 「名前決め演習開始!!」

川内 side\

俺『よし・・・演習開始!!』

提督のその合図と同時に私は飛び出した。

うちの提督はやっぱ甘い。お子様カレーに砂糖を大量に入れたぐらい甘い。（謎）

だいたい、私は思う。

新人に対して手を抜く行為はシツレイに値するつてね。

だから私は、手を抜かない。

全力でぶつかって、気持が良いほど完膚なきまで相手を潰す!!

・・・ま、まずは、いつものことをやるまでだかどね。

???（新人） side\

俺『よし・・・演習開始!!』

提督さんのその合図を聞いた途端、私は頭の中が真っ白になってしまった。
まずなにをすればいいの？いま私にできることは？相手はどこから？

等々・・・頭の中でいろいろな考えが目まぐるしく回っている。

なんで名前を決めるのに・・・決めるだけなのにこうなつてしまつたのだろう?

そうこう考えているうちに、私の付けているヘッドホンからスクリューの音・・・川内と呼ばれる人がこちらに移動している音が聞こえ私はその音で目が覚める。だが、時すでに遅し。川内さんが目視できる距離まで近づいてきている。

どうしよ! 撃たれる! 撃たなきや! どれを?!

川内さんが近づくにつれ頭の中がパニックになる!

川内さんも私もお互い有効射程距離にはいつた!!

撃たなきや撃たなきや撃たなきや・・・・・!!!

お互い有効射程範囲に入つたところで、急停止する川内、そして・・・

川「ドーモ! ハジメマシテ。センドダイ!! デス。」

ドーーーーン

新「・・・・・ヘ?」

アイサツは大事、古事記にもそう書かれている! アイサツを返さないのはシツレイで
ある!

川「・・・・・
新「???'」

待つていてる！センダイ＝サンはアイサツの返事を待つていてる!!

川 「・・・」

新 「え・・・えーと・・・」

川 「・・・・・」

新 「あ、あの・・・その・・・」

川 「・・・・・・・」 イラッ

新 「えと・・・えええ・・・」

川 「アイサツをされたら返すのがレイギでしようがああああああああああああああ!!!!」

新 「ご、ごめんなさいいいいいいいい？」

ナムサン！キレた！相手がなかなかアイサツを返さないのでついにセンダイ＝サン

は

キレイてしまつた！

川 「はい！もう一度!!」

新 「は、はい・・・。」

川 「ドーカ！ハジメマシテ。センダイ＝デス。」

ドーカー

新 「ど、どーも？せんかいさん？・・・あ、そのつ・・・」

は

川 「あ、名前まだなかつたんだつけ？」

新 「は、はい・・・すみません・・・」

川 「ま、いいわ。アイサツも済んだし。んじや、行くよ!!」

新 「!! はいっ!!」

一度くしやくしやになつていた頭であつたが、川内さんとのこのやり取りで一気に整理がついた。

俺 「・・・なあにこれ」

響 & 日向 「艦これ」

俺の呆れて出た一言に対して、響と日向、二人同時に答える。ハモるなよ。

俺 「ま、まあ、何時もの川内らしいけどな。」

日 「だが、あのやり取りのおかげで、新人の方の顔にさつきまであつた不安や焦りといつた表情は消えているぞ。」

響 「お、ほんとだ・・・さつきのオロオロな表情がきえてるね。」

まあ、確かにさつきよりも表情がやわらかい。川内のふざけた行動のおかげで緊張がほぐれたようだ。

俺「さて・・・二人とも、ここからはあの子がどんな戦いをするのか目が離せないぞ？」

川「砲雷撃戦よおーい！てえ――――ツ!!」

鳴り響く砲音、

新「くうつ?!」

泡立つ水柱。

新「お願ひ・・・当たつて!!」

お互い被弾は無し。

川「おつとお。危ない危ない」

二人とも相手の弾をかわしている。

一定の距離を保ちつつ二人とも今は主砲のみの撃ち合いになっている。

川内は余裕がある表情をしている。

川（すごい・・・重巡並の大きさの艦装なのにあんなに速く動いている。そしてこの命中精度・・・少しでも気を抜けばすぐに捉えられてしまう。）

しかし内心冷や汗をかいていた。

艦装に見合わず軽巡と等しい速度、しかし砲の威力は重巡と同じ。

そんな風に感じながらも

川「・・・！そこっ！」

相手の足元に冷静に砲を放つ川内。

新「うわわわっ！」

川内の砲撃によつてバランスを崩してしまつ。

川「いただきい！！」

それと同時に川内から魚雷が発射される。

新「な、なんのお！」

アンバランスになりながらも砲を放つ。

直撃コースの魚雷にうまく当て、かなり大きい水柱が立つ。

川（ちつ・・・落とされたか。）

おおきな水しぶきのせいで視界が一時的に悪くなる。

川「・・・いな、い？」

水しぶきが収まつたころには、そこにいるはずである新人の姿がない。

顔をあげ、少し遠いところを見ると

川「いた！でも、あの距離じゃ砲は届かないね・・・。」

砲の射程範囲外のところに新人がいた。今もまだ離れようと移動している。

川（敵前逃亡……？いや、もしかしたら何か策があるのかも……。）

川（ここは少し回り道をして……）

そういう川内が考えていると

バツ

一瞬の大きな音とともに、空へ向かつて移動する光、その光の後に流れ出る白い
雲……。

響「光の……昇天……。」

日「ミサイルカヒビキー？」

俺「……ほう」

その光にみとれる俺（どこぞの蒼い閃光ネタはほつておいて）

それをみてつぶやく俺

俺「まるで……“流星”だな」

川「なに……あれ……。」

新人ではなく、空に上がるそれをみてつぶやく川内。
しかし少しづつ時間がたつにつれ

川「・・・?! ちよ?! こつちに落ちてくる?!」

こちらに落ちてくることを確認した川内

川（落とす?! 対空砲を?! いや回避?!)

今まで見たことのないことに戸惑う川内、

川「つ!! 回避い!!!」

しかしすぐに冷静になり、回避行動に入る。

川内が回避行動をした直後

ドバアアアアアアアアアアアアアアン!!!!

先ほどまで川内がいた場所に大きな水柱!が立つていた。

川「うわわわっ!!」

爆発の衝撃でできた強い波に川内のバランスが崩れる。

新「着弾確認。命中ならず! 2番、着弾地点合わせ・・・発射!!」

彼女のその号令と同時に彼女の左側の一番手前の筒から大きな音とともに空へ上がる光。

「対艦対ミサイル」
彼女の最大の特徴であり、彼女の最強の攻撃法

彼女のヘッドホンから聞こえる音と左腕に格納されている観測ヘリコプターからの情報で敵の正確な位置を把握し目的のポイントへミサイルを放つ。彼女の艦装でしかできない戦法だ。

川「はあ・・・はあ・・・あ、あぶなかつ・・・たあ?!」

回避しバランスを立て直し一息つこうとする川内であつたがすぐに2発目が来ることを確認し回避行動に入る。

川（やばい！あれはもらつたら一発でアウトだ!!てかあれ演習用の弾だよね？実戦用の弾じやないよね??）

回避しながらも頭を整理させながら次の手を考える川内。

川（たぶんあの子が離れた理由はこの攻撃をするためだ。この攻撃は離れた相手にしか与えられないとみていいね。だつたら・・・）

進行方向を新人に向ける川内。

川「近づけばあれはもう撃つてこれないとみた!!」

新「着弾確認。命中ならず！3番、着弾地点合わせ・・・。
川内さんがこっちに猛スピードで迫ってくる！」

まづい、有効射程範囲から逃げられる！どうしよ・・・

そうこう考えてる内に、川内は対艦ミサイルの射程範囲より内側に来てしまった。

新「・・・」、こうなつたらあ！」

新人も川内に向けて進路をとる。

響「お、決着がつきそうだね。」

日「だな、お互い全速力で近づいているな。」

俺「・・・・・」

新「はああああああああああああ！！！」

川「やああああああああああああ！！！」

雄たけびとともに全速力で近づく二人。そして

川＆新「魚雷全弾射出用意!!てええええええええええ!!!!」

二人同時に魚雷を射出、川内の魚雷と新人の魚雷のいくつかがぶつかり合い爆発する。

川「!?うわあああああ！」

新 「きやああああああああ!!!」

二人共魚雷が命中。大きな水しぶきが二人を覆う。

・・・・・

水しぶきが收まり、そこにあつた光景は。

中破になり服が破け、その場に座り込んでいる川内

大破になり豊満な bust をさらしながら仰向けになり目を回している新人。

響 「司令官・・・・・」

俺 「・・・そ、それまで!! 勝者! 川内!!」

目をそらしながら戦闘終了の合図を送る俺。

正直み t ・・・ 日向さん主砲こつちに向けないで。

新 「・・・・ん。うん?」

目が覚めるとそこは、白い天井だつた。

――『第十八鎮守府 医務室』――

??? 「あら?、目が覚めましたか?」

新 「ふえ・・・! ここは?! 戰闘は?! どうなつたの?!?」

??? 「まあまあ落ち着いて・・・。いま提督をお呼びしますね」
 ・・・・・

俺 「水川♪。來たぞ♪。」

響 「水川先生。お疲れ様。」

水川丸 「はい響ちゃん。お疲れ様です♪」

数分後提督さんと秘書艦の響さんが医務室に入つて來た。

新 「あ、あの・・・」

俺 「おう、お疲れさん。気分はどうだ？」

新 「あ、はい。大丈夫です。それよりも先ほどの演習！どうなつたんですか??」

響 「君が大破、川内は中破で君の負けだよ。」

新 「そ、そうですか・・・。」

下を見てうなだれる私。

俺 「ま、演習の結果はどうだつていいんだよ。また次があるしな。それよりも、だ。」

響 「君の名前、さつき正式に決まつたよ。」

新 「あ、そうだ名前!!すっかり忘れてました・・・。」

戦うことに必死になりすぎて、なんのための演習かすっかり忘れてしまつていた・・・。

俺 「まあ、そうだろうな。響。」

響 「じゃあ、発表するね……君の名前は……」
ゴクリ……と唾を飲み込む私……いつたい私の名前は……
響 “ первый этаж туда же ” だ!!

・・・

一瞬にして静まり返る空気。なんだろう、寒い。

俺 「すまねえ響、ロシア語はさっぱりなんだが。なんて意味だ?」
あ、たぶんこれ提督さん怒ってる。

響 「?なんだい司令官。これくらいの言葉もわからないのかい?」
俺 「・・・」

響 「意味はかんたんさ、そう、“一階トイレ”といいうm」

俺 「冰川、赤チン響の目の下にたつぶり塗つといて。」

響 「ごめんなさいまちがえましたすみませんはじめにやります。」

提督さんの冷たい声に冷めた目で提督さんの指示を実行しようとする冰川丸さん。

響 「じゃ、はじめて発表すると、今日から君の名前は”流星（りゆうせい）”だよ。」
流 「りゆう・・・せい・・・?」

俺 「そう、”特務艦 流星”それがお前の艦種と名前だ。」
流 「とくむ・・・かん?」

響「ま、たんなるどの艦種にも属さないイレギュラーな艦種つてことだよ。」
イレギュラー……なるほど。

響「じや、あらためて。」

俺「ようこそ、我が第十八鎮守府へ。我々は君のことに大きく期待している。」

——『第十八鎮守府、提督私室』——

響「くつ、はなせえ！ 司令官!! なにをするきだあ！」

繩でぐるぐるに縛られている響の前に座る暁型駆逐艦『暁』三番艦『雷』四番艦『電』
電「はわわわ・・・響おねえちゃん、なんでしばられているのですか？」

暁「電、響のことはほつておいていいから。」

雷「ほんと、響ねえ、今度は何をやらかしたのよ」

響「うーん・・・いろいろありすぎてわからないね。」

なんじやそりやという雷の声が聞こえるよりも先に

俺「うーいみんな、好きなやつ2個づつたべていいぞー」

暁 「きたあああああ!!!」

雷 「わ!なになにケーキ!?」

電 「ど、どれもおいしそうなのです♪」

置いてあるちゃぶ台におかれる。
ショートケーキにチーズケーキ、そのほかにもいろいろなケーキが提督私室の中央に

暁 「ど、どれにしようかまよつちやうわあ♪」

雷 「ほんとねえ!あ、チョコケーキもーらい♪」

電 「じ、じやあ電はシュークリームをいただくのです♪」

暁 「あ、コラ!!!おねえちゃんよりも先に選ぶなあ!!!」

俺 「おいおい、喧嘩するなよお。」

わいわいキヤーキヤーいう暁型3姉妹。やべえものすごくかわいい。

響 「こ、粉☆バナナ!!拷問だ!!」

電 「あ、響おねえちゃん、電の選んだやつですけどどうぞなのです。」

電の優しい行為に響の顔が満面の笑みに変わる。電ちゃんマジ天使。

暁 「ちょ、ちょっと電だめよ!!」

俺 「おう、もう響はこれよりも高級でおいしいものをひとりで全部食べたのだからね」

響 「な?! そ、それは・・・えーと。」

電 「でも、みんなで食べたほうがおいしいのです。」

必死に響をかばう電。天使すぎやしませんか電ちゃん。

俺 「電」

電 「?」

俺 「それ、1個108円・・・」

電の頭の上にまだ?マークができて いるのが見える

俺 「響食べたやつ、1個300円」

電の笑顔が消えた

俺 「みんな、2個。響、4個」

電の目のハイライトが消える

電 「・・・響おねえちゃん。」

響 「な、なんだい電?」

つめたい電の声。それに汗をかく響。

電 「そのケーキ。おいしかったですか?」

みんなの、姉さんの妹たちの目線が痛い。

響 「そ、その・・・・・」

もう逃げ場がなく、冷たい空気、冷たい視線が響を覆う。

「とても、おいしかつたです。」

電「・・・そうですか。」

電の声のトーンがいつものように戻り、口元も笑顔が見える、だが……
電「じゃあ、このケーキは抜け駆けして、電達よりおいしいおいしいケーキを食べた
ヒビキオネエチャンには、不要なのデス。」

あ、プラヅマ先輩ちーっす。

雷「そうねえ、それなら響ねえには、わたくしひつよう無いのね。」

俺「もうおいしいおいしいものを俺たちよりも多く食べているしね。」

暁「さ、散つていった響の分もしつかりたべましょ?」

響「勝手に私を殺さないでよ!? うわあああん!! 鬼! 悪魔!! プラヅマブラザーズ!!!」

これで響もこりてくれたらしいんだがねえ。

第4話 「第十八鎮守府」

——フタサンマルマル『第十八鎮守府、執務室』——
大半の者達は明日に備え眠りに入るこの時間
ヤセンドアアアアアアアアアアアアアアアアア

・・・とある者を除いて、

今夜は満月、月の光が執務室の窓から入り込んでくる。
コンコン

いつの間にか直っているドアに何者かがノックをする。

俺「・・・入れ。」

俺はノックしてきた者に対しても入室を許可する。

入つてくるのは、たぶん長t

川「提督!! 夜戦の時間だよ!!!」

俺「カエレ!!」

長門ではなく川内だった。

川「えー、せつかくこんなにいい夜に夜戦しないなんてもつたいないよお〜?だから

長「川内、貴様は明日朝一に遠征任務があるだろ？それに備えてもう寝ろっ！！！」

川内の頭をがつしりと掴み持ち上げる長門。

そしてそのまま、執務室から追い出す。・・・さすがは世界のビッグセブン。

俺「ありがとな、長門」

長「いえ、お気になさらずに。・・・では、」

俺
「ああ、
たのむ。」

執務室の空気が再び鋭くなる。

一一翌日『第十八鎮守府』一一

• • • •

流
一
・
・
・
う
・
・
・
む
う

遠くで誰かの叫び声が聞こえる・・・。

その声を聞いて薄目を開く私・・・名前は“流星”。艦種は“特務艦”。

……で合つてたよね？

まだ眠くて頭がうまく働かない。

流「あと、ごふうん・・・」

そう考えてもう一度眠りにつこうとした途端。

ドオオオオオン！ドオオオオオン!!

「人人人人人人人ー」

～ 突然の砲撃 ～

? Y^ Y^ Y^ Y^ Y^ ?

流「ふア?!」

いきなり聞こえた2発の砲撃音で飛び起きる私。

砲撃?!敵?!どこから?!行かなくちや!みんなは?!戦え!...どこ?...どうしよ?!
飛び起きてすぐに頭がパニックになり部屋から出て廊下を走る。
まずは艦装を!と自分の頭が最終的な判断を下した。が

流「あ・・・私の艦装・・・どこにあるんだろ。」

ここに建造されてからまだ一晩しか経っていない。

昨日も建造後、いきなり演習。被弾。医務室だったので建物の構造、施設、部屋など
全く理解していない。

流「つて、ここ何処?!玄関ってどつち?!」

そんな状態で闇雲に走り回つてしまつたのでもちろん迷子。今まで自分が寝ていた部屋の位置もわからない。敵の攻撃がまたいつ来るのかわからない。そんな慌てふためいてさらに頭がパニックになる。

「あれ、そういえば敵って……？」

？「……なんやきみ。そないあわててどしたん？」

突然、後ろから声がした。声がした方を振り返ると、そこには小柄で髪をツインテールにし、紅い服を着た小さな女の子が立つていた。

流「敵です！敵の攻撃ですよ！なにやつてるんですか?!早く出撃しないと……」

？「敵？……あ、今の砲撃のことをいつてるんか？」

流「そうですよ！それ以外何があるんですか?!」

？「まあまあちよつちきみ、落ち着いて落ち着いて。」

流「落ち着いてなんかいられませんよ!!」

？「……はあ。百聞は一見に如かず。こつちきいや。」

流「ゆつくりしてると暇はありません!!急ぎましょ!!」

？（こりや完全に頭混乱しとるわ……）

慌てふためく私をみてめんどくさいと思いながらゆつくり歩く女の子。

？「……そいやきみ、見ない顔やね？新しい子か？」

流 「こんな緊急事態になに聞いてるんですか?!」

? 「あゝはいはい、ほな急ごかー」

なんで敵が攻撃したのにこの人はのんびりしているんだろう?
そんなことを思いながら女の子の後ろを歩いていくと・・・。

? 「ふう・・・」

大きな艦装、おかっぱ頭で和服を着て いる女性が前から歩いてきた。

? 「お、日向。目覚ましあつかれさん。」

日 「む、龍驤と・・・確か君は昨日建造された」

流 「“特務艦 流星”です! つてそれよりも敵が!!」

龍 「あゝやから落ち着いて落ち着いて。ほれアメちゃん食うか?」

そう言つてスカートのポケットから飴を出す女の子。

私はそのゆつくりとした対応に少しずつ怒りがこみあげてくる。

そしてこみあげてきた怒りがどうやら顔に出たらしい。

日 「なんだ? そんなに怖い顔をして。何かあつたのか?」

龍 「うおつと?! かんにんな? きみをおちよくなつてる気はないんよ?」

流 「でしたらなぜそんなにもゆつくりしているのですつ?! こうしている間にも敵は

!?

もう完全に頭にきている私。この人たちを倒して自力で自分の艦装を探しに行こうかと考えてしまつてゐる。

龍「あゝ。かんにんな？待たしてしもうて。さつきの砲撃は空砲で日向が撃つたものなんよ。」

そう言い、日向と呼ぶ人を指す女の子。

流「?! それってどういう・・・」

日「なんだ？ 目覚まし砲にでも驚いたのか？」

クスッと笑いながら状況を把握した日向と呼ばれる女性。

流「目覚まし・・・砲？」

龍「せや。ここでは毎朝マル口クマルマル起床。その時間に起きん子のために、マル口クサンマルに空砲を撃つんよ。はよおきや～！ つてな。」

日「そして、今さつきその目覚まし砲を撃つてきたのが私だ。よくよく考えてみろ、先の砲撃から今まで砲撃はあつたのか？」

そういえば、その砲撃から今まで砲撃音を全く聞いていない。

日「それにもし、敵だつたら警報が鳴る。だから落ち着け。」

確かに、敵が来たらもつと皆さん大慌てするはずだ。

頭を冷やしてよくよく考えてみればおかしなところが多い。そのことに気付いた私

は、さつきまで慌てふためいた自分がとても恥ずかしく思えてきた。

流「あっ、あの・・・その・・・ご、ごめんなさいっ!!」

龍「いいくつていいつて、初めての子なら誰だつて勘違いするし。次きい付ければええことやしな?」

日「初めてなら、まあ、そうなるな。」

二人に慰められながら深々と頭を下げ続ける私。恥ずかしくて一刻も早くここから逃げ出したい。

龍「そ、そや!きみと日向まだ朝飯すんでへんやろ?一緒に行つて来たらどうや?」

日「なんだ龍驤、お前は来ないのか?」

そういうえば朝起きてから何も食べていない。そう考えているとお腹の虫がわめきだした。

龍「うちはちよつち用事があるんや。ほら!新入りの体は正直やし、とつとといきいや。」

日「ふむ、そのようだな。しかし、一度儀装を置いて報告をしてからでないといけないのだが・・・」

流「?!あ、あのっ!一緒にいて行つてもよろしいでしようか?!」

日向さんのその言葉に反応して、同行を願う私。

その言葉をきいて考えだす日向さん。

龍「かまへんやろ？提督からは一人でこいなんていわれてへんし。」

その言葉を聞いて、また考え込む日向さん。しかし、さつきよりかは考える時間が短かつた。

日「ま、確かに。良いだろう。ついてこい。」

流「!!あ、ありがとうございます!!」

そう言つてすぐに移動を開始する日向さん。

流「あ！その、龍驤さん？でしたつけ。お騒がせしてすいませんでした！」

龍「まあ、済んだことやし気にすんなや。ほな！」

そのまま、龍驤さんはどこかにいつてしまつた。

――『第十八鎮守府、執務室前』――

龍驤さんと別れてから最初に来たのは『執務室』、昨日建造されてから最初に私が来たところだ。

・・・・・・・・・・・・

中から話し声が聞こえる。そんなこと気にせずにドアをノックする日向さん。

? 「どうぞ

中から聞き覚えのある声が返事をしてきた。

日「失礼する。航空戦艦日向。報告に来た。」

返事が聞こえるやすぐにドアを開けて入室する日向さん。私は廊下で報告の様子を見ていました。

俺（以後提督の提）「おう。ありがとな。艦装外してすぐ朝食をとつてきてくれ。」

「了解した。・・・ん？吹雪か？」

「はい！おはようございます！田舎さん」

執務室には、提督、秘書艦の響さん、いまはいつていつて日向さん以外にもう一人いた。

外見はどこにでもいそうな女の子。セーラー服を着ていて完全に女子学生にしか見えない。

? 後ろから視線を感じる? そう思い後ろを見ようとすると

「そんなところに突つ立つてないで、君も入ればいいよつと。」

後ろからおもいつきり押された。押した人は、さつきまで秘書艦の机で話をしていたはずの響さん。

いくら相手が小柄な駆逐艦でも不意に押されれば誰でも前に進んでしまう。
そして

流「わあ～～～～～!?」ドタバーン
バランスを崩してコケる。

・・・・・・・・・・・・・・

提「おはよう流星。気分はどうだ？」

流「おはようございます。とくには問題ないと思います。」
簡単に挨拶を交わす二人。

提「ん、問題ないならいい。吹雪。」

吹「はい！」

そう呼ばれて提督の横に来る地味な女の子。

提「紹介しよう。今日一日君の面倒を見るように頼んだ。駆逐艦の『吹雪』だ。」

吹「特型駆逐艦吹雪型1番艦、吹雪です！本日はよろしくお願ひしますっ！」

流「と、特務艦 流星です！こちらこそ今日一日よろしくお願ひしますっ！」

元気が良くピシッと決まつた敬礼で自己紹介をする吹雪。それにつられて私もしつかりしなきや

と思い。自分なりのかっこが付く敬礼を返した。

提「よし、んじや吹雪、流星のこと頼んだぞ。」

吹「はい！了解しました！」

そう言つて、私と吹雪と呼ばれる地味な子は執務室を後にした。

吹「流星さん。朝食はもう済ませましたか？」

流「あ、いえまだです。」

そういうえば、朝起きてからまだ何も食べていない。さつきも同じようなことを考えていたきもするけど・・・まいつか。

吹「では！朝食にしましょう。」

そう言つて吹雪さんと一緒に食堂へ向かつた。

——『第十八鎮守府、食堂』——

吹「鳳翔さん。おはようございます！」

鳳「あら吹雪さん、おはようございます。あら？そつちの子は？見ない顔ね？」

そう言つてこちらを見る和服の上からの割烹着を着ている女性。

・・・なんとなくお母さんと呼びたくなるのはなんでだろう。

流「あ、えつと昨日建造されたばかりの特務艦 流星です。今後ともよろしくお願ひします！」

鳳「まあ！あなたが噂の新入りさん？」

噂？噂ってなんのこと？

鳳「私は航空母艦の鳳翔よ。こちらこそ今後ともよろしくお願ひします。」

そう言つてお辞儀をされたのでこちらもお辞儀を返した。

流「あの、先ほど仰っていた噂とはどのようなうわさなんですか？」

挨拶を交わして早々に今ある大きな疑問をぶつけた。

鳳「私もまだ『第十八鎮守府通信：朝』を見てなくてほかの子らの話でしか聞いてないけど、川内さんをぎりぎりまで追い追い込んだのでしょうか？」

川内さん・・・昨日演習して下さった人のことだ。

吹「ええ？！ そうなんですか??」

流「でも、負けちゃいましたけどね・・・。」

最終的に魚雷で気絶させられてしまつたあの演習。初めてにしてはできた方かな？

鳳「はい！お二人とももうすぐ八時ですよ？早く食事済ませてください。」

吹「うわわっ、もうそんな時間?! 流星さん！ 急ぎましよう！」

鳳翔さんの手を鳴らす音と告げられた時間に吹雪がはつとなつて急いで朝食のおかずの入つた皿を取り、ご飯をよそつた。私も急ぐ吹雪につられて朝食の準備をした。

吹「では、いただきます！」

流「いただきます」

——『第十八鎮守府、作戦司令室前廊下』——

吹「ここが作戦司令室です。大規模作戦や海域攻略作戦などでは、ここで作戦の概要を受けます。」

そう吹雪さんから説明を受ける。中は見せてくれないので中はみせられないんです。中はどんな感じなのだろうか？

吹「ここは、司令官の指示がある時まであかないで中はみせられないんです。」
流「いえ、大丈夫です。ありがとうございます。吹雪さん。」

そして、作戦司令室を後にして移動中。

? 「お？ なんだ吹雪。新入りの案内か？」

正面から眼帯を付けた目つきも柄も悪そうな人が歩いてきた。

吹「あ、天龍さん！ おはようおはようございます！」

紺色の服を身にまとっている天龍と呼ばれる女性。

流「初めて！ 特務艦 流星です！ 今後ともよろしくお願ひします！」

天「おう！俺の名前は天龍だ！ふふふ・・・怖いか？」

・・・へ？

怖い？怖いってなにが？

流「あ・・・えっと、その？・・・あ、あはははは・・・」

天「おい！微妙な反応するんじやねえよ!!」

いきなりの事で微妙な反応をするしかできない。

吹「あ、流星さん。大丈夫ですよ？天龍さん見かけによらずすごく優しい方なので」
天「ちょ、吹雪！余計なことは言わなくていいんだよ!!」

吹「え？でも事実じやないですか。遠征や任務では毎回駆逐艦わたしたちの事気にかけてくれて
ますし。」

へー。と思いながら天龍さんを見る

天「そ、そりや俺の目の前で誰かが死なれたらその日の寝つきが悪くなるからだよ！」
そう言いながら顔をそらす天龍さん。

天「そ、それよりも吹雪、鎮守府の案内の途中だろ？とつとと次の場所に案内してくれ
れよ！」

吹「ふふ、はいはいわかりましたよ天龍さん。では、失礼します！」

そう言つて次の場所へ案内された。

――『第十八鎮守府、医務室』――

吹「失礼します！流星さんの鎮守府の案内できました！」

そう言つてやつてきたのは、昨日お世話になつた『医務室』

氷「あら吹雪ちゃん。いらつしやい。」

吹「おはようございます！氷川丸先生！」

出迎えたのは、白い看護服を着た水色の髪をストレートにしている優しい雰囲気の女性。

昨日お世話になつた人、氷川丸先生。

流「昨日は大変お世話になりました。特務艦 流星です。」

氷「病院船の氷川丸よ。気分がすぐれなくなつたらいつでもいらつしやい。」

吹「あれ？氷川丸先生の事知つてたの？」

流「はい、昨日の演習の後ここで目が覚めました。」

氷「それはそうと、流星ちゃん？」

・・・?なんか急に寒気がした・・・。

氷「今朝勝手に走つてどこか行つちやつたけど。どこ行つてたのかしら？」

氷川丸先生の声のトーンが鋭くなつた。どうやら怒つてらつしやるようだ。

流「あ、その・・・い、いきなりの砲撃に驚いちゃつて、その。」

氷「・・・フウ。まあいいわ。元氣そうで何よりだし。でも今後は私の許可なく勝手

に医務室から出ないでちようだいね?」

寒気が収まつた。どうやら冰川丸先生は怒らせるとことん怖いらしい。

冰川丸先生と今後のことを約束して、医務室を後にした。」

——『第十八鎮守府、入渠ドッグ』——

吹「ここは入渠ドッグ。いわゆるお風呂場です。任務でのケガや疲れは、ここに入ればすぐに治つちやいます!」

お風呂かあ・・・そういうえば、昨日の演習の後ずっと医務室で寝たまんまだから、お風呂に入つてない。

流「あの、吹雪さん」

吹「はい?どうしました?」

流「いまから、お風呂に入ることつて・・・」

吹「あー・・・今は司令官からの許可がないと入れないんです。で、でも夜7時からは許可なしでも自由に利用できるのでそれまで我慢してください。」

えー・・・と思いながらしぶしぶ入渠ドッグを後にする。

——『第十八鎮守府、通信室』——

吹「ここは通信室です。出撃している人たちからの定時報告や他の鎮守府からの連絡を受け取る場所です。」

? 「おや！あなたは例の新人さん!!」

通信室に入るや突然目を輝かせてこちらに歩み寄つてくる人。

吹「この人は、通信室を任せられる青葉さん。」

青「どもっ、恐縮です。青葉ですぅ。昨日の川内戦について一言お願ひしますっ！」

流「ふえ!?え、えっとお・・・」

ピピピピッ！ピピピピッ！

私が慌てふためいていると青葉さんの後ろの機材から音がした。

青「おや？通信ですか：：後であなたの事でいろいろ聞かせていただきますので、コメント、考えておいてくださいね！」

そう言つて機材に向かい作業をする青葉さん。

吹「通信の邪魔にならないようにそつと出ましょう」
コメントがあ・・・何をいえばいいんだろう？」

――『第十八鎮守府、工廠』――

カーン、カーン、カーン

そのパーツこつちく この資材は……これどこ？ この2—4—11つて……吹「ここは工廠です。新しい娘の建造、装備の開発はすべてここで行われています。」「さらには、艦装のメンテナンスもここでやつてるのよ」

そう言つてこちらに歩み寄る2人組、一人はピンク髪で横髪をおさげ風にまとめ、水色のシャツの上にセーラー服を着ている

もう一人は頭髪は少し緑がかつた銀髪、服装はへそ出し半袖の黒いセーラー服、そして小さい

？「あの……何か変なこと想像しませんでしたか？」

流「い、いえ、別に……」

明「私は工作艦 明石。よろしくね！新入りさん。」

夕「私は兵装実験軽巡 夕張。よろしく！」

流「特務艦 流星です！よろしくお願ひします。」

吹「この二人は技術班の主任と副主任なんです。」

おお・・・それは今後ものすごくお世話になる人たちだ。

そう考へていると。

夕「ねえ、ちょっといい？」

突然話しかけてくる夕張さん。

流 「？はいなんでしょう」

夕 「あなたって確か、ミサイル撃てるんだよね？！」

ミサイル・・・対艦対ミサイルが撃てる、私の唯一の特徴である。

明 「お願い！あなたの艦装、ちょっとバラしてもいいかな??」

流 「はい、だいじょうぶ・・・・へ？」

今なんて言つた？バラす？バラすつていつたこの人？

夕 「明石さん、聞きましたか？」

明 「ええ、聞きましたとも聞きましたとも!!」

二人の目がシイタケになつてゐる。

流 「え、いやあの、ちょ、こ、困りま・・」

明 「そうと決まれば善は急げ！早速バラしますよ！」

夕 「フフフフ・・・技術屋としての腕がなります!!」

そう言つて、どこかに走り去つていく二人。

やばい！どうしよ!!私の艦装がなくなる!!!

流 「ふ、吹雪さん・・・ど、どうしましよう。」

顔を蒼くして涙目になる私・・・

吹「あー・・・たぶんあの二人ならバラバラにした後もすぐに組み立てなおして、またいつもの状態にまでできると思うし・・・き、きつと大丈夫ですよ！」

きつとじやふあんですよ！必ずつていってくださいよおお・・・。
そんなやり取りもあつたが、工廠を後にした。

——『第十八鎮守府、出撃ドッグ』——

吹「ここは出撃用のドッグ、任務や遠征に行くときは必ずここから出撃します。」

先ほどどの精神的ダメージもあり、あまり内容が頭に入つてこない。

吹「それと、こっちの横の建物が艦装保管格納庫で・・・」

流「え?! 艦装!! ジやあ今明石さんはここに?!」

艦装保管という言葉に反応する私。すぐにでも明石さんと夕張さんをとめないと！

吹「うえ?! いや、たぶんおのれ二人の事だから、自分用の整備室に持ち込んでこもつてるんじゃないかな・・・」

吹雪さんのその言葉を聞いた途端、力なくうなだれてしまつた。

吹「だ、大丈夫ですよ。全然心配しなくても問題ありませんよ！」

流「ほんとお・・・」

吹「ほ、本当ですよ・・・」

明後の方を見ながら慰める吹雪さん。

面と向かって大丈夫と言えないあたり、自身がないんだろうなあ。

——『第十八鎮守府、寮』——

吹「ここが私たちが寝たり休んだりするための寮です。」

鎮守府本館の真横に併設された、艦娘用の居住スペース。ここで、いろいろな人が寝泊まりしている。

流「あの、私の部屋つてどこになるんですか？」

吹「え？・・・さ、さあ？司令官からはとくには何も聞いてないですけど・・・。」

え？ そうなの？ ジやあ私の部屋はどうなるのだろうか。

吹「だ、大丈夫です！ 空き部屋はいっぱいありますし！ 後から司令官から指示が出ると思います！」

今度は面と向かっていってくれる吹雪さん。

無かつたらなかつたで、大問題ですけどね。

吹「後は、訓練所と演習場、資料室だけですね・・。」

まだほかにも部屋はあつたっぽいけど。無視してもいいのかなあ？

そんなことを考えていると。

キーンコーンカーンコーン

突然チャイムが鳴り響いた。

吹「あ、もうお昼ですか。」

どうやら、お昼を示すチャイムらしい。

吹「では、昼食を取りに食堂まで・・・」

吹雪さんが昼食を提案しようとした途端

ピンポンパンポーン

『特務艦流星、特務艦流星。至急食堂まで。繰り返す、・・・』

呼び出しをされてしまった。

吹「ちょうどいいですね。食堂まで急ぎましよう!」

流「は、はい!」

呼び出しの放送を聞いて食堂まで急いで移動することになった。

第5話 「自己紹介」

時間は少し戻つて

——『第十八鎮守府、執務室』——

吹雪と流星が通信室ぐらいに居る頃のお話

提「そーいや、響。」

響「司令官、なんだい？」

唐突に響に話しかける。

提「流星の建造に資材以外で何入れた？」

響「……。」

確かに不思議である。

一般的な資材（軍や補給鎮守府から受け取った資材）と開発資材のみで建造、または大型建造をすれば、「レギュラ」特務艦なんて建造されるはずがない。

つまりは、開発資材+各資材+ α をしなければ特務艦なんて建造されないはずだ。

響「……。」

提「黙つてないで、正直に話してみろ。」

響は黙つたまま、机の上の書類を片付けていた。

提「うんとかスンとか、なんか返事したらどうなんだ?」

響「スン」

スンつて・・・いや確かにうんとかスンとかとは言つたけどさあ・・・。
ジリリリリン! ジリリリリン!

唐突に執務室においてある電話が鳴つた。

響「はい、執務室の響だよ。」

青『どもっ、通信室青葉ですう。第十七鎮守府から通信が来ました。』

響「了解。司令官。第十七鎮守府から電話だつて。」

第十七鎮守府・・・ここよりも先に出来た鎮守府。あそこの提督とは、昔から仲が良
く。ときたま合つたりしている。

提「わかつた。こつちに回してくれ。」

あいつは眞面目だから下らない電話はしてこない・・・つまり、

提「・・・第十八鎮守府提督『八谷^{はちや}』だ。久しぶりだな」

七『ああ・・・久しいな八谷。第十七鎮守府提督『七塚^{しちづか}』だ。』

互いに簡単に挨拶を澄ます。なんか久しぶりに名乗つた気がする・・・。

八「どうした? 大規模作戦か?」

七『まあ、それに似たようなモノだ。』

八「似たようなモノ？それってどういう……」

七『お前の力を貸してほしい』

——『第十八鎮守府、食堂前廊下』——

放送を聞いてから私と吹雪さんは急いで食堂に向かった。
食堂まではそう遠くは無かつたので、すぐ着いた。

吹「あれ？ あそこに立っているのは……」

吹雪さんのその言葉を聞いて食堂前を見た。そこに立っているのは、

流「提督さんと……秘書艦さん……？」

食堂前に立っていたのは提督と秘書艦の響さんである。あつちの二人もこちらに気づいたようだ。

流「特務艦 流星。ただいま到着しました。」

そう言い吹雪さんと私は提督の前で敬礼をする。

提「おし、来たな。吹雪、君は先に食堂で昼食を取ってくれ。」

吹「はい！ じやあ流星さん。また後で！」

そして吹雪さんは食堂に入つていった。

提「流星。君にはこれからやつて欲しいことがある。」
やつて欲しいこと？なんだろう・・・

流「はい。なんでしようか？」

少し不安に思いながらやつて欲しいことを聞く。

提「なに、簡単な自己紹介をやつてもらうだけだ。」

流「じ、自己紹介・・・ですか？」

内容を聞いて、少しホツとする私。というより、さつきまで不安に思つていた私がバ
力に思えてきた。

提「そう、この艦隊で全員お前のことを知つてゐる訳じやない。そいつらに、艦種と
名前だけでも知つてもらおうと思つてな。」

確かに。この鎮守府に何人いるかわからぬけど。まだ挨拶していない人もきつと
たくさんいるだろうし。これを機に皆さんのことを探りたいと思う。

提「おし、そいじやあさつそく・・・」

響「ちよつと待つて。」

いきなり止めに入る響さん。

響「流星、君に一つ聞きたいことがある。」

流「はい、なんでしょう？」

さつきのこともあり、今度は軽い気持ちで返事をする。

響「君は、我々の敵を知つてゐるかい？」

敵・・・そういえば、まだ知らない。今朝、敵だ敵だとわめいていたのに、私はまだ敵を知らない。

響「その様子だと、まだ知らないみたいだね。」

私の反応を見て響さんはどうやら理解したらしい。

流「は、はい・・・」

響「まあ、昨日建造されたばかりだし、しかたがないね。」

しかたがないとはいえ、ずっと気になつていたことだ。私たちの敵つて・・・。

提「おーい、まだかく？」

そう言つて、食堂から顔を出す提督。どうやら先に食堂に入つていたようだ。

響「ま、この件は後でどうにかするさ。さ、行こうか」

そう言つて食堂へ向かう響さん。私もそのあとに続く。

——『第十八鎮守府、食堂』——

提「あーあーえーっと、我が艦隊の諸君？聞こえてるかな？」

どこぞのみんなのことが大好きな人みたいな口調で注目を集め提督。

提「みんなの大切な休憩時間を借りて話したいことが2つある。」

ウバツタジカンヲカエスデチイー

提「うるせえオリヨクルすつか？」

オリヨクルハイヤデチ！

そんなヤジとのやり取りで笑い声が発生する。

提「話は戻して、まず一つ目。」

そういうと笑い声は止まつた。

提「実際に合つた奴や、演習した奴、はたまた耳の良い奴から聞いた奴もいるとは思うが、我が第十八鎮守府に新たなる仲間が増えた。」

センダイネエサンヲヤツタコカシラ アササワガシカツタコカナ ヤツターナカ
チヤンノファンガマタフエルー アサノシンブンニノツテタコカナ
ざわざわとした話し声が聞こえる。

提「新しい仲間のことを知つてもらうために、艦種と名前だけではあるがこれから自己紹介をしてもらう。皆、しつかり覚えてやつてくれよ？」

そう言つて提督は私を手招きした。

私が提督の横まで来るとみんなの視線が全部私に集まつた。

ここにいる人が全員だらうか？あ、あの人ら三人服装似てゐる。あの人キレイだなあ。等々緊張のせいで色々考えてしまい半分パニツクになる私。

そんなとき、横にいた提督が私の背中を軽く押してくれた。

そのおかげではつとなり、自己紹介をしようとした途端に

響「うらー、時間の無駄だぞ！はやくしろ！」

と、私をあおつてくる。その行為に少しむつとしながらも感謝をして、

流「特務艦 流星です！よろしくおねがいしましゅつ！」

・・・囁んだ、

全員「・・・・・・・・」

やめて、 静かにならないで。 ものすごく恥ずかしい。

・・・パチ・・・パチ

誰かが拍手をしてくれた？

パチパチパチパチパチパチパチパチパチ

誰かの拍手をきつかけに食堂に居たみんなが拍手をしだした。

・・・と思つていたのだが、 横で提督がプルプル震えている。

よくよく見ると笑顔ではなく笑い顔の人や笑いをこらえている人、 爆笑しながら拍手

している人もちらほら見える。

みんな悪い人や怖い人では無い様で少し安心しながらも本当は今すぐにでも逃げ出したい気持ちでいっぱいだつた。

提「お、おし、自己紹介ありがとな。良い事故紹介だつたぞ？」
字がおかしい、字がおかしいですよ提督。

響さんから「じや、事故紹介も終わつたし、適当に席について」と言われ、少し顔を下に向けながら食堂の端の席に座る。

提「んで、次に二つ目！」

少しざわついている中、提督は話を続ける。

提「我らが敵、『深海棲艦』がとあるポイントで集結しているとの情報がきた」
その言葉に場の空気が一変して、鋭くなつたのがわかる。

提督の我らが敵という言葉からすると、その深海棲艦というものが敵だということは分かつたような気がした。

提「まだ詳しい規模、正確なポイントが分からぬ。ただ近々第十七鎮守府と合同でこの敵連合艦隊を討つということを知つておいてほしい。以上だ！」

ババッ!!!

みんなが一斉に立ち上がり、敬礼をする。私は少し遅れて敬礼をする。

響 「じゃ、お昼に戻つていいよ。」

響さんの間の抜けた一言を聞いて、食堂は騒がしくなる。

響 「あ、ごめんそのまえに！以下の者は、本日ヒトサンマルマルに執務室まで出頭するよう！」

その言葉を聞いて、ほんの少しだけ静かになる食堂。

響 「特務艦 流星、駆逐艦 吹雪、正規空母 大鳳。以上、よろしく」

そのことを伝えると、響さんは食堂を出て行つた。

正規空母 大鳳さんってどんな人だろう、なんでおばれたのかな？等々考えながら食事をしていると

？「お前か？川内をぎりぎりまで追い込んだっていう新人は？」

突然横に誰かがやつてきた。眼帯を見て天龍さんかな？と思つたが服装や髪形、体型等多くの場所が違つていたので天龍さんではない

木「おつと、自己紹介がまだだつたな。俺は球磨型軽巡5番艦、『木曾』だ。よろしくな」

流 「あ！はい！こちらこそよろしくお願ひします！」

木「そうかしこまらなくていいぞ？俺たちは『仲間』なんだからさ？」
？「なにクセエこと言つてんだ？木曾」

また誰かが近くによつてくる。今度は先ほど（前話）作戦司令室前廊下であつた『天龍』さんだ。

木「あ』？ んだよ別にいいだろうが。可愛い後輩にかつこいいとこみせるぐらいさあ？」

天「だつたら戦場でみせろよ。お前この間の戦闘、魚雷全部外したつてきいたぜ？」
木「ちよ、バカ！ ありや太陽の逆光が目に入つて狙いが定まらなかつたんだよ！ それにお前だつて、相手駆逐艦のみの編成にもかかわらずお前だけが大破して戻つて來たつて聞くくじやねえか！」

天「なんだとこの野郎！」

木「やんのか？ あ』あ』？」

わたしの目の前で喧嘩になりそうになる。私は慌てふためいてどうしようもなかつた

？ 「もう二人とも、いきなり新人の前で喧嘩はやめなさいよ。」

？ 「そうですわよ、みつともない。そんな一人に『馬鹿め』と言つて差し上げますわ。」
そんなとき、また別の人があつてきた。

衣「あ、あたし青葉型重巡2番艦の『衣笠』。困つたことがあればおねえさんに相談しなさい。」

高 「高雄型重巡『高雄』よ。よろしくお願ひいたしますわ」

? 「おおつ？喧嘩ですか？記事にしちやいましょうか??」

あ、この聞いたことがある声は・・・

青 「どもつ！先ほど通信室でお会いしましたが改めて自己紹介を！青葉型重巡『青葉』ですっ！」

木曾さんと天龍さんの喧嘩を境に、食堂に居た人々が自己紹介に来た。

日 「伊勢型航空戦艦2番艦の『日向』だ。もう毎朝さわぐなよ？」

伊 「伊勢型航空戦艦1番艦の『伊勢』よ。なになに？日向から聞いたけど、目覚まし砲で「人大騒ぎしたんだつて？」

流 「だ、大丈夫ですっ！もう騒ぎませんよ！」

綾 「あ！あの朝敵だ敵だつて騒いでいたのは流星さんだつたんですか！？・・・あ、特II型駆逐艦綾波型1番艦『綾波』です！」

流 「うう・・・もう掘り返さないでください・・・恥ずかしいので。」

龍 「いんや、もうしばらくはそれでいじられるでえきみい・・・あ、航空母艦『龍驤』や。」

龍驤さんのその言葉にショックを受けて少し固まる私。

雷 「心配しなくても大丈夫よ！この特III型駆逐艦暁型3番艦の『雷』様がついてるん

だから！」

電「雷ちゃん。流星さんがなんの心配しているかわかつてているですか？あ、暁型4番艦『電』なのです。」

暁「そーよ雷！この特Ⅲ型駆逐艦暁型1番艦『暁』というレディがいるんだから！なにも問題ないのよ！」

響「ねえさん。それじや答えになつてないよ。あ、暁型駆逐艦2番艦『響』だよ。後にロシアに見世物として売り飛ばされて『ВेरнЫЙ』^{ヴェールヌイ}と名前を変える不死鳥だよ。」

流「な、なんかいまサラつとすごいこといいませんでしたか?!」

長「ま、事実ではあるがな。長門型戦艦1番艦『長門』だ。よろしく頼む」

流「あ、はい！よろしくお願ひします」

長門さんの後ろの方から、強い視線を感じ一瞬止まつてしまふ私。

誰のか確認しようとする前に、目の前に誰かが現れた。

それは、私が最初にお世話になつた人

川「ドーカ、リュウセイ＝サン。センダイデス！」

ナムサン！センダイ＝サンだ！手を合わせ、独特な口調でアイサツをするセンダイ＝サンだ！

あ、このパターンは・・・咄嗟に昨日の戦闘での出来事をおもいだす。

流「ドーモ、センダイ＝サン。特務艦 リュウセイデス！」

目の前のセンダイ＝サンと同じく手を合わせ、同じ口調でかえす私。なぜなら、アイサツを返さないのはシツレイなのだから！

神「姉さん。眞面目に自己紹介してください。川内型2番艦『神通』です。よろしくお願ひしますね？流星さん。」

深々とお辞儀をされ、礼儀正しく自己紹介をする神通さん。

流「あ、ご丁寧にありがとうございます。流星です。今後ともお願ひします。」

それにつられて、こちらも深々とお辞儀をする。

川「なによ神通。それじや堅苦しいでしょ？私は、もつと気軽に会話ができるようにと思つてさあ・・・」

那「そうだよおねえちゃんたちっ！アイドルは笑顔が大事！艦隊のアイドル『那珂』ちゃんみたいにもつとスマイルスマイル！」ニコツ

満面の笑みで自己紹介をする那珂さん。

後ろにいた神通さんが大きくため息をついて

神「姉さん、那珂ちゃん。少しお話があります。」

そう言つて、川内さんと那珂さんを引っ張つていき、正座させ、お説教が始まつた。

？「さすがは『鬼の神通』怒らせるととっても怖いっぽい・・・」

時「そうだね……。あ、僕は白露型駆逐艦2番艦『時雨』。『佐世保の時雨』とも、呼ばれていたよ。」

夕「夕立は白露型駆逐艦4番艦『夕立』よ！ よろしくお願ひするつぱい！」
吹「こ、この流れは、私も自己紹介する流れね……特型駆逐艦『ふぶ』「ちょっと失礼」はうつ！」

吹雪さんの自己紹介を割って入つて来たのは、髪は短めに纏めた黒髪のサイドテール。青い袴を身にまとい、こちらに冷ややかな視線を送つてゐる。

しばらくじつとこちらをにらみつける……しかし、そんなに恐怖を感じないのはなぜだろう？

そしてしばらくして

？「こら。あまり新人をいじめちゃだめですよ？ 加賀さん？」

また別の人気が先ほどまでこちらに冷ややかな視線を送つていた人にやさしくチヨツプを入れる。

加「なんですか？ 赤城さん。私はいじめる気なんて毛頭ありませんよ？」

赤「初対面の人にそんな目でにらみつけられたら怖いですよ。ね？」
突然こちらに話を振られる。

流「え？ は、はい……？」

突然のことでの曖昧な返事をしてしまう私。

赤「ほら加賀さん。めつ、ですよ？」

加「ですから、いじめる気はありませんよ。ただ私は、この新人が私たちの足を引っ張らないかどうか心配していただけです。」

その言葉を聞いて、私は下をむいてしまった。

不安が頭の中で増幅していく・・・みんなと歩調を合わせられるのか？敵味方の区別

がつくのか？等々色々考えてしまう。

赤「何を言っているんですか加賀さん。まだこの子は建造されて間もないのですよ？誰でも最初はうまくいかないものです。しつかり鍛錬を積めばきっと、この艦隊の旗艦になりますよ。」

その言葉を聞いて、私はハツとした。

そうだ、まだ建造されたばかり。これから頑張つていけばいいんだ！

流「あの！ありがとうございます！！・・・えっと」

赤「そういえば、自己紹介がまだでしたね。正規空母、一航戦『赤城』よ。」

加「・・・加賀型戦艦『加賀』よ。よろしく。」

流「はい、よろしくお願ひします！」

へえー、二人とも似たような恰好をしているから、てつきり同じ艦種なのかなーって

思つていたけど……

龍「いや、なんでやねん！ 加賀！ あんたは正規空母やろ！ 一航戦やろ！」

流「……へ？」

え？ 加賀さん空母？ 戰艦？ 加賀さんの隣でプルプル震えている赤城さん。

加「……龍驤、あなたもう少しネタというものを勉強することをお勧めします。」

龍「なんでやねん！！」

加賀さんと龍驤さんのやり取りで回りが笑い出す。

加「ハア……もう少し、あなたであs（ゲフン）え？ 遊ぶ？ 遊ばれていたの私？」

加「改めて、正規空母、一航戦『加賀』よ。あなたの活躍、期待しているわ。」

さつきの冷たい視線とは変わつて、今度はあたたかな視線を送つてくる加賀さん。

？ 「うむう……さすがは一航戦。やることがちがうでちい……」

また別の二人がこちらに近づいてくる。すると髪を一つに縛つた水着を着た人が

イ「伊号潜水艦『伊168』 イムヤよ。お前をいつでも狙つているわ！」

流「うえ?! 私ねらわれているんですか?!」

？ 「い、イムヤがこわれたでち?!」

イ「なによ？ 海のスナイパーと呼ばれてたんだから。こーいう自己紹介もありでしょ

?』

？「そ、そだけどさあ・・・？つてそのセリフ、大丈夫？」

イ「なにがよ？」

？「いや・・・やめとくでち。」

海の狙撃手（スナイパー）だから、狙つている、なるほど

と、理解していた横で話を進める二人。

ゴ「ゴーヤは伊号潜水艦『伊58』ゴーヤつていうでち。」

流「はい！ よろしくお願ひします。」

いつの間にか、食堂に居た人全員が私の周りに集まっていた。

そして、自己紹介大会が開かれていたのだつた。

夕「さつきもあつたけど、この流れ的には自己紹介をするべき！ 兵装実験軽巡『夕張』。よろしく！」

明「さつきもしたけど、流れ流れ。工作艦『明石』よ。」

その二人を見たとたん。私はこの二人に艦装が壊されていることを思い出す。

流「わ、私の艦装！ すぐ返してください！」

明「心配しなくても大丈夫！ もうバラバラにして、図面取つてあるから！」 bグツ
流「どこがです？」

夕「あとは、組み立てるだけね。」

流「うう・・・不安です。」

そんなやり取りをしていると。

?「はいはい！流星さん！吹雪さん！！もうすぐじかんですよ!!」

元気よく名前を呼ばれ時間という言葉で時計を見てみると。ヒトフタヨンゴー。確かに集合時間は近いが・・・。

大「あ、申し遅れました。正規空母『大鳳』よ、今後ともよろしくお願ひともするわ
ね」

大鳳さん・・・確かこの人も呼ばれていた・・・。

大「みんなとの自己紹介も終わつたし、集合時間もそろそろだから、早く食事澄まし
なさい！」

大鳳さんにせかされて、私と吹雪さんは、食事の手を急がせる。

第6話 「出撃」

——ヒトヨンサンマル『第十八鎮守府、資料室』——

大「——以上が我々の敵、『深海棲艦』の現状まででわかつてることです。」

「ここは過去にあつた戦術や作戦、敵である深海棲艦の図鑑や兵器図鑑等が置かれている『資料室』

多くの本に囲まれている中、本を読むためのスペースで移動式の黒板を引っ張り出して、正規空母『大鳳』先生による深海棲艦に関する授業が開かれていた。

大「理解できましたか？流星さん。」

流星「な、なんとなくですがわかりました……。」

吹「まあ、いきなりこんなにいっぱいの事言われてもピンとこないよね……。」

流星「うう……。」

突然現れ、世界中の海を制圧したモノ……『深海棲艦』、それに対抗できるのは……

私達古の船の魂を受け継ぎしモノ『艦娘』

そのほかにも、姫や鬼、駆逐級や戦艦級など種類がある……。

他にもいろいろ教わったが、情報が多くて頭の整理が追いつかない。

大「まあ、百聞は一見に如かず。この後の巡回任務で、うまくいけば会敵しますし、そこで実際に見た方が早いと思います。」

吹「でも響ちゃんもひどいよねー。いきなり『ヒトゴーマルマルから任務に出てもらう』つて。」

そう、この授業の後は初の実戦が控えている・・・。

——ヒトサンマルマル『第十八鎮守府、執務室』——

時は戻つて、昼食を食べ終え、大鳳さん、吹雪さん、私の3人は秘書艦の響さんに呼ばれ、執務室に来ていた。

響「さて、時間も押して手短に話そう。流星、君にはこの後すぐに我々の敵である『深海棲艦』について学んでもらう。」

敵・・・そう、私はまだ敵のことを知らない。提督が食堂で話していた内容も、ただただ敵がどこかに集まっているだけ。としか分からぬ。その敵がどんなに恐ろしいものなのかも全く分からぬ。

響「そのために、吹雪だけじゃかなり心もとないからこっちの正規空母『大鳳』を中心にして学んでくれ。」

流「は、はい！わかりました。」

吹 「あ、あの～・・・」

響 「ん？なんだい、吹雪？」

吹 「そ、そんなに私だけじゃ・・・不安です・・・か？」

響 「うん不安。」

即答である。吹雪さんの質問に対しても響さんはすぐさま答えた。

その答えを聞いて、放心状態になる吹雪さん。そんな吹雪さんをほつといて話を続ける響さん。

響 「大鳳、君にはすまないが、流星に深海棲艦についてヒトヨンサンマルまでに叩き込めることが全て叩き込んであげて欲しい。」

大 「ヒトヨンつて・・・1時間半で?!せめてもう1時間くらいほしいのですが・・・
響 「ごめん、流星をすぐにでも戦えるようにしたいからあまり時間が無い。それに流星にはヒトゴーマルマルから巡回任務に出てもらうから。」

巡回任務?つまり・・・

吹 「しゅ、出撃?!まだろくな訓練もしていないのに?!」

あ、吹雪さんが帰ってきた。

響 「訓練なら問題ない。流星は十分に自分の艦装は扱えてる。」

大 「戦術や連携は?」

響 「それに関しては数しかないさ。」

大 「実戦を積んで体で覚えろ……ですか」

吹 「そ、それじゃあ危険すぎますつ！ いくら大規模作戦が近いからって！」

流 「わ、わたし……やります！」

吹雪さんが猛反対する中、私は声を出す。

流 「た、確かにまだ皆さんのはよく分かつてなく、上手く連携を取れるか不安ですが……で、でも……『吹雪さん！』 つつ？」

大鳳さんもしぶしぶ許してくれた。

大 「本人が意志を固めたのですから、それを無駄にしないよう私達で支えてあげましょう……。」

大鳳さんの表情が苦々しい。大鳳さん自身、あまり良くは思つて無い様だ。

吹 「……わ、わかりました……」

吹雪さんもしぶしぶ許してくれた。

響 「よし……それじゃ今日のこの後のことを簡単に紙にまとめたから目を通しておいて。」

13:00

『正規空母』↑ここ重要 大鳳、吹雪による深海棲艦について

ドッグ集合・出撃「巡回任務」

（15：00）

任務終了

終わつたら、執務室までまた来てね♡

大・吹・流「…………」

響「よし、じゃあ早速取り掛かつてもらうよ。」

色々突つ込みたい、そんな風に思つていると。

大「あ、あの……」

響「ん？なんだい。もう解散していいよ？」

大「『正規空母』↑ここ重要 つて……どうゆう意味？」

顔面を引きつりながら質問する大鳳さん。

響「……ハア、そんなくだらないことであまり時間を使いたくないんだけど？まあ、一様答えておこう」

やれやれ、といった様子で話し始める響さん。

響「君の体型、完全に『私達』駆逐艦と変わらない、というかそれ以下かもしけないだろ？」

その言葉を聞いて、大鳳さんの中のナニカが切れるような音がした。

大「だれがペつたんこじやあああああ!!!!」

急いで吹雪さんと私で大鳳さんを抑える。その時大鳳さんの腕を抱く形で止めてし

まつたので、私のモノが大鳳さんに当たる。ましてや吹雪さんのモノまで当たる。

大「ああそうですよ！私なんて『海防艦』と同じですよ！駆逐艦にも負けますよ～ん
ちくしょう！！」

二人の大きさを感じて開き直る大鳳さん。心なしか大鳳さんの頭の上に『大破』の2
文字が見えたような気がした。

——ヒトヨンヨンゴー『第十八鎮守府、出撃ドック』——

立「巡回任務とか・・・つまんないっぽい～」

時「だからって、油断しそぎはよくないよ夕立？」

大鳳さんたちと別れて、すぐに出撃ドックに向かつた。出撃ドックの中にはもうすでにほかの人たちが集まっていた。

木「ん？ 来たか『新入り』。よし、これで全員揃つたな。」

どうやら私を含め5人で巡回任務を行いうらしい。

木「よしお前ら！ よーく聞け！ 今回の巡回任務の旗艦を務める雷巡の『木曾』だ！」

ライジ Yun という聞きなれない言葉に疑問を抱えていると

綾「雷巡とは、『重雷装艦』の略称で、簡単に言えば魚雷をこれでもかと言うほど載せた巡洋艦のことです。」

流「あ、ありがとうございます。えっとたしか…」

綾 「駆逐艦『綾波』です。」

流 「あ、ごめんなさい。まだしつかり名前覚えてなくて」

綾 「大丈夫ですよ。」

木 「コラそこ！話聞いてたか?!」

そう言つてこちらを指す木曾さん。

立 「ボスイ……ボスイ……」

木 「タ立！寝るな!!」

立 「ぼ?!敵?!レツツパーティータイムっぽい?!」

時 「タ立、まだ出撃もしないよ?」

木 「お前ら緩み過ぎだ！」

そうこうしている間に出撃予定時間5分前になり出撃ドックにビイイイイイと音が

鳴り響く。

木 「む、もうこんな時間か。各員！出撃!!」

そう言つて各自出撃用のレーンへ入つて行く。

流 「あ、あの綾波さん！」

綾 「はい？なんでしょう？」

綾波が6レーンある内の5番レーンに入る前に呼び止める

流「私って、何こ『流星さんは4番レーンみたいですよ?』

私の質問を聞き終わる前に答える綾波さん。

綾「各レーンの上の方に名前が出てるので、そこを見て何処から出るのか分かるんです。」

よく見ると各レーンの上の方にパネルがあり、そこに『木曾』『夕立』『時雨』『流星』『綾波』の順に名前が表示されていた。

綾「初めてならびっくりするかも知れないですけど、落ち着いて出撃してくださいね? では!」

そう言つて5番レーンに入つて行く綾波さん。

びっくりするつて何だろうと思ひながらも綾波さんに教えてもらつた通りに、上のパネルを確認して、4番レーンに入る。

出撃用レーンの中はとても長細く、横には人三人並べるほどである。入つてすぐ横には六角形の台とそこから真っ直ぐに伸びる水路。台の上には『出撃』の2文字がうつすらと光っていた。

なんとなく、ここに乗るんだろうなと思ひ、少し戸惑いながらも台の上に水路を向くように乗る。すると台が少し下がり前に出る。前に出ながら大腿部魚雷発射機が取り付けられ、手持ち武器の主砲、観測機発着装置（バックラーのようなものの正体）が出

てきてそれを手に装備する。さつきの台が下がつて来ているのかどうかはわからないが、だんだん水位が上がつて来て、いつの間にか水の上に立つていて。それを確認した途端に背中に軽い衝撃が走る。艦装が取り付けられたのだ。そのまま艦装に押されるように徐々に加速していく。物凄い速さで長細い水路を少し目尻に涙を浮かべながら走らされて段々と出口であろう光が見えてくる。辺りが急に明るくなり少し目を細める。ゆっくりと目を開けて前を見て、前方に私以外の人達が集まっているのを確認する。

木「新入り！遅いぞ！」

流「す、すみません！」

木「まあいい。各員！単縦陣！！」

全員「」「了解！」つぽい』』

えーと確か単縦陣つてことは……

時「旗艦を先頭にして、そこから夕立、僕、君、綾波の順に並ぶよ。」

流「あ、ありがとうございます」

悩んでいると、綾波さんでは無い黒髪の人、たしか『時雨』さん？だつけ??が教えてくれた。

そのまま、教わった通りの場所に付き、しばらく海の上を走る。

第7話「戦闘」

——『鎮守府近海』——

青い空、白い雲、キラキラと光を反射する海。

木「各員、定時報告!」

立「こちら夕立、異常なしつぽい!」

時「こちら時雨、問題ないよ。」

流「こ、こちら流星、周囲に反応無しです!」

綾「こちら綾波、異常無し。」

最初は少し戸惑つた定時報告。何回かやっているうちにうちにほんの少しだけだけ
ど馴れて来た気がした。

立「あ”’ヒマつぽいい’す”’く暇つぽいい’

時「夕立、油断しすぎだよ。」

木「まあ、確かに暇だけどな」

綾「しかし変ですね。この辺りはよく敵と出会うことが多いはずですけど…」

木「でしたら、もつと警戒したほうが…」

立「でも暇なものは暇つぼいい」

木「もしかすると、昼に提督が言つていたように敵が何処かに集まつてゐるせいであら辺に敵がいないのかもな」

そういうば、私の事故紹介の後に提督さんそんな事を言つっていた気がする。そんな事を考へてゐると音が聴こえた。

何の音だろう?と思ひヘッドホンを付け、背中の擬装から細い糸を海の中に入れ、ソナーを開かせる。

「」

いくつか聴こえる音、これは

綾「どうかしましたか?」

突然の呼び掛けに少しひっくりする。綾波さん以外の人たちも私の事を見ている。

木「なんだ? 敵でも見つけたか?」

流「あ、いえ・つい先程、何か音が聴こえたもので」

その言葉を聞いたとたんに、空気が引き締まる感じがした。

時「木曽、確かにこの方面に遠征に出掛けてる人たちつて」

木「ああ、いないな。」

立「とーするーとおー!!」

木「流星、その音について詳しく話せ。」
流「は、はい！1時の方向、このままの速さで進めば10分程で目視可能かと思います。」

綾「数や艦種は？」

流「数は4、艦種についてはまだよく分からなくて…」

時「じゃあ、4つの音のうち、大きい音や小さい音はいくつあるか分かるかい？」

流「ちよつと待つてください…」
時雨さんの質問を聞いて、もう一度音に集中する。

流「他よりも大きい音が1つ、後は全部同じような音です。」

木「それだけ分かれば十分だ。綾波！」

綾「鎮守府に打電します！」

木「よし！テメエら！戦闘準備だ！！」

立「さあ！素敵なパーティをしましょ！！」

戦闘「その言葉に少し体が強ばる。」

昨日のような演習ではない、実戦。

聞いただけでもまだ実物を見たことがない、敵。

初めての艦隊戦。

いろいろなことが砲を持つ力を強くさせる。

海を滑る足を重くさせる。

額に汗がにじみ出る。

私以外の人たちはやる気、殺る気に満ちている。

いろいろなことを思い、不安になりながらも隊列を治し、敵に向かって舵をとる。

木「弱い。弱い弱い弱すぎる!!!」

木曽さんのその言葉と同時放った砲弾は敵に見事命中。そのまま敵は炎を上げながら海中に沈んで行く。

時「今のが最後みたいだね。」

立「むう、まだまだ撃ちたりないい！」

綾「夕立ちやん落ちついて！」

流「・」

敵は話や資料で見た、「軽巡へ級」を旗艦とし「駆逐イ級」で編成された水雷戦隊。
そこまで怯える必要はない。
筈なのに私は何も出来なかつた。

砲を撃つ機会は何度もあつた。

魚雷だつて、撃とうと思えば何回でも撃てた。

それなのに。

目が合つたとたん、砲を向けたとたんに、

身体が言うことを効かなくなつた。

頭では、撃て、沈めろ、当たる、イケると指示が出ていたのだが身体がその命令を受け付けない。

たぶん、頭では自信が有つたのだが、身体は

「いや？おーい。流星？」

流 「ふ!? ふあい!? 私が流星でしゅ?!」

時 「ち？ 近くに他に敵がいないか調べて欲しいんだけど…だ、大丈夫かい？」

流 「へ…あ、はい！ 今調べてみます！」

時雨さんの呼び掛けで我に返り、急いでソナーを展開する。

時 「うーん…」

綾 「どうしたんです？ 時雨ちゃん」

立 「流星のこと心配してるっぽい」

木 「なんだ？ 被弾でもしたのか？」

時「いや、そうじやないんだ。さつき声をかけたとき凄く不安そうな顔をしてたから
ちよつと気になつてね。」

木「そうか??」

綾「というより、夕立ちゃんよく分かつたね?」

立「うん。時雨のことなら何だつて分かるよ! 例えは、昨日トイレで「ゆうだち?」は
いごめんなさいなんでもないです」

綾（なんだろ・うーん気になるつ!）

流「私が分かる範囲では、周囲に敵と思われる反応はありません。
ソナーを仕舞いながら調べた結果を知らせる。

木「よし! 任務に戻るぞ!」

木曾さんの号令を聞いて、隊列を組んで移動する。その間、敵と出会うこと無く鎮守
府にたどり着いた。

——————
ヒトキユウサンマル『第十八鎮守府、執務室』—————

コンコンつとノックをする音が聴こえた。

響「どうぞ」

入室を許可する。

入ってきたのは

木「失礼する。重雷装艦『木曽』、入るぞ。」

流「失礼します、特務艦『流星』入ります！」

木曽と流星だ。

そのまま木曽は司令官に今回の任務について報告を始めた。流星は

流「・」

その場で立ち尽くしている。

響「流星、君はこつちだよ。」

私に呼ばれ、こちらに移動してくる。あのまま呼ばなかつたら・あ、そつちの方が面

白かつたかも。

流「あ、あの・」

響「任務お疲れ様。どうだつた、初めての敵は？」

その言葉を放つたとたん、少し目線を下に反らした。

少し沈黙が続いたが、流星が口を開いた

流「私は・」

響「ま、多分その様子じや、怖くて何も出来なかつたつてことが分かるけどね。」

流「うううつ・」

凶星を付かれたからか、少し唸つて今度は顔を下に向ける。

響「ま、今日は初めてだつたし、多目に見ておくよ。でもこれだけは覚えておいて。」

流「・」

響「次、君が恐怖したとたん。必ず誰かが海に消える。」

流「！」

その言葉を放つたとたんに流星は目を丸くし、唇を噛みしめた。

その後、流星の部屋の鍵を渡し、「今日はお疲れ様。もう休んで明日に備えてね?」と言つて、流星を下がらせた。

提『次、君が恐怖したとたん。必ず誰かが海に消える』か・なかなか怖いこと言つたな

響「フフ怖? 司令官フフ怖ー?」

提「いや別に。ただある意味、それは納得したと思つただけだ。」

響「だろう? 秘書艦としての威厳を取り戻せたかな?」キリリ

提『まあ、今までー500位のが、さつきのセリフで+100ポイント、そして最後のドヤ顔でー100ポイントかな?』

響「結局ー500ポイント!」

そんな下らない会話と笑い声が、執務室に広がつた。

「入渠ドツク」

「はああああああああああああああ」

建造されて初めて入るお風呂

周りを見ると、解放時間なぜいか、多くの人で賑わっていた。

流

響さんから言われた一言。

「次、君が恐怖したとたん。必ず誰かが海に消える。」

その言葉が頭から離れない。

ご飯のときも今もずっと離れない。

もしかして、私

流「ふにやあ!?」

背後から急に胸を揉まれ変な声を上げてしまう。

青「この重さ！このサイズ！これはまさに、戦艦級!!」キリツ

後ろにいたのは青葉さんだつたはず

「ちょ！ いきなりなにするんですかっ！」

「取材ですよ取材。あなたのことを知りたい人はまだまだたくさん居ます！その

人たちに

代わつて私が色々見て聞いて触つてあなたのこと記事にして、少しでも分かつて貰い、

もつと知りたいと思うようになつてもらうためです！」

な、なるほど・青葉さんだつたよね・の熱弁について納得してしまう。

青「というわけで、次はお尻の方を・ブツ!?」

手をわきわきさせてこちらに近づく青葉さんでもういいよねあつてるよね・を風呂桶で沈める

衣「青葉姉・あんたは毎回新入りに変なことしすぎ・」

青葉さんであつてたよ・を沈めたのは衣笠さんつぎはこつちだよ

衣「ごめんね？うちの姉が迷惑かけちゃつて」

流「あ、いえ！大丈夫でふにゃん！」

響「確かにこれは・戦艦級！！」

次に揉んできたのは響さんこつちはわかる

響「だがしかーし！この人の超弩級オペーイには程遠いなあ！」

そう言い放ち、立ち上がり手をヒラヒラして紹介する

響「見よ！重巡でありながらどこぞの正規空母を圧倒的に凌駕する！このサイズをお

!!

湯煙の中から二つの風船をゆらゆら揺らしながらこちらに来る人、それは!!

響 「超弩級おっぱい型重巡、『高雄』さんd」

高 「誰がおっぱい型重巡よ!」

響さんが言い切る前にげんこつをかます高雄さんしようかいされたからわかる

時 「でも本当に大きいよねえ」

流 「し、時雨さんまで何を言うんですか」

そんな風におっぱいの話題で盛り上がる入渠ドツク。そんな中、嫉妬と殺意がこちらに向いて放たれていることに気がついた。

その方向を見るとそこには

響 「流星、あっちをみるんじゃない。あれはもたざるものたちよ。」

響さんに言われて見るのをあわてて止めた。というより、一瞬チラツと見えたが、ものすごい形相をした3人がそこにはいた。

暁 「私も大きくなつたら、もつと大きくなるかな?」

電 「電は毎日牛乳のんでいるから大丈夫なのです。」

雷 「どうだろうね」

時「で、どうしたんだい？任務からずつとうつむいてばかりいる様だけど？」
時雨さんに言われて、さつきまで考えていたことを思い出す。

すると自然に顔が下を向き、水面に写った自分と目が合う。

時「あ、ごめん。辛い事だつたら無理に話さなくてもいいよ？」

衣「なに？ 悩み事？」

流「あ、いえ。たいしたことじやないです……」

そういうつて湯壺から出ようとしたらとたん。

響「逃げるのかい？」

響さんに言われて、足をとめる。

響「まあいいよ。今は海の上じやないし。好きにするといいさ。でも……

次海に出た時、今の君では仲間が沈むだろう

ね？」

またあの言葉が頭の中でループする。

恐怖。沈む。私のせいで。誰かが。仲間。だつたら私は

ザバアアアアアアアア

流「うひいい！」

頭から急に冷たい水を浴びせられる。

身体が急に冷えたのですぐに湯壺に入る。

「悩み事があるのなら、話した方がすつきりするし、何かアドバイスが貰えるかもしけんぞ？」

そういうて隣に座つたひとは、

日「それに、何があつたのか気になつて夜眠れなくなるやもしれん。」

航空戦艦の『日向』さんだ。

流「・」

日向さんに言われて今思つてゐることを全て話してみた。

「かくかくしかじか まるまるうまうま」

日「ふむ・なるほど」

時「何も出来なかつた・かあ。」

衣「響ちゃんも重たいこと言うわねえ」

響「秘書艦の威儀を出してみた」キリッ

話終わつた後、少しだけだが気が楽になつた気がした。

時「でも、別に何も出来なかつたわけではないと思うよ？」

流「でも、戦闘中、敵を見ても何も出来なかつたんですよ？」

時「というより、血の氣が多い2人が暴れ回つていたし。そのお陰で僕も全然撃つて

ないよ?」

日「それに聞けば、流星が先に敵を見つけることが出来たから、スムーズに勝つことができたのではないか?」

時「そうだよ。」

衣「それに今回の戦闘が初めてだつたわけでしょ? だつたら大抵そんなもんよ?」
皆から励まされているが、やはりあまり納得しない。

響「それに、執務室で言つた言葉、よく噛んで理解してみてよ。」

衣「あー、『君が恐怖したとたん。必ず誰かが海に消える。』って言葉?」

響「そうそう。」

流「噛んで理解つて、そのままですよね? 私が怯え動けなくなつたら、他の仲間が犠牲になるつてことですよね?」

響「甘いね」

時「確かに」

衣「甘い」

日「砂糖のようだな。」

全員が口をそろえて甘いと言つた。

なんだか納得いかなくて、少し頬を膨らませる。

響 「誰も敵に恐怖した場合のみとは言つてないよ？」

流 「・どういうことですか？」

日 「そうだな。例えば長門。」

突然の長門さん

日 「あいつは時たま素手で敵を殴り沈める。」

・へ？

時 「僕の場合なら夕立。この間チ級の首に噛みついて沈めたところをみたよ。」

いやいや？ へ？

時 「噛みついた理由が、『お肉と間違えたっぽい？』だつて。」

どこをどうして間違えるんだろう。

衣 「あたしの場合は夕張。」

なんだろ。擬装でもバラバラにされたのかな？

衣 「ちよつとヲ級が調子にのつてかどうか知らないけど。急に胸を張つてさあ、」

・あ（察し）

衣 「そのとたん、夕張走り出したと思つたらヲ級の顔面をパンチしたんだもん。」

・うん。

響 「私の場合は電かな？」

うーんと、確か栗色の髪を後ろで縛っている人だつけ？

響 「電にどつきりとしてクリーム砲を撃ち込んだときだけど」

何してるんだろこの人。

(怒り) 「ちようどその時機嫌が悪かつたらしくてクリーム砲を撃ち込んだとたん。頭に錆

「「「」「」」

響 「・とまあ、こういつた様に、仲間に恐怖することだつて有るんだ。」

あ、この人今無かつたことにしようとした。

日 「それに、一度だけ動け無かつたからつてそれがどうした。」

時 「そうそう。次のチャンスで巻き返せばいい。」

衣 「小さな失敗したから何よ？ その失敗を糧にすればいいのよ！」

響 「お昼に赤城に言われたでしょ？ 『誰でも最初はうまくいかないものだ。しつかり

鍛錬を積めばきっと、この艦隊の旗艦になれる』ってさ？」

確かに、私はまだ建造されてから1日しかたつていない。全然鍛練もなにも積んでい

ないのにめげてどうする。

幸い、まだ私のせいでは居なくなつた人はいない。まだまだ私にはチャンスがあるんだ

！

流 「皆さん！ありがとうございます！お陰で吹っ切れた気がします。」

そして湯壺から出たとたん。目眩で倒れてしまつた。

どうやら逆上せてしまつたらしい。

結局、その日の夜も医務室で過ごしてしまうが。とても気持ちよく眠れた気がした。

第8話 「打ち合わせと言う名の集合」

ズイウウウウウン　ズイウウウウウン

流「んうう・」

妙な音で目が覚める。

音の正体は昨日日向さんからもらつた目覚まし時計『時雲』だ。

流「これ・こんな怖い音出すんだ・」

そう呟きながら時計を止める。

チヤツカン!!

いろいろと突っ込みたいけど、そこは少し我慢しよ・

ーー『寮、流星部屋』ーー

流「・」

まだ頭がボーッとしている。

私が建造されてから、かれこれ5日が経つた。

あの初めての出撃以降何度も出撃したが、結局敵と交戦したのはあれつきり。 私以外の人は何度かは敵と遭遇、戦闘しているらしい。

戦闘をしたいかしたくないかと聞かれたら、したくない。

でも、やらなくちゃ誰かが死ぬのなら。私は迷わず砲を撃つ。
つもりだ。

まだ確証が出来ないのは、頭ではそう考えているが、心がどうなのかまだ分かっていないからだ。

流 「つて、そんな考え方じゃ、ダメだよね。」

寝起きのせいで、ネガティブな考えばかりしてしまう。

そう、これは寝起きだから暗い気持ちになつてているのだ。うむ。

? 「・・・」

誰かの叫び声が聞こえる?

ふと、時計を見るとマル口クサンマル。

確か今日の当番つて

長 「てえええええ!!」

ドオオオオオン! ドオオオオオン!!

1日の始まりを告げる砲音が鳴り響く。

――『執務室』――

響 「司令官、出来たよ。」

そう言つて、机の上に丸められた紙が置かれる。

その紙を手に取り、広げる。そこに書かれていたものは。

愛宕と高雄が紐に近い水着の格好で、大きく m (これ以上は黙秘します。)

提 「・」

響 「司令官? どうしたんだい?」 ニヤニヤ

そう言われて、ハツとなる俺。

提 「呆れて少し言葉を失つたぞ。響」

そう、呆れて言葉が出なかつたのだ。

呆れて言葉が出なかつたのだ! (ここ重要!!)

響 「あそ。ま、元気になつたみたいだし良かつたよ。あ、こっちが本物の方だよ。」

そう言つて、机の上に丸められた紙が置かれる。(part 2)

その紙を今度はゆっくりと広げる。

広げきり。ゆっくりと目を通す。

提 「上出来だ。ありがとうな。響」

そう言つて、響の頭を撫でる。

少しくすぐつたそうにしながらもにへらと笑う響。かわいい。

提「よし、あいつに連絡して、打ち合わせするか！」

そう言つて執務室に置いてある電話を取ろうとしたとたん。

響「・始まっちゃうの？」

響が不安の顔でこちらを見ている。

提「なに、心配することはない。仲間に無理をさせること、仲間を殺すことは絶対に

しないしさせない。」

響「・ほんとうに？」

ゆつくりと頷く。頷いた俺を見て、少し安心したのか、いつもの響の顔に戻った。

それを確認して、俺は受話器を取り、通信室に繋げた。

——『鎮守府近海』——

高「皆さん！もう一息です！油断せず頑張りましよう！」

日が西に傾いている。今日も敵との交戦なし。

そう考えながら鎮守府に帰る途中。今回の編成は、高雄さん、吹雪さん、綾波さんと
私、流星。

吹「今日も何事もなくおわったねー。」

綾「やっぱり平和がいちばんですよー。」

高「はいはい！まだ鎮守府に着いていないのだから油断しない！」

吹綾「はい」

流（平和ダナー）

そんなことを考えていると

音が聞こえた。

「!!皆さん！少し止まってください!!」

急いで停止。そしてソナーを展開する。

吹「た、確かこ。鎮守府に近いし、遠征から帰ってきた人たちじやないの？」

「え？ 約20隻位いるんですけど？」

綾「だ、大艦隊じやないですか?!」

高「ほ、方向と艦種は!?」

「え、えーっとおー

もう一度、耳を澄ます。すると妙なことに気がついた。

「あ、あれ？ 高雄さんがいる？」

吹
「・え?
」

綾 「た、確かに高雄さんならここにいらっしゃるけど？」

流 「そ、それに天龍さんに・長門さん？あ！木曾さんが二人も??」

高 「・まさか？」

聞こえてくる音で聞いたことのある音がいくつかあつた。

高 「とにかく、通信してみましょ。」

吹 「うええ!? も、もしかしたら敵かもしれないのにですか?!」

高 「この間提督仰つていたでしょ？『第十七鎮守府と敵艦隊を討つ』って、だから多

分、大丈夫よ。」

そう言つて通信を始める高雄さん。

高 「そこの航海中の艦隊、聞こえてますか？私は第十八鎮守府所属、高雄型重巡洋艦『高雄』と申します。貴の方の所属と目的を述べてください。」

そう高雄さんが言い終えると。

流 「こ、此方に一人向かってきます！」

猛スピードでこつちに向かって誰かがやつてくる音がソナーから聞こえてきた。

吹 「ふえ!?」

綾 「どどどどうしましよう!!」

吹 「おおおおちおちおち落ちつくズラ!?」

高 「吹雪、あなたが落ちついて。」

遠いけど、確実にこっちに向かってくる水飛沫が見えた。

高 「ああ、やつぱり。」

姿まで見える距離になり、こっちに来る人の姿が見えた。

服装は、高雄さんと同じ、髪は金色、そして大きいオペーイ。その人は手をブンブンふりながら近づいてきた。

？ 「おーねーちやーん!!」

高 「相変わらずね。愛宕」

提 「・ なあ。」

？ 「なんだ？」

提 「お前んとこに連絡したのって、今日の午前だつたよな？」

？ 「正しくはヒトマルフタサンだな。」

提 「細かいのはいいよ。でさ、俺『打ち合わせするぞ』って言つたよな？」

？ 「ああ、言つたな。」

提 「じゃなんでお前んとこの娘みんなここに連れてきた?!」

？ 「全員ではない。俺のところの防衛用に何人か残してきたさ。」

提 「それでも何で陸奥やら扶桑、飛龍とかこつちに呼んだんだよ！」

？ 「どうせ近々呼ぶのだし、別にいいじゃないか？」

提 「こつちの準備つてものがあるだろ!?」

？ 「なんだ？ はつちゃんのところ、余裕無いのか？」

八 （第十八提督）「はつちゃん言うな！ いや、余裕とか云々の話じやねえよ！」
？ 「安心しろ、こちらの分の物質はしつかり持つてきた。」

八 「いやだーかーらー！」

？ 「それに、飯の準備ならしつかり手伝うよう指示してある。」

八 「手際良すぎ！ いやそーぢやねーよ！」

？ 「ただ、気になることがひとつ。」

八 「・ なに？」

？ 「あいつらの寝床、有るか？」

八 「そーいうところの準備期間をよこせゆーとるやろがい！」

？ 「あ、それと。」

八 「・ 今度はなに？」

？ 「俺、今までシーケレットキャラにされるの？」

八 「メメタア！」

——『第十八鎮守府、応接室』——

あ、ありのまま今起こつた事を話すぜ！

七（第十七提督）「俺☆登場」

今日の午前に第十七鎮守府に『打ち合わせするぞ』と連絡した結果、第十七鎮守府提督『七塚 東次郎』のみではなく、彼が保有している艦娘達全員（本人いわく、何人か残してきたりしい）連れてきた。

八「いやさ？俺のプランだとさ？作戦を立てて、準備して、みんな揃えて、作戦開始にしよーかなーって思つてたんデスガ？」

七「そんなゆつくりしていて大丈夫なのか？」

八「大丈夫だ。問題無い。」

七「カミは言つている。その間に敵が来るであろうと。」

八「まあ、今日はもう遅いし、部屋はなんとかしてみるさ。」

七「当然だな。」ドヤア

八「・」イラア

応接室の扉がノックされる。

響「失礼するよ。空き部屋の数のチェックに準備出来たよ。」

七「うむ、感謝する。響さん」

八「どれぐらい空いていた?」

響「確認してみたところ、十七の人達全員分の部屋はあつたよ。ただ途中で言葉を切る響。

八「なんだ? 何かあつたのか?」

七「ふむ、『七塚司令の部屋の準備が出来なかつた』といったところかな?」
響「申し訳ありません。」

七「なに、謝る必要は無いさ。いきなり來た私達に非があるのでからな。」
そう思うなら、事前に連絡しろ。

七「いや、私の感が言つているんだ。あと3日しかないとね。」

八「?!」

響「? それってどういう?」

七「あと3日以内に敵艦隊を倒さなければ、被害は深刻になる。」
その言葉で、応接室の空気が氷ついた。

第9話 「制限時間」

——『第十八鎮守府、応接室』——

七「あと3日以内に敵艦隊を倒さなければ、被害は深刻になる。」

その言葉を聞いて、一度時間が停止したかのような感覚にとらわれる。

何度も何度も頭の中で繰り返される七塚の言葉。

何分、何秒たつたのかはわからないが頭が急にフル回転しだす。

八「!?響！この付近に誰かいないか確認しろ！」

俺の命令でやっと響の頭も動いたようだ。命令を聞いて直ぐに応接室から頭を出して応接室前廊下に誰かいないかを確認する。

響「だ、誰もいないとと思うよ。」

八「そうか・七塚！テメエもう少し場所を考えて冗談を言えよ！」

七「安心しろ。誰もいない時に言つたのだ。そしてこれは冗談ではない。紛れもない真実さ。」

八「・まじかよちくしよう。」

響「・し、司令官？そんな根拠もない戯言信じるの？」

響が不安そうな顔で聞いてくる。

確かに、初めて会った人なら「なんだ」「いつなにいつてんの?」「ああ、イタイやつか。」と思つて終らせるだろう。だけど俺は七塚のこの直感が外れた所を見たことがない。良いことも悪いことも全てだ。

だからこいつが真顔で言う冗談みたいなことも本人が「真実だ」と言つたことは實際に起きた。

八 「響、悪い。こいつの勘が外れた事つて今まで一度も無いんだ。」

響 「そ、そんな・しかし!」

七 「だから、早いめに作戦立てて、とつと敵連合艦隊潰すよ。」

八 「わかつ「でももう今日は眠いし、明日な。」なんでやねん!!」

七 「いやだつて、眠いし。こんな頭じやいい作戦も思いつかないだろ?」

八 「いやいやいやいや!ちみ言つたよね?あと3日しかないつて?だつたら余計急がねえと時間足りないぞ?!」

七 「昔の工口い人の言葉で『急いては事を仕損じる』と言うだろ?」

八 「工口い人じやねーよ。偉い人だろーがよ。」

七 「漢はみんな工口いんだつ!」キリッ

八 「それより、あと3日つてことは、もう1日過ぎてるからつまりは...」

七「ん？ああ。それなら安心したまへ。今日は含まれないから。」

八・響「・は？」

七「いやね。俺の直感では、『あと3回日が落ちるまでに方をつける』って感じたのだがよ。」

その言葉を聞いたとたん、俺は七塚の顔面にアイアンクローブ決めていた。

響「司令官、落ちついて餅ついて。時間が無いことには変わりないんだし。」

八「ま、まあ確かに。」

響に言われて手を離す。

七「と、とりあえず。今日は俺もう疲れたし。今後の作戦は明日の俺達に任せてさ？
今日はもう御開きにしよや？な？」

まるで自分の家にいるかのように指揮をとる七塚。もつかいアイアンクローブ決めてやろうかな？

――『執務室』――

七塚の提案を呑んで御開きにし、あいつは響の案内で用意された部屋に向かった。
しばらくしてから、執務室の扉からノックが聞こえる。

八「どうぞ。」

響 「響だよ。七塚司令の案内終わつたことを報告にきたよ。」

八 「ん。ありがとな。」

そう言つて残つている書類を片付ける。

少ししてからふと顔を上げると、響がずっと執務室入口に立つたまま、俯いていることに気づく。

八 「どうした? 嘘?」

響 「いや、何でもないさ。」

そう言いながらもずっと下に向いている。

俺は書類を切りのいいところまで片付けてから立ち上がり、響の、『В ерны й』の頭を撫でた。

八 「不安か?」

響 「うん。」

八 「そうか。」

響 「資材的に、まだ作戦を実行するのは早すぎて不安だよ。」

八 「いやそっち?! 仲間や姉妹を失うかもしれない方じやなくて!?!」

響 「? なんでだい?」

八 「いやなんでって「司令官さ、」?」

響「司令官言つたよね？『仲間に無理をさせること、仲間を殺すことは絶対にしないしさせない』って。」

確かに言つた。その記憶はまだ新しいので覚えている。

響「だからさ。その言葉を信じてゐるから、そつちの心配はしないさ。」

八「そつかー」

響「だからさ、司令官、私のわがままを聞いてほしい。」

八「なんだ？」

響「私をいや、第六駆逐隊に遠征の任務を命令してほしい。」

そう言つて、真つ直ぐこちらを見つめる響。

八「あえて理由は聞かないでおくよ。」

響「じゃあー」

八「ああ、特三型暁型駆逐艦『暁』『Верный』『雷』『電』の四隻で明日マルキユ

ウマルマルより、『資源輸送任務』を遂行せよ！」

響「了解！」

そう告げると敬礼をし、返事をする響

八「すぐに他三人にも伝えに行つてくれ。そして、明日のためにもう休んでもいいよ。」

そう言うと、敬礼から直り回れ右をして執務室入口を向き、執務室から出ていく。

響「・ありがとう」

そう言い残して。

・・・誰かの声が聞こえる・・・。

そう思い、重い瞼を懸命に開ける。

しばらく視界がぼやけているが、段々とピントが合つてくる。

目を開けるとそこは、そこには、

見知つた男の顔（七塚）があつた。

「…やあ、おはよう。はつちゃん」

・・・とりあえず、目覚めのアイアン・クローや一発かました

提督私室

長にて、提督よ、もうその辺にしておいた方が……」

八
ん?
長門か。
おはよう。

そう言いながら、七塚の顔面をがつちりつかむ。

八 「あれ？ そーいや響は？」

そのままの状態で長門に問いかける。

長「響なら、私に秘書官代行を命じて30分前に遠征に出かけたが？」

・・・は？

八「・・・長門、今何時だ？」

七「今はもう10時だぜ？お寝坊さん」

長門の30分前という言葉に驚いて力が抜けてしまったのだろう。七塚が答える。

八「ん、ありがとなつ！」

そして、また力を加える。

陸「ま、まあまあ落ち着いてください。八谷指令。」

七塚の所の陸奥に言われて手を放す。すると何かを思い出したかのようにハツとする七塚。

七「八谷！お前昨日の夜伝えたこと覚えているかっ！」

昨日の夜？たしか・・・

時は戻つて夜。

七「やあ、はつちゃん遊びにk「カエレ!!」

時刻はもう午前2時を過ぎていたころに唐突に来る客人。

七 「あーごめんよはつちゃん。ただし、伝えたいことがあるのだ。入れてくれ。」
その顔はとても真剣な顔だつたため、俺は・・・

八 「断る」

断つた。

七 「ナンデッ?! 普通は今の流れだと入れるだろう?!」

八 「おめーのその手に持つている大袋はなんぞ?」

そう言つて七塚の左手にぶら下がつている袋を指す。

七 「何つてお前・・・酒だが?」

八 「真面目な話するんなら手ぶらで来いよ! 酒持つてくんnaよ!!」

七 「む。すまん。柿の種(ワサビ味)持つてくるの忘れていた。」

八 「いやそーぢやねーつつの!!」

七 「まーまー。とにかく入れろ。重いのだから。」

という下らないやり取りが続いたが、結局俺が折れて部屋に招きいれた。

七 「さて、俺の言いたいことは一つだけだ。」 プシユツ

八 「真顔で缶を開けるな。」 プシユツ

七 「明日・・・というより今日か。誰も海には出すな。」

その言葉を聞いて、俺も真面目になる。

八「・・・何故だ？」

七「俺の直感が言っている。『出撃は控えよ。明日は誰かがキエル。』とな。」

時は戻り今

俺は夜のやり取りを思い出し、長門に大声で命令する。

八「長門っ!! 今すぐ出撃任務中の艦隊に通信! 現在遂行中の任を放棄し直ちに帰還せよ!」

長「り、了解した!」

俺の圧に驚いてか、理由も聞かず部屋を出ようとする長門。しかし、

青「提督! 大至急報告することがあだつ!」

扉を開けて入ってくる青葉と部屋を出ようとする長門が衝突。青葉が吹き飛ばされた。

長「青葉かつ! ぶつかってすまないが、至急通信を頼む!」

青「は、はい! つてそれよりも! 提督!」

八「どうした!?

嫌な予感がする。背筋に汗が走る。

青「巡回任務中の艦隊より通信! 『我、敵ト交戦。結果、流星大破、意識不明』との

こと！」

い、意識不明?! 一体敵はどんな編成で?!

青「それと・・・」

青葉が言葉を続ける。

青「遠征任務中の第六駆逐隊の反応がロスト!」

——『鎮守府近海』——

青葉に通信が届く前のこと。

流「魚雷！ 来ます!!」

今回の編成は、天龍さん、吹雪さん、時雨さんと私である。

天「方向と数！」

流「正面より3発が2回！」

現在、敵と交戦中。

時「・・・！ 見えた！」

そう言つて砲を2回放つ時雨さん。

二発とも各真ん中の魚雷に命中し、大きな水柱を上げる。のこつた魚雷は私達を通り

過ぎていく。

吹 「お見事です！時雨ちゃん！」

天 「こりやあ敵は雷巡だな。」

時 「しかし、こんなにも正確な魚雷。絶対どこかにほかの敵がいるね。」
吹 「だね。それに雷巡一隻だけなんておかしい。流星さん！ほかになにか聞こえませんか？」

言われるまでもなく懸命に音を聞き分ける。すると、先ほどとは別の方向より「ガコン」という音がした。

流 「!!後方より魚雷装填音！」

天 「なにつ?!後ろだと??」

流 「さらに、前方でも装填音感知！」

吹 「は、挟まれた?!」

時 「・・・流星！後方の魚雷装填音って深さどれぐらいかわかる？」

“深さ”というあまり考えたことがなかつたことについて時雨さんから問われる。

流 「ええと・・・あつ!!」

時 「やつぱり。」

流 「ご、ごめんなさい。」

時「まだ2回目の実戦だし、次からはそこも視野に入れて考えよう！」

そう言いつつ。魚雷を目で確認して落していく時雨さん。

天「な、なんだ？どういう事だ??」

吹「敵は雷巡だけではなく、潜水艦もいるってことです！」

流「敵潜水艦の位置を確認！後方100m！」

時「吹雪！」

吹「了解！」

敵潜水艦の場所をすぐに聞き分けて通達すると、時雨さんと吹雪さんは駆け出した。

流「！各方向より魚雷！後2、前5の2回!!」

二人が駆け出したと同時に、敵の魚雷が発射された。

私と天龍さんは前からくる魚雷を破壊、大きな水柱が立つ。

しばらくすると、後ろで一際大きい水柱が立つ。

吹『こちら吹雪！敵潜水艦の撃破に成功！』

吹雪さんからの通信で、少しホッとする。

そのせいか、はたまた魚雷の爆発音、潜水艦の爆発音に紛れていたせいかもしねない

が、

私に魚雷が一本近づいていたことに気が付かなかつた。

目で見て、耳で聞こえた時には時すでにもう遅し。

魚雷が爆発、大きな水柱が立つ。

それにより、私は後ろに転倒。

天「流星!!」

流「だ、大丈夫です！」

幸い、ダメージは少なかつた。そしてその時、とある音が聞こえた。

流「・・・て、天龍さん!!今までに聞いたことのない大きな駆動音が2つ!!」

天「何?!」

立ち上がりながら天龍さんに伝えるとあたりを見渡しだす。

時「何かあつたのかい?」

吹「流星さん!大丈夫ですか?!」

時雨さんと吹雪さんも合流。二人にもすぐにさつき聞こえた音について話した。す

ると

天「・・・まじかよ」

天龍さんがつぶやく。

天龍さんと同じ方を見ると、両腕に黒く大きな艦装を持つ黒い深海棲艦・・・『戦艦ル級』だ。

天「ル級か・・・お前ら、まだ余裕あるか?」

時「まだまだ弾薬、および燃料に余裕はあるよ。」

吹「わたしもまだm「ツシャア!行くぜ!!」はうつ?」

天龍さんを先頭に三人がル級に向かつて突撃しようとする。

流「距離良し、着弾地点合わせ、1番及び2番準備良し・・・」

私はミサイルを打ち上げようとしていた。

天「お?お前ら少し待て!」

天龍さんが二人を止める。

時「おお・・・これが噂の・・・」

吹「あの川内さんを追い詰めた攻撃・・・」

三人の目線がこつちに集まる・・・

少し緊張しながらも、私は号令をかける。

流「第1番及び2番、発射!」

ポコン

・・・・あれ?

天 「ど、どうした？」

時 「ま、まさか……？」

吹 「ふ……不発？」

ゆつくりと三人を見る私。

流 「……」ダバ一

何故だか涙が止まらない。

天 「あゝほら、泣くな、泣くなつて！」

吹 「そうですよ！誰にだつて失敗はあるんですから。ね？」

流 「ううつ……どうせ私なんて、私なんてえ……」

二人に慰められる私。惨め。

時 「……あれ？さつき『ポコン』って音がしたよね？」

時雨さんが何かに気が付いたように聞いてくる。

時 「つまり、一様発射されたつてことなんじやあ……」

時雨さんのその言葉を聞いて突然二人は離れていく。

流 「わ、わあくくく?!待つて！まつてくださいいゝゝ?!?」

天 「うるせえこつちくんな！」

吹 「流星さんありがとう！私は決してあなたのことは忘れないよ!!」

流「勝手に殺さないでくださいい?!」

そんなやり取りをしているうちに、敵戦艦はこちらに向けて発砲してきた。

天「うおつ?!もう敵がこんな近くにまで?!」

吹「ど、どうします?!こつちには爆弾が一人いますし···」

時「流星! 戰艦ル級に向かつて『とつしん』だ!」

流「私に死ねと?!もう皆さん私の扱いひどすぎます!!」

そう言いながら、ミサイル発射管の1番と2番を外し、手に持ちながら怒る。

天「なんだそれ?」

流「問題の1番と2番です!」

吹「すぐに捨ててえー!!」

時「いや! それもつて『とつしん』だ!」

時雨さん···いや、時雨を睨む。

睨まれて時雨は「冗談に決まっているじやないかアハハハハ」と笑っている。

天「いや、そりやいい案だな!」

今度は天龍を睨む。

天「いや、特攻じやなくて···」

そう言いながら藪から棒に私のミサイルを持ち···

天「コイツをル級に投げつkうおつ!?重つ!」ボトン

上げられず海に落としてしまう。

それを見た私達は、一目散にバラバラにその場から逃げ出した
しばらくすると、大きな爆音と共に水柱が立ち上がった。

それを見てル級二隻は少し驚いたような様子を見せた。

天「へへっ! お前ら! 巻き添え食らいたくなけりやここは一旦、ぬおつ!?」
天龍さんが言葉を言いきる前にル級二隻は発砲。そのまま砲撃戦が始まつた。
だがそれもすぐに終わる。なぜなら、鈍い音と共に片方のル級の頭が消えたからだ。
敵味方問わずその場にいた全員が驚いた。

? 「びよーん。ボールがどつかに消えちやつたびよん。」

いつの間にか、私達の後ろにピンクの髪に三日月型の髪飾りを着けた小さな女の子が
立っていた。

? 「まいつか。もーひとつあるし、サツカーするびよん!」

そう言いながら海面を蹴り。ル級の下まであつという間に飛び込み、

? 「シユートびよん!!」

ル級の頭を蹴る。

鈍い音が広がり、後から遠くで『ポチヤン』と音が聞こえた。

? 「あーあ。ボール3つともなくなつちやつたびよんねえ
ん?」

吹天
「あ
うわ
」

時流
(「」
黒)
)

全員その場で黙つて女の子を見ている。

誰
び
よ
ん
?」

「いやー、そんなに見つめられると照れちゃうぴょん♡で、おねーさんはどこぞの

天「お、俺は第十八鎮守府の『天龍』だ。増援感謝するぞ。」

「うーちゃんが知りたのは、そのおねーさんじょん。

そう言つて私を指す。

名前はなーに?」

「と、特務艦『流星』と言います。」

卯 「とくむかん? なにそれ?」

時「いわゆる、『イレギュラー』ってことや。」

時雨さんの説明を受けて「ふーん。」と適当な反応をする卯月さん。そして、一度口角を大きく上げると。

時「?!」

時雨さんのお腹に一撃。そのまま時雨さんは氣を失い、前のめりに倒れる。

吹「・へ？」

天「時雨つ!! ガツ!!」

次に天龍さんの顎を蹴り上げる。少し宙を舞い仰向けに倒れる。そのまま動かなくなる。

流「天龍さんつ！ !! 吹雪さん右へ走つて!!」

吹「・へ・右？」

突然の事で戦意を無くしほーつとする吹雪さん。その吹雪さんの後頭部に卯月さんの手が近づく。

卯「びょーん。うーちゃんの動きについて行くとは、さすが特務艦イレギュラーびょんねえ」

そのまま、吹雪さんの顔面を海面に押し付ける。

吹「ガボボボツ!! ガツ!! グボツ!!」

卯「でも、指示する相手がこれじやあ意味ないびょんねー。」
もがき苦しむ吹雪さん。

「ふ、吹雪さんから手を離して!!」

私は卯月さんに砲を向けながら叫ぶ。

卯
二

流「はやくっ!!」

卯
一
二
八

「早く手を一撃でよ。」「！」

卯一 警告なんて無意味ひよん。だつたらどつと殺してしまう方かいひよん。」

そんな吹雪さんを海面から顔が出るように蹴る卯月。

卯「あ、そーか。おねーさんビビりだから生き物に向かつて砲がうてないんでしょ?」

流
!?
—

卯一現にほら、震えてるね?」

見一詩の歌詞の高に可いに有りて、この歌は其の歌と並んで、

「ああああああああつ??!

鈍い音と共に身体中に「痛い」と言う信号が駆け巡る。その信号と共に、頭からいく

つかの命令が発せられる。

そして、その信号は一つになり、体に流れ、行動になる。

殺せ、ころせ、コロセ!!!

いつの間にか、砲を卯月に向いている。

卯「おつほー♪そんな目でにらみつけられちゃうとお♪うーちゃんはあ♪」

そう言つて今度は右腕を掴みにくる卯月。しかし私は無意識にそれをかわす。

卯「こわしたーくつて！避けるのかぴよん！」

砲の先が卯月を捕らえる。そして、引き金に力を加え···

流「・くうつ!!」

卯「ぴよん？」

なかつた。なぜだか加えることができない。

相手が同類だから？相手が女の子だから？殺したくないから？

卯「・あーあ、びびっちゃつたびよんね。」

びびる・その言葉と共に思い出す。

響『次、君が恐怖したとたん。必ず誰かが海に消える。』

卯「んじや、そんなビビりなおねーさんにうーちゃんからプレゼント♪」

そう言つて、今度は確実に右腕を掴む。

卯 「まずは、『痛み』びよん」

右肘を笑顔で逆に曲げる卯月。

流 「あああアアアアッ!!」

卯 「次に、この『つよくなるお薬』びよん」

そう言つて、ポケットから何かの薬品が入った注射器10本を私のポケットに入れ
る。

卯 「これすごいよ？ 打てば打つほど強くなれるびよん♪」

私の顔色なんて知るものかと言わんばかりに勝手に物事を進める。

卯 「さあーて、これが最後のプレゼントびよん。」

そう言つて、私の頭を両手で持つ。

卯 「これはあ～『痛み』びよん♪」

そう言つて、私の首を横に曲げる。

鈍い音と共に、意識が遠退く。

卯 「あ？ パパ？ 命令どーり・し

意識が消えた。

第10話 「仲間」

流「……ふえ？」

気が付くと真っ暗闇で私は立っていた。

どこを見渡しても暗い黒い世界。誰もいない、段々と不安になつてゆく……。

そんな中、突然白い髪の小さな女の子の姿が見えた。たぶんあれは……。

流「ひ、響……さん？」

秘書艦の響さん? と出会った。

流「響さん。ここ何処ですか?」

響? 「……」

流「みんなは何処なんですか?」

響? 「……」

流「あ、あの……」

響? 「……て」

流「は、はい?」

突然、ボソッと何かを言い出す響さん。

響^ヒ? 「・・・ 撃て、流星」

流 「えつ・・・・」

その言葉は段々と明確になる。

そしていつの間にか、右手は砲を握っていた。

その砲を見て一瞬心臓が大きく跳ねた。

? 「撃て、流星」

流 「！」

その一瞬で回りに十八のみんなが突然現れた。
撃て、撃て、撃て、撃て、撃て・・・・・・・・

皆が皆、口をそろえて撃てと言う。そしていつの間にか・・・
流 「ル級に・・・卯月・・・?」

卯月を先頭に2隻のル級が現れた。そのとたん

天? 「殺せ、流星」

天龍さんから唐突に発せられる言葉。するとみんなの言葉も変わる。

殺せ、ころせ、コロセ、ころせ、ころせ・・・・・・

すると唐突に、背中に重み、左手に細長い物の感覚が現れた。私の頭は瞬時に何か理
解した。

背中のは艦装で……左手には注射器。

流「へ……何……これ……嫌つ!!」

すぐにでも逃げたい、でも手が言うことを聞かない。

耳を塞ぎたい、でも足が動かない。

嫌だ……嫌だ……

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌!!!!

卯? 「あゝあ、とつトと殺しちやエバ良かつたノニ」

卯月のその言葉が聞こえたと思つたら、目の前で赤いものが弾ける
そして白いモノ……手が足元に転がる……。

流「あ……うわ……」

すると周りでどんどん赤いモノ……人が破裂していく。

その血は私の服を、手を、顔を、砲塔を染めていく。

流「あ……ああ……」

目を瞑りたい、でもなぜか目が閉じない。

気持が悪い、体が震える、いやな汗が出る。

響? 「りゆう……せい……」

目の前にある響さん……

響?
「何故
・
・
・
だい
・
・
・」

しかし、その体は無く……頭だけ……

響? 何故? ユロサナイ? 」

りゆ
・
・
せ
・
・

!!!!!!力!!
「ア

天「流星！おい！」

氷一流星ちゃん?!落ち着いて!!

天「クソツ!! こうなりやあ!!!」

唐突に頬に強い痛みが走り、正気に戻る。

患者衣が体に張り付く。ベッドのシーツがくしゃくしゃで濡れている。息が荒い、心臓が早く強く鳴っている。

天「流星、大丈夫か？」

氷「酷くうなされていた様だけど……」

流「てん・・・りゆう・・・さん？ひ・・・かわまる・・・せんせ・・い??」

呼びかけられて、二人の顔を見る。とても心配そうにこちらを見ている。

そして周りを見渡す……。ここは……

——『第十八鎮守府、医務室』——

流「ここは・・・鎮守府・・・?」

頭がうまく回らない。

氷川丸先生が触診を終えると同時に思い出したかのようにハツとなる。

流「天龍さん！時雨さんは？吹雪さんは？卯月は？どうやつてここまで？私の服は

?！」

急に頭が回転し始めたせいで逆に混乱する。

天「お、落ち着け。順に話す。まず卯月だが、俺が気が付いた時には伸びてる時雨に息が浅い吹雪、両腕が変な方向に曲がっているお前が転がつていただけで影も形も無かつた。時雨と吹雪は呼びかけりやすぐ気が付いたんだが、お前はなかなか起きづじまい。さらには吹雪は気が付いたはいいが意識が薄く、なんかやっぱそうだったからお前ら二人唯一無事の俺と時雨で鎮守府まで運んで来たんだよ。」

流 「そ、そうですか。すみません、ご迷惑をかけてしまい・・・。」

天 「気にするな。目えさましてよかつたぜ。」

？ 「失礼します。」

時雨さんが医務室に飲み物を持つてやつてきた。

時 「あ！ 流星起きたんだ！ よかつたあ・・・」

流 「心配かけてごめんなさい」

時 「ほんとだよ、入渠中もずっと目を覚まさなかつたし・・・。あ、はい天龍、イチ

ゴ牛乳。」

そう言つて、ピンクの紙パックを天龍に渡す。

時 「流星も何か・・・飲ませて大丈夫ですか？」

氷 「ええ、診たところ特に問題はないし大丈夫よ。でも、お酒とか炭酸系の刺激の強いものはやめて頂戴ね。」

時 「だつて。何か要望はある？」

流 「えつと・・・じやあ、お茶で。」

時 「了解。ちよつと待つてね。」

そう言つて時雨さんは医務室から出て行く。

ふと思いついたかのように聞いてみる。

流「吹雪さんは大丈夫ですか？」

天龍さんがその言葉を聞いて少し下を見る。

そしてゆっくり立ち上がり、横へ移動、隣のベッドが見えるように移動する。
隣のベッドを見て、私の心臓が大きく跳ねあがり、鼓動が早くなる。そこに寝ていた
のは

流「吹雪……さん？」

呼びかけてみてもピクリとも動かない。

記憶がよみがえる。

卯月によつて溺らされていたことの。

私が会話ばかりして助けなかつたことの。

私が・・・卯月を撃てなかつたことの。

流「ごめん・・・なさい」

涙があふれる。息が苦しい。

流「ごめんな・・・さい。吹雪「呼んだ?」・・・ふえ?」

顔を上げて、もう一度吹雪さんを見てみる。そこには、

明るい笑顔で座つて いる吹雪さんがいた。

流「あ・・・ああ・・・！」

吹「あ、オバケじやないよ？しつかり足も生えてるし。」

ほら、といつて布団をはがし足を見せてばたつかせる。

流「よ・・よがつた・・・」

それを見てさらに涙があふれる。

流「あたしの・・せいで、吹雪さん、死んじやつたんじや・・ないかって・・・」

涙としやつくりがとまらない。そんな私を吹雪さんは優しく包み込んだ。

吹「よしよし・・・私はちゃんといきてるよ・・・」

そんなやり取りの横で笑顔で「目の下にかゆみ止めの塗薬をぬつてもよいかしらあ？」と聞く冰川丸先生と「すんません悪ふざけしすぎました」と正座で謝る天龍さんがいたことなんてわからなかつた。

天「よし、落ち着いたか？」

あれからしばらくたち、時雨さんからもらつたお茶を飲み干すと、唐突に天龍さんが聞いてきた。

流「は、はい。だいぶ落ち着きました。」

天「お前に聞きたいことが2つある。1つは、俺が気絶してから、何があつた？」

天龍さんが真剣な顔でこちらに聞いてくる。

流「天龍さんが襲われて、すぐに吹雪さんが襲われました。天龍さんと時雨さんは一発で気絶させましたが。吹雪さんの時は顔を海面に付けて無理やり溺れさせていました。」

そのあとも、卯月との出来事を細かく話した。

私が・・・砲を撃てなかつたことも。

時「僕が気絶してから・・・そんなことが・・・」

天「なるほどな・・・その時にもらつたのがこれか・・・」

そう言つて私の服が置いてあるところから長細いモノを取り出した。

天「これについては卯月はほかになにか言つてなかつたか?」

そう言つて取り出したのは、卯月から無理やり渡された注射器。

卯月いわく、『つよくなる薬』らしい。

流「いえ・・・『打てば打つほど強くなる』としか・・・。」

天「そうか・・・とりま、提督にこのことを報告に行つてくる。」

流「はい・・・あれ?もう一つの聞きたいことつて?」

天「ん?ああ、この薬の事だつたんだが。もう十分聞いたから大丈夫だ。」

そう言つて、医務室から出て行く天龍さんだつたが・・・

ゴオオオン!

そのすぐ直後に倒れるなんてだれがおもつていたのだろうか……。

? 「もう天龍ちゃんつたら、慌てんぼさんなんだからあゝ♪」

そう言つて笑顔で看病するのは、紫がかつた黒のセミロングヘアで頭の上に謎の輪つかが浮いている人。

時 「もう、なんで扶桑と山城は艦装付けて館内歩いてたんだい?」

? 「いえね? こちらの明石さんに艦装のメンテナンスを頼んでいてね?」

? 「終わつたつて聞いたから、取つてきて部屋で管理するために装着して帰つてたらね……」

時 「もう! ここは十七じやないんだか、艦装の管理は各自の部屋じやなくて艦装専用の格納庫にしまうんだよ?」

? 「いや……私たちの艦装つて大きいでしょ?だから他の人の……特に十八の人 の艦装入れるスペースがなくなるんじやないか心配で……」

時 「君たち2人の艦装が入つたくらいじやいっぱいにはならないよ……もう」

そう言つて、艦装からして戦艦の人2人を叱る時雨さん。

ちなみに、天龍さんの代わりに吹雪さんが報告に向かいました。

? 「時雨ちゃんつたら、久しぶりに会えたからはしやいじやつてるはねえ」

そう言つてさつきまで天龍さんの看病をしていた人がこつちに來た。

龍 「どおうも、私は天龍型軽巡洋艦2番艦の『龍田』よおう」

流 「あ、初めまして。特務艦 流星です。」

龍 「とくむかん？ 聞いたことがない艦種ねえ？」

時 「簡単に言つてしまえば、イレギュラーフってことだよ。」

説教が終わつたらしい時雨さんがこつちの話に混ざつてきた。

時 「流星、紹介するよ。僕の昔からの仲間の『扶桑』と『山城』」

扶 「初の日本独自設計による超弩級戦艦、『扶桑』です。」

山 「同じく、扶桑型戦艦2番艦、『山城』です。」

時 「それで、扶桑、山城。この子がイレギュラーの『流星』だよ。」

流 「どうも、特務艦『流星』です。」

時 「流星はすごいんだよ。ミサイルを発射できるらしいんだ。」

流 「いえ！ 実際に撃てますよ！」

時 「え？ でも今回おもいつきり失敗していたじゃないか。」

流 「あ、あれはその・・・たまたま艦装が壊れてて・・・」

扶 「まあまあ、流星さんも、たまたまその時不幸だつたつてこと、 ですよね？」

山 「全く、時雨、あなたのそういうところはよくない癖よ？」

そう言いながら笑顔で話しをする三人。

この三人を見ていると、本当に仲がいいんだなあつて思う。

そんな時だつた・・・

ピンポンパンボーン

『以下の者は作戦司令室に集まるように。航空戦艦『伊勢』『日向』『扶桑』『山城』駆逐艦『時雨』『夕立』『朝潮』『荒潮』。繰り返す・・・』

山「あら？ 何かしら？」

扶「時雨、ここの作戦司令室つて、」

時「十七と変わらない所にあるよ。」

扶「では、すぐに向かいましよう。」

時・山「〔了解〕」

そう言つて、三人は医務室から出て行つた。

第11話 「作戦準備」

——『第十八鎮守府、会議室』——

天龍が轟沈するちょっと前。

八「……」

七「……なあ、はつちやん?」

八「……」

七「お前……無理して「ねえよ」……そりゃ。」

八「それよりも、今は目の前のことに集中しろ。」

そう言つて、机の上に広げられている2枚の海図を睨みつける。

片方が七塚の所で作った海図でもう片方がここで作った海図だ。

八「敵の進行方向と思われるのは、第十八鎮守府と思つていいいんだな?」

七「あ、ああ……交戦記録から見て、お前の所と敵の部隊が多く戦っているしな。」

八「……」

七「……なあ、はつちやん。おまえやっぱ「くどい」……すまん。」

八「まだ第六駆逐隊も、流星も轟沈とは聞いてない。だからまだ、希望を持てる」

といつても、不安なものはやっぱり不安。

搜索隊を出そうにも、木乃伊取りが木乃伊になる可能性がある。更には、今日も含めてあと3日で何とかしないといけない時に、無駄な資源を使いたくない。

だからと言って六駆の四人を見捨てる事なんて絶対したくない。

だからまずは、この目の前でのかい壁をさつさとぶち壊す。

八「……」

七「……」

八「なあ……」

七「……どうした?」

八「いい案……ない?」

七「……そつちこそ、はよなんか考えろや。」

さつさとぶち壊したいのだが、なかなかいい作戦が思いつかない。

八「だつたら、単縦陣で一気に突っ込んで……」

七「お前……殺す気か?」

八「いや、ごめん。なんでもないっす。」

この一大事の時なのにバカみたいな冗談を言つていると、突然会議室のドアをノックする音が響く。

俺はその音に對して。

七「今忙しい、カエレ！」

八「なんでやねん!!誰だ!!入れ!!!」

入るよう促すはずだったが、ふざける七塚。

ゆつくりと扉が開きそこから顔を出したのは・・・

吹「えっと・・・し、失礼・・・します?」

おどおどした表情を見せる吹雪。

七「ん?どうした吹雪君?早く入つてきたまへ」

キリリとした表情で今度は七塚が入ることを促す。

二人の提督バカから許可が下りたことを確認して、入室する吹雪。

八「それで、どうした?」

吹「はい、先ほど流星さんが目を覚ました。」

八「!・・・そ、そうか・・・起きたか・・・!」

吹雪からの報告を受けて、少しだけ笑みがこぼれる。

それと同時に一つ疑問が現れる。

八「そういえば、天龍はどうした?流星が目を覚ましたら天龍が報告にくるよう聞いていたが・・・?」

そう聞くと、吹雪は苦笑いをしながら目をそらす。

吹「天龍さんは……その、山城さんと衝突して、今は医務室に……」
そう吹雪から言われ、軽く肩を落とす俺。

七「む？ 山城……？ お前の所のか??」

八「おめえのところのだよ！」

七「そうかそうか！ ならば後で賞でもやるか。『ぶつかつたで賞』でもな！ ハハ
ハ……」

くそ寒いことを言い笑つていると、突然うなじを抑え真顔になる。

俺が「大丈夫か？」と聞こうとする前に、ハンドサインで「大丈夫だ」と伝えてくる
七塚。

そして少し顔を下げ、眉間に皺を寄せる。

七「なあ、八谷……」

八「お、おう？ どうした、唐突に……」

七「絶対に勝てる作戦つてのを考えたんだが……」

——『作戦司令室』——

時「お、遅くなりました!!」

息を切らしながら入つてくるのは白露型の二人。『時雨』と『夕立』。放送が終わり、なかなか来ない夕立を探しに行つてくれた時雨。

七「うむ、ちなみに夕立君。遅れた理由はなにかな?」

立「ポイっ! 寝てました!」ケイレイツ

七「うむ、素直でよろしい! では、席についてくれ。」

いやよくねえよと思ひながらも時雨と夕立が席についたことを確認する。

八「よし、ではこれより『敵連合艦隊迎撃作戦』の君たちの役割を説明する。」

そう言うとここにいる全員の目の色が変わる。

八「君たちは航空戦艦2隻、駆逐艦2隻で隊を作つてもらい、敵集結地点を大きく左右に迂回し敵艦隊の後方より攻撃を開始、殲滅してもらう。」

伊「え?! 私達だけで敵艦隊を潰すの?!」

日「伊勢、落ち着け。我々は陽動をかけるだけだ。」

七「まあ、陽動というより挟撃だな。真正面から艦全員で敵を殲滅する中、君達は後方より敵を殲滅するつてことだ。」

朝「なるほど、敵は2方向からの攻撃に混乱し、一瞬かもしれないけど動きが鈍り、そこを徹底的に突く。ということですね。」

八「そういう事だ。君たちは明日、マルゴーマルマリ出撃、ヒトフタマルマルま

でにこの地点まで到達、合流してほしい。」

そう言つて、黒板に張り出されている海図を指し棒でたたく。

七「そして、こちらから合図を送るので合図の後、攻撃を開始してくれ。」

荒「ちなみに、その合図とはなんですかあ～？」

七「む・・・詳しく述べなかつたな・・・どうする八谷？」

八「ん？・・・『各員、奮励努力せよ』でいいんじゃないのか？」

立「なんか、ちよつと古臭いっぽい。」

荒「そしてあじけないわねえ！」

時「提督・・・君には失望したよ・・・」

八「おめえらそれでも軍艦か!?」

俺の提案に大半の者達は不評を訴える。

七「ここはやはり・・・『イスラエル二トルネエドスピイイイン』ってのは？」

八「どこのキー〇ードクラッシャーだ?!」

伊「お、それでいいんじゃない？」

日「アリだな！」bグツ

朝「いいと思います。」

なんでや！なんでそんなパクリがいいんだよ！しかもなぜ日向は木曾の真似してる

んだ！

山「いえ・・・提督！ それじゃだめよ!!」

よかつた、 真面目なやつがいてくれて・・・。

山「ここはやはり！『扶桑おねえ様万歳!!』で行きましょう!!」

真面目な奴なんていなかつたよこんちくしよう。

七「まあ、 おふざけはこの辺にして。 合図は『第49艦隊、 陣形崩れる』だ。」

扶「なんだか・・・不吉な言葉ね・・・。」

八「おまえ・・・そーいうのはあんまり・・・」

七「まあ落ち着け。 確かに”4”やら”9”やら不吉な数字に”崩れる”とかあまり戦場で聞きたくない言葉だが。だからこそ敵にバレにくいいのだよ。」

確かに、 敵に通信傍受されても後方艦隊のことは悟られにくいし、 敵はその”崩れる”という言葉に反応するかもしれない。

七「とまあ、 合図も決まった。 時間も決まった。 あとは編成だが・・・」

七塚が編成を言う前に、 手を挙げる者が一人。

七「・・・発言を許可。 どうした、 扶桑？」

ゆつくりと椅子から立ち上るのは、 扶桑型戦艦『扶桑』。

扶「はい・・・今回の作戦。 私の様な『今回の作戦は、』？」

扶桑が意見を言いきる前に答えだす七塚。

七 「今回の作戦は、足の遅い早いや、運の有無は関係ない。それに君達航空戦艦はとても優秀だ。戦艦としての大口径砲を装備し、かつ航空母艦又は水上機母艦に準じた航空機運用能力を有する軍艦。それが君達、『航空戦艦』だろ?」

そう言つて、まつすぐ扶桑を見る七塚。

七 「・・・頼りにしているぞ。扶桑。」

その言葉が決め手となつたのか、扶桑の顔は少し紅潮し頷き、座る。

伊 「アツいねえ・・・」

日 「アツいな・・・」

時 「アツいね・・・」

立 「お鍋食べたいっぽい」

荒 「あらあらあらわ」

朝 「窓を開けましょか?」

皆が皆口をそろえてアツいアツいという中・・・

山 「ワタサナイワタサナイワタサナイワタサナイワタサナイ・・・」ブツブツ

一人爪を噛みながら黒いオーラを出す者が一人・・・。

八 「よし、砂糖吐き出す前に、今回の編成を言う。」

その言葉で、全員が背筋を伸ばし真剣な顔になる。

八「まず右回りは、旗艦『伊勢』とし、『日向』、『朝潮』、『荒潮』。左回りは旗艦『扶桑』とし、『山城』、『時雨』、『夕立』。この編成で臨む！」

編成を言いきると各々のメンバーが顔を合わせる。

八「お前たち、全員必ず戻つてこい！ 敵前逃亡しても構わん。だから必ず戻つてこい !!以上！各員解散。作戦開始時刻まで待機！」

バツ

俺の最後の一言の後、全員が立ち上がり敬礼をする。

七「必ず・・・帰つてこいか・・・。」

八「? 何か言つたか？」

七「いや、何もないさ。」

俺の隣で寂しい顔をし、うつむく七塚。

「すまない・・・」

――『大議堂』――

時雨さんたちが呼ばれてからしばらくして。放送で全艦娘招集の指示があつた。今ここには私が所属している第十八鎮守府の人達以外にも、第十七鎮守府の人達もいる。

る。

初めて見る顔が多く、少し緊張する。

そうして大議堂の隅で立つていると

？「あら？ あなたはたしか・・・」

茶髪の少しボブカットで頭に角？のカチューシャを付けた人がこちらに気が付いた。
どことなく長門さんに似ている・・・

流 「は、はい！ 特務艦 流星です！ えっと・・・」

陸 「長門型戦艦2番艦『陸奥』よ。第十七鎮守府の秘書艦を任されている者よ。」

流 「え?! 失礼しました！」

陸 「気にしなくていいのよ。まともに話したの今が初めてだし。」

長 「む？ 陸奥！ 七塚指令が呼んでおられたぞ！」

突然、長門さんが陸奥さんを呼び出す。

陸 「あらあら、呼び出されちゃった。流星さん？ もしよかつたら後でお茶しましょ？」

流 「あ、はい！ ゼひとも！」

陸 「フフツ、ありがと。それじゃあ、後でね。」

そう言つてステージの脇にむかつて歩いていく陸奥さん。

その後ろ姿をぼーっと見ていると。

? 「流星さん！ そろそろ整列ですよ～！」

そう言われ。周りの人に誘導されつつ場所につく。

八「・・・各隊の編成は以上！ 最後にこれだけは言つておく。敵を深追いするな。よく自分を見て行動しろ！ 諸君らの命を捨てるのはいまではない！ これからもない!! 諸君らが優先すべき命令は、『帰つて最高の笑顔をする』ことである!! 以上!!!」

バツ!!

大議堂での今回の作戦の概要を聞き終え、全員が敬礼する。

私の所属は『主力攻撃隊』に任命された。メンバーは、旗艦『長門』さん、『陸奥』さん、『吹雪』さん、『綾波』さん、『夕張』さん達である。

『主力攻撃隊』・・・その名の通り、強力な火力で敵を殲滅する艦隊・・・果たして、私にその隊で任を果たせるのだろうか？

また撃てなかつたらどうしよう。

また見てるだけだつたらどうしよう。

また・・・恐怖してしまつたらどうしよう。

色々なことを考え、不安になる。卯月との戦闘を思い出し、胸が苦しくなる。怖くなる。

その時、なぜかスカートのポケットに手が行つてしまつた。
カラソ^{押し付けられた}という軽い音がする。卯月からも^{らつた}あのクスリが入つていてことに気が付く。

『射てば射つほど強くなる』

まだいまいちその言葉の意味が分からぬ。

いくら筋力が上がつたつて、頭が撃つことを否定しては意味がないのでは?

だいたい、筋力が上がつても砲の威力が変わるわけでもないし……。

そんな風に考へている時だつた。

? 「何か悩み事?」

突然呼びかけられてドキッとする。急いでポケットから手を放し。声の主の方を見る。

陸 「さあ。行くわよ。」

声の主は、陸奥さん。陸奥さんの先には、長門さん、吹雪さん、綾波さん、夕張さん。『主力攻撃隊』の人々が集まつてゐる。

陸 「団結力や各々の得意分野を再確認するために。みんなでお茶することになつたの

だけど・・・大丈夫?」

流「は、はい! 大丈夫です!!」

陸「そう、良かったわ・・・じゃあ行きましょ。」

そう言われ。少し不安を残したまま。6人でいろいろ話合いをして、その日を過ごし
た。

第12話 「作戦開始」

——『察、流星部屋』——

流

時計が鳴っていない。それなのに目が覚めてしまった。

緊張と不安のせいできつと眠りが浅かつたようだ。

流「4時45分・・・」

目指し時計を見ると、何時もよりかなり早く起きてしまった。

流

もう一度寝ようと目を閉じる。しかし頭が冴えて眠ることができない。

「・・・ハア、水でも飲んでこよ・・・。」

そう思い、部屋を出ようとする。

」・・・・・・・・

・・・?何やら外の方が騒がしい?

様子を見るために窓から外を見る。

時「タ立！早く!!みんなに迷惑かかってるんだよ!!」

立「ううう・・・まだねむいっぽいいい・・・」

夕立さんと時雨さん・・・？こんな朝早くにどこへ行くんだろう・・・？少し気になり。私は寝巻のまま外を目指した。

一『出撃ドック前』一一

時「お、遅くなりましたあ・・・」

時雨さんらの後をつけていたら『出撃ドック』についた。

そこには、提督や七塚指令。それに伊勢さん日向さん扶桑さん山城さんと見かけない二人がいた。

流（今から出撃？作戦開始はたしかマルキュウマルマルのはずなのに・・・）

八「よし、では頼んだぞ。」

全員「」「」「」「はいっ」「い」つぽい」「」「」

八「全員必ず帰つて来いよ！」

必ず帰つてこい？どういうこと？

七「扶桑・・・山城・・・」

扶「どうされました？提督？」

七「いや・・・気を付けて行つてこい。」

山「？なによ。はつきり物いいなさいよ。」

七「そうだな……帰つてきたら……」

扶・山「?」

七「……パンツ見せてく『アホ!』(・・ω・) ショボーン」
何を言つているんだろうあの人……。

そう思いながら建物の陰からこつそり様子を見ている。

八「よしつ！各員！抜錨!!」

提督がそう叫ぶと。皆出撃ドックに入つていった。

日「では行つてくる。八谷提督、七塚指令。そして……」

そう言つて私をまつすぐ見つめる日向さん。

あ、バレてるなどと思い、建物の陰から出て敬礼をする。

日「流星、今夜できるなら酒でも飲もう。」

流「は、はいっ！ぜひとも!!」

こちらに手を振る日向さんに対して。笑顔で送り出す私。

私お酒飲めるのかな……。

――――――――――――――――――――――――――――

――マルハチゴーキュウ『執務室』――

今日は鎮守府全体が静かだ。そしてどこもかしきもピリピリしている。

ここ第十八鎮守府執務室はとくにピリピリしている。何も知らずに入ってきた者はたぶん胃の中の物を戻すだろう。

長「提督方・・・そろそろ時間です。」

長門が柱時計を見て、第十七鎮守府提督『七塚 東次郎』と第十八鎮守府提督『八谷 天馬』に作戦開始時間が近いことを知らせる。

八「七塚指令・・・準備はいいな?」

七「ああ・・・もちろんだ・・・」

その言葉をきつかけに、さらに執務室の空気がピリピリする。七塚の陸奥が俺の所の長門が、あまりの空気と思わず唾を飲み込む。

八「各員・・・時計合わせ・・・」

俺のその言葉で各自時計を見る。

その時だけ、秒針が一つ動くのが1分、いやそれ以上に遅くなるような気がした。

一ーマルキユウマルマルーー

八「作戦開始!!」

時計の秒針が真上に到達したことを確認し、作戦開始の合図を送る。

合図と同時に、鎮守府全体にサイレンが響き渡る。

長門と陸奥が執務室出入口で敬礼をし、回れ右して執務室から出て行く。外では、こ

の鎮守府に居る艦娘たちが出撃用ドックに険しい顔で向かってゆく。

七「なあ・・・八谷指令。」

八「なんだ？」

七「実は・・・俺はあることをお前に、みんなに隠している。」
唐突に七塚がそんなことを言い出す。

七「実はな・・・」

八「・・・は？」

このほんの一瞬。執務室のピリピリした空気がなくなり。時間が止まつたかのよう
に感じた。

——『作戦海域前』——

重い・・・

海を滑る足が、

背中の艦装が、

太ももの魚雷が、

右手の主砲が、

今この場の空気が、

重い・・・。

苦しい・・・。

今着ている服が、
頭のヘッドホンが、
この空気が、

苦しい・・・。

初めての大規模作戦。

まだ建造されて間もないのにいきなりの連合艦隊主力艦隊。

周りの空気、自分自身の緊張。

それらすべてが私の呼吸を狂わせる。

私の鼓動を早くさせる。

周りの音が遠のく感じがする。

暑くもないのに汗が噴き出る。

? 「・・・せ・・ん・・・つ・・で・」

誰かの声がかすれかすれに聞こえてくる。その声の主を探そうと頭を回す。

すると、突然肩にポン、と何かが触れる。

私は驚きながらすぐさまその方を見る。そこには・・・

吹「落ち着いて。流星さん。」

必死に笑顔を作る吹雪さんがいた。

長「流星。」

前を走る長門さんが、前を向きながら話しかける。

長「お前は、一人か？」

その言葉を聞いた途端。一瞬思考が止まつた。

長「周りを、よく見てみろ。」

そう言われ、ゆっくりと首を左右に振る。

周りには吹雪さん。綾波さん。夕張さん。陸奥さん。長門さん。

さらに前方には、木曾さんが率いる雷撃隊。

後ろには赤城さんや加賀さん達の空母艦隊。

綾「流星さん。」

唐突に綾波さんが話しかける。

綾「流星さんや長門さんから見ると、駆逐艦の綾波は火力が弱く。装甲も薄くて頼りがいがありませんが。・・・あ、綾波を頼つてください！」

綾波さんがそう言い切ると、綾波さんのあごから汗が落ちる。

陸「あら？ 綾波ちゃんかつこいいこと言うわね。だつたら、戦艦であるおねーさんに

は、ドーンと寄りかかつてきなさい。

張「あ、あたしにだつてどんどん頼つてくれても構わないからね！ · · · 艤装の相談なら。」

長「今お前は一人ではない。周りには仲間がいる。だから頼れ。」

そう長門さんから言われると、少し重さが軽くなつた。少し苦しみが減つた。耳が良く聞こえるようになつた……。

私は大きく返事をしようとすると・・・

流「ソナーに感あり!!」

大声で前方に敵がいることを知らせる。

長空母艦隊！第一次攻擊隊全機發艦！！」

長門さんが無線で後方にいる赤城さん達に艦載機の発艦を指示する。その数秒後、多くの飛行機が私たちの上を通過してゆく。

長「流星！具体的な数は分かるか？！」

長門さんにそう聞かれ、もう一度ソナーに集中する。

流敵数およそ50！潜水艦は無しです！」

長「よし！全雷撃隊！！前へ！！敵艦隊を殲滅せよ！！」

そう指示すると、高雄隊、古鷹隊、青葉隊は速力を上げ敵艦隊に向かい進んでいった。
長「流星！対艦ミサイル発射用意！」

流「り、了解！」

その言葉を言われ、先ほどまで薄れていた緊張がよみがえる。
そんなときだつた、唐突にスカートのポケットからガラスとガラスがぶつかつたよう
な音が聞こえた。

私は思い出す。何故だか持つてきてしまつたこれのことを。

ポケットに手を入れ、一本だけ取り出す。

卯月から押し付けられた注射器。

中には蒼い透明な液体が入つてゐる。

『強くなる薬』

強くなるとはいつたいどういう意味なのだろうか。

筋力的に強くなつても、砲の威力は変わらない。速力も結局は缶の性能によつて変わ
る。魚雷の威力だつて……

だから、筋力的に強くなつても意味がない……はず。

じやあ、あの卯月の動きは？卯月の攻撃力はなに？

そういう考えていると頭の中でおかしな考えが生まれた。

——仲間を守りたい？

も、勿論守りたい！

——どんな形でも？

う、うん。

——たとえあなたが犠牲になつても？

・・・

——守りたくないの？

・・・やつてやる。

——なら・・・

頭から体に指示、ではなく命令が下りる。

その命令どおりに私の右腕に・・・

針を突き刺す。

中の液体が体の中に入り込んでゆく。

すると次第に、頭からどんどん命令が下りてくる。

その命令が体の隅々までいきわたる。まるで・・・

流「・・・夕張さん。」

張「どうしたの？」

流「どんどん撃つので、順次箱の交換をお願いします。」
——。

張「？り、了解？」

そう言い、私・・・『流星』がミサイルを構え、

流「全弾・・・順次射出!!」

そう言い放ち、6本のミサイルが天へめがけて登つてゆく。

第13話 「矛盾」

提督らに見送られ、しばらくは右回りの伊勢達と一緒に行動をしていた。

各自緊張して

立「ぼおおおお、いいいい。ぼおおおお、いいいい。」※いびきです。

荒「んく。おねいちやくんにゆく・・・むにやむにや」※ねごとです。

その他「[.] [.] [.] [.] [.]」

・・・いるんだと思う。うん。

朝「荒潮!!起きなさい!!!」

荒「んにゅく?・・・あらく?」こはどうおく?」

時「ゆうだち・・・?」

立「ぼひつ?!殺氣!」

山「あなた達・・・もう少し緊張感を持ちなさいよ・・・」

伊「まあまあ、いいじやないの。それだけ心に余裕があるってことですか?」

日「寝ながら移動か・・・今度練習しておこうかな・・・」

扶 「衝突すると思うから止めたほうが・・・」

そんな感じに各々緊張して？目的の場所まで移動していた。
しばらく経ち、伊勢達と別れる。ポイントまで到達した。

伊 「よし！それじゃあたし達はこっちだから、ここでお別れね。」
時 「そうだね。頑張つてね！」

日 「うむ。そちらも無事を祈る！」

山 「伊勢、日向。あなた達より必ず先に着いているわ！」

荒 「あらあ～？競争？」

立 「勝負なら全力で受けて立つっぽい！」

朝 「では！ご武運を！！」

扶 「そちらも！お気をつけて！」

それが言葉を交わし、それぞれの航路を進む。

今日の天気は晴天だ。雨は降るとはとてもじやないけど思えないほど青々としている。

なんだか、今回は全員戻つてこれる。そんな気がしていた。

る。

立 「・・・ねえ時雨。」

時「まだ目的地まで着かないよ。」

立「そ、そうじやないよ!」

時「ご飯もまだだよ?」

立「ぼ?!まだっぽいの?」

時「ぼくなくて、まだだよ。」

立「(＼＼＼＼) ポイーン」

伊勢達と別れて、しばらく経つた。

おそらく、目的地まで半分ぐらいのところで、夕立がぐずりだした。

扶「山城? 今の時刻は?」

山「現在マルキユウフタサンです。」

山城からの返事を聞いて少し考え出す扶桑。

扶「みなさん。あそこの小島で5分の休憩をとりましよう。」

立「休憩・・・ごはん!」

時「大丈夫なのかい?」

扶「ええ、大丈夫よ。時折休憩を取つても十二分に間に合うわ。」

山「扶桑姉様、休憩の前に索敵を行いましょ?」

山城からの提案で、僕はソナーを扶桑と山城は瑞雲を飛ばした。だが・・・

立「あそこでごはんがまつて いるつぼいいいい!!!」

ただ一人、小島に向かつて走る夕立。

時「ちよ、ゆ、夕立! 勝手に行動したら……」

そんなときである。夕立が急に止まり出す。

それと同時に、僕のソナーに反応がでた。

時「!? 扶桑！ 山城！ ソナーに「危ないっ！ そこから避けて!!」……え？」

二人に報告しようとすると、突然夕立が叫びだした。そのとたん……
ドオーン！ ドオーン！！

僕たちの所に砲弾の雨が降った。

僕は驚き、その場で伏せて目を瞑つてしまつた。

その後である。変な臭いがしたのは。

おそるおそる目を開けると、そこには扶桑が立つていた。

そのとたん、嫌な考えが頭を過る。

時「ふ……そう？」

呼び掛けても返事をしない。

時「ねえ……扶桑？」

扶桑の口から赤いモノが出ている。

扶桑が口を開く。

扶「し、ぐれ・・・はやく、逃げ。」

とても近くで聞こえた、砲音と爆音。

そのとたん、扶桑の後ろから大きな煙が出る。

山城が扶桑の名前を叫びながら砲を撃つ。

時「あ、ああ・・・。」

扶桑が僕の目の前でうつ伏せになる。その後ろに、白く伸びる線が此方に向かってくる。

時「扶桑っ！避けて!!」

そう叫び、扶桑を動かそうとしても、あまりの大きさに動かすことが出来ない。そして、

ドオオオオオオオオオン!!!

僕の目の前で、大きな水柱が立つ。

扶桑が沈んだ？

僕のせいだ？

だんだんと小さくなる水柱。

大丈夫、きっとこの水柱が収まれば横になつている扶桑が見える。

そう願いながらただただその水柱を眺めている。

やがて水柱は収まる。そしてそこには・・・

時「あ、あああ・・・・・」

誰も居なかつた。

扶桑が、僕を庇つて、沈んだ。僕の、せいで、シズンダ。

その結果に放心状態になる。

山「立てエエエエエ！時雨エエエエエエエ！」

山城の叫び声にが聞こえる。そう思い、山城を見る。そのとたん
ドオオオオオオオン！

山城の隣が爆発した。

よろめき、傾く山城。そんな状態になりながらも懸命に何かを叫ぶ。

山「立つて・・・任務を・・・は、たし・・・」

そう叫び、山城はまた敵の砲を浴び、水柱と共に姿をくらませた。

時「かえ・・・して・・・」

空に向かう黒煙

時「ねえ・・・かえしてよ・・・・」

懸命に自身の主砲を撃つ夕立。しかしそうすぐに敵の集中砲火を受け、頭に被弾。

その場

に倒れ込む。

時「扶桑と山城を・・・」

此方に向かつて何かが近づいてくる。おそらく、敵戦艦ル級だろう。

そう叫び、目の前の敵に砲を向け、引き金を引く。

1

今ある全ての弾を目の前のル級に撃ち込む。流石の戦艦でも、駆逐艦の砲を雨霰の様に受ければひとたまりもない。

目の前のル級は、炎を上げ沈んで行く。

それでもなおも、叫びながら砲を撃ち続ける。

やがて主砲の弾が切れたのだろう。
がぶつかる音しか響かない。

時一八ア・・・ハア・・・

全ての弾を出しきり、呼吸が荒くなる。顔を上げると、此方に向かつてくる深海棲艦。

残りは、ル級2、ロ級1。

それを確認した僕は、敵艦隊に向かい全速力で突つ込む。勝てる筈がない？そんなことは分かりきつている。

？「だからって、特攻はバカじやないの？」

その声が聞こえたと同時に、戦艦ル級の首が落ちた。目の前に突然と現れる、小さな女の子。だけどその手には二振りの刀が握られている。

? 「ま、そんなに死にたいのなら、好きにしなさいな。」

そう言いながら、鋭い目付きで此方を睨む女の子。

づくのが大きくおくれてしまつた。

時
!?

？「安心して。アイツがいるし。あたしらには弾は当たらんさ。」

そう女の子が言うと、目の前に戦艦ル級のような大きな一枚の盾を持った女性が現れた。

た。

そして、僕の代わりにその女性が敵の弾を受けた。

しかし、その女性は一枚の盾を自信の前で揃えて敵の弾を防ぐ。

？「あまり、過信は、しないでほしい、です。」

そう呟きながら、守りの構えをゆつくり解く。

? 「なに言つてんのよ! 現に今のも無傷なんですよ?」

「確かに、そうです、けど……」

？「なら信用したつていいじゃないの？もつと盾は自信もちなさいよ！」

盾「で、でも……」

？
「はいはい！二人とも今は目の前に集中して。」

ふと聞き覚えのある声が聴こえた。

その声の方を見ると、

時「ヴエール・・・ヌイ?」

曉「時雨——！無事——？」

「うわー、うわー、うわー！」
　　と、彼は叫んでいた。

？「んで？ ヴエル。 アイツら沈めていいのね？」

「うん。よろしく頼むよ。」

そう響が言うと、矛と呼ばれた女の子は口角を大きく持ち上げて。

矛「了解。」

と、短く返事をする。

するとその直後、彼女の姿が消えた。

矛「うらあああああああ!!!!」

その雄叫びと同時に空に舞う真っ二つに別れた口級。

矛「あと・・・一つ！」

そう言つて、ル級を睨む。

先ほどの光景を見ていたル級は、白い顔を青く染めていた。

それでもル級は矛に背を向けず、自信の擬装を前に構え、砲を撃つ。
しかし当たらない。

それどころか、ル級との距離を一気に詰める。

咄嗟にル級は自分の擬装で防護の構えをとる。

しかし、ル級が予想していたところとは、違うところから攻撃がきた。

矛「あのさあ？ 敵から目を離すとか、あんた死にたがり？ それともバカ？」

そう呆れながら、ル級の背中を十字に斬る。

その攻撃を受けよろめくが、直ぐに後ろに振り向いて砲を向ける。

だがそこには矛の姿はない。

そのままル級は自身の回りをキヨロキヨロ見渡す。

矛「なに？まだわたしの姿探してるの？」

そう矛がいい放つ。矛はル級とは少し離れた所に立っている。ル級は直ぐに矛に向かい砲を向ける。

矛「おーおー。怪我しててるのにまだやるのねえ。」

そう煽りながら、矛は二振りの刀を自分の腰にある鞘にしまう。

そして片方の刀を鞘ごと外し、腰を落として居合いの様に構える。

すると、彼女を中心に海面から波が立つ。だんだんと波は大きくなつてゆく。

矛「どつておきよ。しつかり味わいなさい！！

ル級の発砲、矛の回りに着弾し水柱を立てる。

しかし・・・

矛「狙うの遅すぎ。」

矛は先ほどいた場所には居ず、ル級の後ろに刀を振り抜いた姿で居た。

ナニカが暁の目の前に落ち、少しだけ浮きあがる。

暁「ヒツ!?」

響（あ、これはちょっとマズいかな・・・？）

暁の爆音の悲鳴と共に、その場で崩れる首のないル級。

矛「だから“めんつて言つてるじやない暁”。」

暁「許さない！絶対に許さないんだから!!」

戦闘後、近くの小島で一休みしている私たち。

響「時雨。大丈夫かい？」

砂浜で体育座りで顔を埋めている時雨に声を掛けてみる。

響「なんでこんなところに夕立と二人で居たんだい？」

時「・・・。」

反応なし。

響「夕立は無事だよ？何かあつたのかい？」

時「・・・。」

少しピクリと動いたが、此方を向く様子はない。

響「さつきの大きな二つの水柱、あれはなんだつたんだい？」

その言葉を聞くと、いきなり立ち上がり、私の肩を強く握る時雨。

響 「ちよ！痛い！痛いよ「……らだい？」……え？」

時 「いつから見ていたんだい？」

そう言つて此方をじつと見つめる時雨、だがその目には光がない。ただただ時雨の水色の瞳がじつと此方をみている。

響 （あ・・・これは、マズな。）

時雨のその瞳を見てわかつた。

時雨は今、正気じやない。

言葉を間違えたら、多分仲間内で戦闘が始まる。

そう感じ、必死に言葉を選んでいると。

時 「……そうか。そうナんだ。ずっと見てイたんだネ？はじめから、ズット……。」

響 「ち、違うつ……ぐう！」

時雨の手が私の首を絞める。

時 「ヴエールヌイ・・・どうやら君ハ僕が知つてイるヴエールヌイジヤナイネ？」

響 「ちが・・・お、おちつ・・・し・・・」

呼吸が出来ない。だんだんと意識が遠退いていく。

暁 「ち、ちよつと時雨!?何やつてるのよ?!」

暁の声を聞いて、絞める力を入れるのを止める時雨。

時 「アア、ソウカ。暁、君モナンダネ?」

暁 「ちよつと響! 時雨に何したのよ!?」

なんでこんな状況で私を疑うの!?

時 「暁、君モ僕ガシツテイル暁ジャナインダネ?」

暁 「は? はあ?! 何言つてるの時雨?!」

すると先ほどまで気絶していた夕立が立ち上がる。

盾 「あ、まだ、動いちや、だめ、です。」

盾の言葉を聞いても何も反応しない。

時 「ソウダ、敵ダ。ミンナニセモノダ……ダカラ、」

夕立が砲を盾の顔に向ける。

時 「ミンナ……」

時 「シズ「ませねえよ!!!」

時 雨が大きく横に吹き飛ぶ。時雨の手が無理やり外れたので私も横に倒れる。それと同時に、夕立も糸の切れた人形のように崩れる。

響 「ゲホッ、ゲホッ!! た、助かつたよ、矛」

矛 「ヴエル! アイツはもうダメよ! ここでぶつた斬る!!」

そう言つて、刀を構える矛。

響 「まつて！待つんだ矛!!」

矛 「なんでよ!?ここでアイツ殺さなきやあたしらが殺されるかもしねないのよ!」

響 「違うんだ！時雨はただ勘違いをしているだけなんだ！それに・・・」

そう言つて時雨を見る。まだ横たわっている。

響 「もう意識がないからしばらくは安全だ。」

矛 「・・・目を覚ましたら？」

響 「説得か、また寝かせる。今之内に鎮守府に帰ろう。」

暁 「・・・誰が時雨と夕立を運ぶの?」

暁のその一言で全員が一瞬止まる。

矛 「あ、あたしそんなに力ないしい、ここはリーダーのヴエルなんじやないの?」

響 「な、なにを言つているんだい？ここは完璧で幸福な大人なレディの姉さんが」

暁 「うえ!む、無理よ!」

響 「え？じゃあ姉さんは完璧で幸福な大人なレディじゃないの?」

暁 「なにその否定したら殺されそうな肩書き!?ここは一番力のありそうな盾さんに譲るわ！」

盾 「一人なら、ともかく、二人は、さすがに、きつい、です。」

そうやつて二人の擦り合いをしていると。

立 「うううん？ うるさいつぽい！」

夕立が目をs

響 「z a p z a p z a p ! 夕立 !!」

立 「ほいつ？」

ボー———ン。

夕立のクローンが送られてきま、

暁 「せんつ!!!」

響 「夕立！ 起きて大丈夫かい？」

立 「ちよつとくらくらするけど、 大丈夫っぽい。」

暁 「鎮守府までいけそう？」

立 「んう、 ちよつと自信ないつぽい。」

響 「とりあえず、 夕立は私と姉さんで曳航、 時雨は盾がよろしく。」

矛 「あたしは、 役なしね……ホツ」

響 「矛は時雨が起きないかどうかの見張り。 起きたら私に直ぐに報告。」

矛 「暴れたら？」

響 「峰打ち。 絶対に殺すな。」

矛「ん、了解。」

こうして、私達は鎮守府まで舵を取つた。

第14話「狂氣」

——ヒトマルサンマル『作戦海域』——

——撃て

張 「流星！交換完了よ!!」

——撃て

川『くつ！こちら第183隊！那珂中破！』

——守るタめに

長「よくやつてくれた！後退しろ！」

——敵ヲ・・・

流「全弾・・・順次射出!!」

——殺していいのだろうか？

撃っている最中に嫌悪感が湧き出し、集中できなくなる。咄嗟にポケットから注射器を取り出し、腕に突き立てる。中の液体が体の中に広がると同時に嫌悪感が遠のいていく。

流「夕張さんっ!!」

張「これがラスト！交換完了！」

夕張さんからの「ラスト」という言葉を聞いて長門さんが口を開く。

長「流星！撃ち方やめー！！」

流「り、了解です！」

すぐさま撃とうと考えていたが、長門さんの命令で艦装を止める。

陸「そろそろ前衛の子たちが危ないわね・・・」

長「うむ・・・よし、我々も前に出るぞ！」

綾・吹・張・流「[[「了解つ!!」]]」

そう言つて、敵の連合艦隊へ進路を向ける。

陸「長門、空母艦隊より入電！『我、敵主力隊ヲ発見！』

長「敵戦力は!?」

陸「・・・どうやら、『レ級』がいるみたいね・・・」

陸奥さんがそう言つてとたん。周りの人達の顔色が蒼くなつた。

長「『レ級』・・・か。」

吹「ふええ・・・」

綾「ふ、吹雪ちゃん！弱気になつたらだめだよつ！」

吹「で、でもお～」

張「たしかに……相手が『レ級』ならちよつと嫌ね……」

綾「ゆ、夕張さんまで!?」

夕張さん吹雪さん達の戦意が大きく落ちている。

私がなんとかしなくちゃ……そう思い、口を開こうとすると。

長「喝!!!」

長門さんの一喝が入った。

長「まだ始まつてもいないのに負けを認めるのか?なにもやつていないので負けを認めるのか!」

そう言われ、吹雪さん、夕張さんの表情が変わる。

吹「そうだ、まだ始まつてもいないので尻込みしちゃだめだ……」

張「兵装実験軽巡のくせに実験もせずに失敗するなんて決めつけて……バカみたい」

二人の戦意がみるみるうちに回復していく。

さすがは長門さんだなあと長門さんを見ていると、

「・・・・・・・・・・・・」

流「!!前方より重巡2、戦艦2きます!」

長「よし!行くぞ!!」

綾・吹・張・流・陸「[[[「了解っ!!」]]」

そう力強く返事をして、私は腕に針を突き立てる。

——『第十八鎮守府、執務室』——

作戦開始時はピリピリとした空気を放っていた執務室。

・・・だが今は

八「・・・・・」

七「・・・・・」

どうしたものかと頭を抱える俺と、冷静に静かに座っている七塚。

八「お前・・・もつと早くに相談してくれよ・・・」

七「そのセリフ、何回目だ?」

八「知るか! つーかテメエも作戦が始まつてからすぐに爆弾発言するなよ!!」

七塚が言つた爆弾発言・・・それは・・・

八「急に『扶桑と山城が戦えなくなる。』って、なんでそういうことを早く言わないと
だ?!」

七「それ以外に作戦が出なかつただろ」

八「だがそれでも! もつと早くそういうことを言つてくれれば別の案が考えつくかも
しないじやねえか!!」

そんな風に言い合いをしていると、

明 「ていとくうううう!!!!」

どたどたと廊下を走る音と共に明石の叫び声が聞こえ、ドアをこれでもかと言わんばかりにおもいつきり開け放つ。

八 「どうした?!」

肩で息をし下を向く明石に不安な気持ちがどんどん膨らんでいく。
しかしそんな不安も顔を上げた明石の顔を見てすぐさま消えていく。

明 「だ、第六駆逐隊がたつた今帰投しました!」

——『第十八鎮守府、入渠ドッグ』——

響 「ふう・・・・」

あれから、時雨は一回も目を覚ますことなく鎮守府にたどり着き、すぐに入渠した。

暁 「ねえ・・・・響。」

響 「ん?なんだい姉さん?」

暁 「あの子たち大丈夫かしら・・・・。」

心配な顔でいる姉さん。しかし・・・・

矛 「うお・・・夕立あんた本当に駆逐艦なの?」

立「ぽい？」

矛「なんであんたそんなに・・・」

立「矛は・・・ぽぽつW」

矛「あ”あ”!?’

そんなシリアルスな気持ちを吹っ飛ばすほどに暴れる二人。

響「別に大丈夫だと思うよ?」

暁「そう・・・?」

響「うん。あの二人は姉さんが思っているよりもすぐしつかりしているし。なによ

り・・・」

再びシリアルスな話をしていると。

暁「ひやうん?!／＼／＼

姉さんの胸をわしづかみにする手。

矛「お? 私よりないかも?」

そう言いつつ、姉さんの胸を執拗に揉みしだく矛。

矛「ねえヴエル? あなたの知り合いじやあやつぱり暁が一番まな板なの?」

その言葉を聞いて、何処からかプツンという音が聞こえた。

矛「ヴエルは服脱いで分かつたけど、暁より大きそーね。」

またプツンという音が聞こえる。

矛「雷や電もぱつと見だけど暁よりありそうよねw」

3回目の音が聞こえたと思ったら、姉さんを中心に湯壺のお湯が波立っている。それに矛も気づいたようだ。

手を放し、少し距離を置く。

暁「ほおゝこおゝ？」

矛「あ・・・か、完璧な大人のれでいゝな暁ならこんなことじや・・・」

暁「ゆ”る”さ”ん”つ!!」

唐突に始まる追いかけっこ。

ドツグの中をドタバタと駆け巡る2人。するとそこへ・・・

八「みんな無事か?!」

唐突に入渠ドツグの扉を開け放ち入つてくる司令官・・・。

響「・・・」

立「・・・」

盾「・・・」

八「・・・oh」

走り回っている二人、いまだ目を覚まさない時雨以外全員の時間が止まつた。

暁「あ！司令官!! 私と矛、どつちの胸が大きい?!」

暁もやつと司令官の存在に気が付いたらしいが、怒りで自分が今どんな状態なのか忘れてしまっている。

暁の言葉で矛も司令官を見て、

矛「・・・へ、変態いいいい!!!」

近くにあつた木製の風呂桶を司令官に向けて投げ放ち、見事顔面に命中。数センチ足が浮き、後ろにふつ飛ばされ仰向けになり脱衣所で気を失つた司令官。どれだけ心配していたのか分かつたが、さすがにこれはやりすぎだね・・・。

——『作戦海域』——

足『ちつくしよう・・・この私が、ここまでやられるなんて・・・』

長『足柄!! よくやつてくれた!! 後退してくれ!!』

足『ごめんなさい！ すぐに戦線復帰するから!!』

まだ、また大破した人がでてきた・・・。

吹「あぐう?!」

張「吹雪ちゃん?!」

吹雪さんも限界みたい・・・。

陸 「くつ・・・ここまで来たのに・・・!!」

陸奥さんも苦しそう・・・。

相手は・・・。

レ 「キヤハハハツ！アト3ニン♪♪」

ものすごく楽しそう・・・。

長 「陸奥！三人を連れて戻れるか?!」

陸 「駄目よ！すぐ追いつかれてしまう！それにあなたたちだけを残してなんか嫌よ

!!」

三人・・・二人の間違えじゃないのかな？

綾 「あ、綾波なら・・・まだ・・・いけます・・・」

長 「無茶をするなつ！・・・ぬお!?」

レ 「アヽア、ヨソミスルカラ・・・ヒヒヒツ」

長門さんも限界みたい・・・

張 「くつ・・・せめて流星さんだけでも・・・！」

え？私？・・・あれ？いま私どうなつてているんだろう？

そう思い、なかなか動かない頭を動かし始める。

ここは何処で、今は何をやっているのかをゆっくりと考える。

頬やお腹が冷たくて気持ち良い。

周りは・・・少し煙たく、焦げ臭い。

体は・・・重い。

今は・・・戦闘中・・・!!!

頭がフル回転しだし、海の上で寝そべっている体に対し、すぐに立つよう命令が下る。

流「ううつ・・・」

陸「流星!? 大丈夫!?」

よろよろとしながら、足に力を込めて立ち上がる。

立ち上がったことを確認すると、頭から別の命令が下る。

一一撃て

その命令に従い左手をポケットに伸ばす。

一一打て

ポケットから注射器を4本取り出した。

一一敵ヲ

残りはあと2本・・・

一一コロセ

左手の注射器4本すべてを腕ではなく首に突き立てた

中の液体が体中をめぐつていく・・・
とても気持ちがいい・・・

そんな考えと同時に、無性にモノを壊したくなつてきた。

張「ち、ちょっと流星?! あなた今なにしたの?!」

夕張がこちらに向かつて話しかけてくる。

流「アハハ・・・ユウ張さん・・・大ジヨウ夫でスよ〜?」

張「ど、どこがよ!? それにあなたさつきまで・・・」

二人で話をしている時だつた。

レ級がこちらに向かい突進してきた

長「夕張!! 流星!!!」

長門の掛け声で夕張はすぐに回避行動に出るが・・・

レ「ズイブンヨユウナンダネエ!。キミタチ!!」

レ級はすぐに夕張の腹部に拳を、私の顔面にしつぽをめり込ませた。

張「う・・・つぶあ・・・・」

レ「キヤハハハツ、ハイ2リオーシマイ」

夕張がその場で白目をむき、口から赤黒いモノを出して倒れる。そして私は・・・
ガブリ

レ「へ・・・？」

流「ン♪・・・クロ星ミツツかな？不ズい」

レ級のしつぽの一部をかみちぎり、すぐに吐き捨てた。

レ「ハ・・・？エ・・・？」

レ級本人も何をされたのか分かつていなし。しかしすぐにレ級の拳が私の横腹に突き刺さる。

そのまま、長門のいるところまで吹き飛ばされる。

レ「テメエ・・・ナニシヤガルッ！」

流「アは、それハこつちのセリフだよ♪」

長「り、流星・・・大丈夫か？」

長門さんがこちらのことを見つめる。

流「長門・・・さん。」

唐突に頭が痛くなる・・・邪魔な思考が入ってきた。

流「皆さんを・・・鎮守府に・・・！」

長「?!い、いやだめだ!!私もまだ戦える!!だからお前だけを「いいからっ!!!!」

流「そんな・・・オンボロなアナタはア、邪魔なんデすよ。アハハ♪」

頭痛が引いていく・・・完全に引いたことを確認してレ級を見る。

「!?」

レ「テメエ・・・コロス!!」

ものすごい形相でこちらを睨んでいる。

それを確認し、長門から離れるようにしてレ級をあおる。後ろから長門の声が聞こえるが・・・まいや。

レ級に砲を向け、口角を上げ、

流「サア・・・コロシテアゲル」

そうつぶやく。

第15話 「桜と蓮と決着と」

日「・・・・・。」

時刻はヒトヒトヒトゴ。

右回りの私たちが到着してから15分が経過していた。

伊「日向・・・あんたも少し休んだら?」

到着してすぐに、近くの小島に上陸、待機していた。

・・・日向を除いて。

日「・・・・・。」

伊「扶桑たちならもうそろそろで来るわよ。」

日「・・・・・。」

先ほどから扶桑たちが来るであろう方向の水平線をじつと見つめる日向。
ずつと見つめたまま、動かない・・・。

伊「日向!」

日「ん・・・あと少ししたら戻る・・・。」

やつと戻ってきた言葉。だがこちらを全く見ない。

ふつふつと湧き上がつてくる気持ちが、いよいよしびれを切らした。

伊「……ああんもう!!!」

日「……？伊勢??」

伊「私もあなたの横にいるつ!!」

そう言つて、日向の真横に立つ。

日「……休んでいた方がいいぞ。後から「うるさいつ!!」!!」

伊「あんただけ休んでいないとか不公平じやん!!」

腕を組み、日向が見て いるであろう所を見る。

日「……」

伊「……」

そうやつて、無言で日向と一緒に扶桑たちを待つて いると……

朝「見張り交代します！」

荒「伊勢さん達そろそろやすんだらあ〜？」

朝潮と荒潮が私たちが見張りをして いると勘違いしてやつてきた。

伊「あ、これ見張りじやないから別にいいわよ。」

朝「え、では何を……」

伊「扶桑たちを待つてゐるの。」

そう説明すると、

朝「わかりました！では、私も・・・」

荒「じやあ、わたしもお！」

なぜか二人も扶桑たちを待ちだした。

そしてしばらくして・・・

荒「・・・あらあ？なにかしらあ？」

朝「？どうしたの荒潮？」

唐突に荒潮が別の方向を向いた。

荒潮につられ、朝潮と私もその方向を向く。

するとそこには・・・

伊「・・・船？」

私のその言葉に日向が反応する。

日「む？かなり大きく迂回していたのか？」

伊「ん、・・・でも編成が・・・ん、？」

少しばかり遠くよく見えない。そんな中・・・

荒「あれ、普通に敵じやないのお！」

朝「!皆さん！戦闘準備を!!」

荒潮の一言朝潮がハツとなり、砲を構える。

伊「ん？敵？でもなうんか違う……ん？？」

そんな中、私一人だけ唸り、必死に見つめる私。

日「……瑞雲を出す。」

伊「え？出しちゃつていいの？」

日「偵察用にだ。敵ならそのまま攻撃隊を出す。」

そう言つて飛行甲板を展開し、瑞雲を出す。

瑞雲を放つこと数分後……。

日「……ん。瑞雲から連絡が来たぞ。」

そう日向が伝えると全員日向に注目する。

伊「で、どうだつて？」

日「うん……ん？」

朝「やはり敵ですか？」

日「いや、敵ではないのだが……。」

日向が言葉を濁す。

伊「なによ日向、らしくないわね。」

日 「あ、ああ。すまん。」

そうして、ひと呼吸おいて、日向が報告を再開する。

日 「どうやら、あれは敵ではなく艦娘とのことだ。」

朝 「ということは、増援?」

伊 「え? 他の鎮守府から?」

荒 「あらあ!。ずいぶんとやさしいていとくさんなのねえ!」

日 「いや、他の鎮守府からじゃ……」

日向が否定しようとしたときに、突然通信に入る。

?『伊勢さん! 日向さん! 聞こえますか?!』

聞いたことのある声。

電『電です! 聞こえているのでしたら返答をお願いしますっ!』

通信の主は『電』と名乗り、私は驚き目を丸くする。

伊 「こちら伊勢! ほ、本当に電ちゃんなの?!」

電『なのです!』

電は強く返事した。

その返事を聞いて笑顔を作る伊勢だが日向は……。

日 「なら電、その後ろにいる艦娘は誰だ?」

ひと

日向一人は、警戒している。

雷『え？ 雷の事忘れたの??』

日「いやそつちじやなくて・・・。」

伊「ともかく、まずは合流しましょ！ 話は後から聞くから。」
そう言つて手を打ち鳴らす伊勢。

日「伊勢よ。少し無用心すぎではないか？」

伊「大丈夫よ日向。逆にあんたは気が張りすぎよ。」

そう会話をしながら帰ってきた瑞雲を戻す。しばらくして『電』と『雷』、そして見知らぬ艦娘も合流した。

合流したその艦娘を見て、伊勢と日向は少し驚き、朝潮と荒潮は目を輝かせた。

身長は、戦艦の伊勢や日向よりもかなりあり、がつちりしている。

背中には、大和型、いや、それよりも大きくて数の多い砲の数。

鋭い目つきで伊勢と日向、荒潮、朝潮を見ている。

? 「電、雷よ。この者たちは？」

ゆつくりと、威厳のある声で小さな二人に問う。どうやら、少し警戒しているようだ。

雷『『桜華さん、この人たちは私達の仲間よ？』』

電「そ、そうなのです！だからそんなに睨まないでほしいのです！」

そう二人から言われ、「ふむ・・・」と言いながらも四人を見つめる。桜華と呼ばれる艦娘を中心にピリピリとした空気が漂っている。

そんな中・・・

朝「お初にお目にかかります！朝潮型駆逐艦1番艦『朝潮』です！」

伊勢や日向の前に立ち、敬礼をする朝潮。

荒「同じく朝潮型駆逐艦4番艦の『荒潮』よお～」

そう言って、日向の後ろから顔をだす荒潮。

その二人の挨拶をきっかけに、場の空気が和み始めた。

伊「あつちやあ～。駆逐艦の一人に先越されちゃったか～。」

日「ふむ・・・。」

伊勢はポリポリと後頭部をかきながら笑顔を見せ、日向は腕を組み目を瞑る。

伊「あたしは『伊勢』、伊勢型航空戦艦1番艦の伊勢よ。」

日「同じく。航空戦艦『日向』だ。」

そう四人が自己紹介をすると、

桜「ふむ、自己紹介感謝する。『桜華』だ。よろしく頼む。」

と、桜華と名乗る艦娘は握手を求めた。

伊「こちらこそ。よろしくね！」

そう言つて、握手を返したのは伊勢。そのあとも、桜華は全員と握手を交わす。その様子を見て、ほつとする電と笑顔でうんうんとうなずく雷。そして雷は何かを思い出したように「あ。」という。

雷「そういえば電。『すいれん水蓮』は？」

電「え？ あ、あれ？ どこ行つたのです？」

きよろきよろとあたりを見回す二人。すると唐突に朝潮の足元の海が泡立つ。朝「て、敵潜水艦?!」

そう朝潮が叫ぶと、三人が驚き、警戒する。

電「う、撃つちやダメ――――!!」

電がそう叫び全員の目線が電へ向く。

やがて、影が見え、そこからポコンと頭が出てくる。
そして・・・

? 「白パン・・・白パン・・・くまさんプリント・・・ストッキング・・・」

そう言つて、ひとりひとり指をさしていき・・・

? 「ストッキングの下は・・・黒・・・」

そう静かに言つて、また沈んでゆく・・・。

四人はポカーンとしてその場に立ち尽くしている。

日「い、雷よ……」

最初に口を開いたのは日向だ。

日「い、いまのはいつたい……」

止まつてゐる思考を懸命に動かし、情報を得ようと/or>する。

雷「……今のは潜水艦の『水蓮』ちゃん。見ての通り、物静かな子よ……」
そう情報を伝えて、はあとため息をこぼす雷。すると先ほどとは違う場所から、頭す
いれんが出てきた。

水「臭う……臭う……」

水平線の彼方を見て静かにつぶやく水蓮と呼ばれる艦娘。

水「血と……硝煙の臭いが……。聞こえる……聞こえる……。1つの魂が……」

崩れ始めている音が……」

すると、くるつと六人を見て、静かに、重くつぶやく。

水「急がないと……あの子……死ぬよ?」

——『作戦海域、深部』——

レ「ナンデツ!? ナンデナンデナンデツツツ!!!!」

レ級が叫びながら砲を放つ。

しかし弾は当たらず、水面に落ちて大きく水柱を立てるだけ。

レ「オカシイダロツ！アンナ状態ナラ普通ツ!!!」

そう悪態を吐きながら後ろから迫るアレから距離を取ろうとする。
しかしいくら離れようとしても、迫つてくる。

レ「ツ!! クソツタレガア!!!」

砲を放つ、今度は顔面に命中。

大きくなっただけぞるが、ぐんと体を直し、レ級を見つめる。

・・・その口角を、裂けんとばかりに持ち上げながら。

レ「ナンデ?! ナンデシナナイ?! ナンデトマラナイ?!」

・・・なんで？ ナンデつてそれは・・・

流「イタクないからダヨ？」

イタクナイ。そう、さつきから全く痛くない。

脚が軽い。体が軽い。心も軽い。

重い砲や艦装を装備しているはずなのに、今じゃ何にも装備していないぐらいに体が

軽い。

レ「イタクナイツテ・・・ オカシイダロ?! オマエ、サツキ・・・」

レ級の顔が恐怖している、こちらを指す指が震えている。

レ「左肩、ワタシニ食イ千切ラレテイルンダゾ・・・？」

流「・・・へえ」

そう言いながら、止まつたレ級の顔面目掛けて砲を撃つ。

油断していたレ級の顔面に見事命中。レ級は大きく叫び声をあげる。

流「ダカラ・・・ナニ？」

そう言つて、さらに砲を撃つていく。やがて弾がなくなり、金属と金属のぶつかる音だけが響く。

レ「ハア・・・ハア・・・ヘヘツ、弾切レミタイダナツ!?!?」

弾切れと分かつたとたんにワタシは手持ちの砲を全力でレ級に投げつける。

レ級はすぐさま飛んできた鉄の塊を払い落とす。しかし直後ろの拳には何の反応もできずに、直で顔面にもらう。

その時、ワタシの手首から鈍い音が聞こえた気がするけど、まいつか♪

レ級はあまりの痛みに顔を抑えながら悶絶している。

流「ドウシタノ？レ級？イタイノ??」

そう言いながらレ級を蹴り倒す。

流「ネエ？イマドンナキモチ?!ドンナ感じ??イタイ??苦しい??悔しい??ねえねえねえ

ねえ？！！！

そう言いながらレ級を踏みつける。

レ級はうずくまりながら「ヤメテ……イタイ……」と小さくつぶやく。

しかしその途中、ワタシの体に異常が生じる。ズキン、と頭が痛む。

それをきっかけに、体のあちこちが痛みだす。

流一ヴツ?!ぐああ?!』

左腕を動かそうとするが動かない。すぐにポケットにあるクスリを使おうと手を伸ばすが、指が動かない。

そうこうしているうちに、どんどん痛みが増して、ついには体中が痛みだす。

さらには眩暈と吐き気が生まれ、ついには立てなくなりその場でうずくまつてしまつた。

そう悲鳴を上げだし、
やがて悲鳴は止まり。
が細く息をこぼす。

レ級は、何事かと目を丸くしていたが、やがてニイイと笑い出す。
レ「ナンダア？ ドウシタンダア??」

そう言つて、わざわざ私の左肩を踏みつける。

「アア？ ドウシタ？ 痛クナインジャナカツタノカ？ エエ??」
そう言い、傷口をぐりぐりとえぐる。

レ「ネエ? イマドンナキモチダ?? ドンナ感ジダ?? イタイカ?? 苦シイカ?? サツキマデハ
優勢ダツタノニ一気ニ逆転サレテ悔シイカ?!」

私は途切れそうな意識の中、懸命にポケットに手を伸ばす。しかし指がうまく動かず、ポケットの中のモノは取れない。

「ア？ ナンダア??」

その動きを見て、レ級が代わりにポケットの中のモノを取り出す。

レ「ナンダコレ？注射器??」

レ級が持つてゐるそれに懸命に手を伸ばす私。それを見て、レ級の口角が大きく持ち上がる。

レナルホド。コレノオカゲデオマエアンナニツヨカツタノカ……。」

そう言つて、自分の腕に針を突き刺すレ級。注射器の中の液体がレ級の中に入つてい

8

レ級が高笑いしながら空になつた注射器を投げ捨てる。

私はそのまま意識が遠のき、やがて目の前が真っ暗になつた。
・・・あ、私死ぬんだな・・・。

そう感じ、考えながら。意識が消える。

目の前に転がつているモノの活動が完全に止まつたことを感じたレ級。完全に止まつたはずなのに、まだ浮いている。

レ「・・・キモチワルイシ、トツトト沈メ。」

そう言い、砲を流星に向けるが。

レ「ツア!?」

レ級が唐突に苦しみだした。

レ「ナ、ナン・・・・ダ?・・コレ・・・」

唐突に吐き気や眩暈がレ級を襲う。

レ「コレ・・・イタミヲケス・・・モノジャ・・・?」

やがてレ級はせき込む。

レ「キ、キモチ・・・ワルイツ!!」

やがてレ級は、休む場所を探すべく流星から目を離し、よろよろと移動を開始する。
すると・・・

ボコボコボコボコボコ

流星の近くの水面が泡立ち始めた。

レ「チツ・・・コンナ時ニ!!」

レ級はその泡に向かい砲を向けようとするが。

パパパンツ！

小さな衝撃が背中を襲つた。

レ「ナ、ナンダ!?」

後ろを振り返るが、誰もいない。

また、背中に走る衝撃。

だが、振り返つても誰もいない。

それが2、3回繰り返される。

決して痛くはない。レ級にとつては、肩をポンポンとたたかれる程度だが・・・
パパパン！

こうも何回も繰り返されると

レ「アーモウ!! ウツトオシイ!!!」

う。
氣分が悪くてイライラしているレ級にとつて、これほどうつとおしいことはないだろ

レ「ナンダヨ!! ナンナンドヨ一体!!!!」

そう叫びながら周りを見渡す。

しかしそこには誰もいない。あるのは邪魔なゴミのみ・・・。
懸命に周りを見渡していると・・・

ドオオオオオン!!

今度は先ほどよりも大きな衝撃がレ級を襲う。その方角を見ると……

電「あ、あたつた……のです??」

雷「な、ナイスよ電!!」

レ級に砲を向ける二人の駆逐艦。『雷』と『電』レ級はその二人をジーツと見て

レ「・・・コロス!!!!」

と叫んで全速力で走つてくる。

雷・電「ひいいいいいいいいい!!!!」

悲鳴を上げながらその場から逃げる二人。それを物凄い形相で追いかけるレ級。

しかしその追いかけっこもすぐに終わつた。

レ級の顔面に一発の砲弾がめり込む。それをきつかけに、レ級の周りに有に50は超える砲弾が雨のように降り注ぐ。

レ級はその中、悲鳴を上げながら砲弾を体に浴びる。

やがて砲弾の雨は止み。大きな水柱が落ち着くころには、そこにレ級の姿はない。

それを確認して、その場で大きく息を吐きながら座り込む二人。そしてすぐに雷は通

信を開き

雷「こちら雷。レ級の撃破を確認したわ。」
と、相手に伝える。

水「・・・・・」

流「・・・・・」

生きているのか死んでいるのかわからない流星を見つめる水蓮。

水「・・・・・どうする？」

と、返事ができるわけがない流星に聞く。

もちろん、返事はいくら待っても来なかつた。その代わり。

長「りゆうせえええええい!!!」

長門が夕張と共にやつてきた。それを確認した水蓮は流星の頭をつかみ長門たちの所へ運ぶ。

長「!!!おい!!流星!!しつかりしろ!!!!」

張「流星さん!!!大丈夫ですか?!?!!」

目の前に、生きているのか死んでいるのかわからないモノを見て懸命に声をかける二

人。

その二人を見て水蓮は

水「・・・たすけたい？」

と聞く。

その言葉に二人は目を丸くする。

長「当たり前だ!! 我々の仲間なのだから助けたいに決まっているであろう!!!!」

長門は怒鳴るように返事をする。

その言葉を聞いた水蓮は「そう・・・」と短く返事をする。そして二人を交互に指さし。

水「のろま・・・のろま・・・」

そうつぶやく。さらには自分を指さし、

水「わたしは・・・非力・・・」

とつぶやく。

長「た、確かに私も夕張も足は遅い！だが!! やれることはやる!!!」

そう叫び、流星を抱き上げる長門。そしてそのまま鎮守府に走り出そうとするが、
張「ま、まつてください！ 長門さん!!」

夕張が長門を止める。

長「夕張!!お前まで!「流星さんを私の背中につ!!」!?」

張「流星さんは私が運びます!!」

そう言つて、自身の艦装を操作し始める夕張。

長「しかし!お前の速さでは・・・」

張「まさか、なんとなく用意したこれがここで使えるなんて・・・
そうつぶやきながら、操作する夕張。すると・・・
ガチャンガチャガチャ!!!

夕張の艦装が今までの形とは別の形に変形した。

長「ゆ、夕張・・・これは・・・」

張「説明は後で!早く流星さんをつ!!」

長「?!わ、わかつた。」

疑問を持ちながらも、夕張の背中に流星を担がせる。

張「よし・・・少し離れてください!!」

そう夕張が叫ぶと、夕張の周りの水面が大きく波立つてゆく。

すると、大きな水しぶきを上げながら、夕張がものすごいスピードで遠のいていく。

長「・・・」

水「・・・」

それをただただひたすら眺める二人。

水 「・・・ ところで、あなたはだあれ？」

長 「えつ？」

第16話「作戦終了」

——『鎮守府付近海域』——

張「流星！もう少し！！もう少しだからね!!!」

そう後ろのモノに呼びかける夕張。だが反応は帰つてこない。

現在夕張は、自身が試験的に開発、搭載していたタービン。

『戦艦でも島風のように速くさせよう！』という無謀なコンセプトで創られたタービン、『VOT（Vanguard Overed Turbine）』を全力で稼働させていた。そのおかげで10分足らずで鎮守府が見える距離まで移動できた。

張「よしつ！このまま！」

鎮守府が見え、少し安堵した夕張。

・・・だが。

張「えっ？なんで・・・？」

どんどん失速していることに気が付いた。

張「まさか・・・燃料・・・切れ？」

そう思い、自身の艦装をチェックすると、そのままかだった。

張「クソツ！こんな時に!!あとちょっとなのに!!!」

そうわめくも、どんどん速度が落ちていく。

そしてついには、推力がなくなり、潮の流れに身を任せることになつた夕張。遠くに見える鎮守府に右手を伸ばすが、届くはずがない。

張「つ・・・・！そだ!!通信!!!」

そう思い、急いで通信機を動かすが・・・。

張「こちら夕張！こちら夕張!!・・・・嘘・・・故障!？」

聞こえてくるのはノイズばかり。

張「なんでよ!?なんでこんな時ばかり!!!」

そう叫び、自身の艦装を思いつきり殴る。そのとき、艦装の砲塔部からカラッと金属が転がる音がきこえた。

張「そうだ！砲を撃つて!!気づいてもらえば!!」

そう思いすぐに砲を撃とうと構えるが。

張（でも・・・背中の流星さんが砲の衝撃に耐えれるの?）

そう考え、すぐに撃つのをあきらめる。

張「クソツ！クソツくそう!!!」

度重なる不運で自分を責めだす夕張。

張 「誰か！誰か気付いてよおおおおおおおお!!!!」

そう鎮守府に向かい大声で叫ぶ。

しかし誰からも返事はこない。

張 「誰か・・・・だれかきてよお・・・・」

顔をしたに向け、涙がこぼれる。

「・・・・い」

すると、どこか遠くから声がした気がする。

そう思い、すぐに顔を上げる夕張。視線の先には・・・。

川 「夕張――どうした――！」

鎮守府からこっちに向かつてくる川内の姿が見えた。」

張 「か・・・・」

その姿を見て、さらに涙がこぼれる夕張。

張 「かわうちいいいい！！はやく!!早く流星さんを!!!」

川 「かわうちいうな！で？流星がどうし・・・・！？」

合流した川内は夕張の背中で赤黒く染まつた流星を見て、息を止めた。

張 「早く・・・・！流星さんを!!!」

川 「わかった！！」

そう短く返事をし、すぐに流星を背負う川内。そして、そのまま鎮守府の方へと走り出す。

張「お願い……！」

そうつぶやく夕張。

張「あ、そういえば」

ふと、我に返る夕張。

張「あたし……どうやつて帰れば……」

そう考える、海にポツンと取り残された夕張だった。

――『第十八鎮守府、波止場』――

響「……」

入渠を終えて、海を眺める響。

響（みんなは大丈夫だろうか……電と雷はいまどこらへんだろうか……）
等と不安を抱きながらじつと水平線の先を見ていると、
響（？なにか猛スピードでこっちに？）

こちらに近づく何かが視界の隅に見えた。

そこにピントを合わせる前に。

ドツパアアアアアアアアアアアン！

海水を頭からかぶる響。

響「・・・・・」

その後何かが響の歩いてきた方向へと走つていった。

響「・・・せつかくお風呂入ったのに・・・。」

ぐつしよりと濡れた着替えたばかりの服を軽く絞る。

響（しかし、今のは川内さんと・・・？）

一瞬見えた光景を懸命に思い出す。

川内ともう一人、背中に力なくうなだれていた人がいたことを思い出す。

響「・・・まさか」

すぐに駆け出す響。だが川内が走つていった方向とは別の方に走つていく。

——『第十八鎮守府、医務室』——

青「しつれいします!!!!」

勢いよく開け放たれるドア。

「医務室ではお静かに。」

青葉に向けられる殺氣。

八「いや、今回は見逃してやつてくれ。で、どうした青葉。」

そう言われ、少しムツとする氷川丸。

無効化に成功』です!』

そう青葉が喜々とした声で告げる。

七·八

その言葉を聞いて、俺たち二人の提督は立ち上がり、

七・八「いよつしやああああああああああああああああああああ

と歓喜の声を張り上げる。

氷川丸も笑顔になり、ふうっと息を吐く。

しばらく一人の提督がわつちやかわつちやか騒いでいる。しかし、青葉の顔は少し浮

かない表情をしている。

そのことに気が付き、すぐに青葉に向き直る俺。

八 「どうした青葉？ほかに何かあつたのか？」

そう聞くと、青葉は口を開ける。

青「轟沈・・・2です。」

その言葉を聞いた途端、全員の表情が一変する。

するとまた、勢いよく開け放たれるドア。

響「水川丸先生！すぐに入渠ドッグまで！それと司令官！高速修復材を準備して!!」
入るやすぐに指示を出す響。水川丸は一度こちらを見る。

八「すぐ向かつてくれ。」

そう再度指示を出すと。水川丸は医務室から飛び出していった。

八「修復材も準備しよう。俺たちもドッグに向かう。その道中、何があつたか聞かせてもらうぞ。」

そう響に聞くと力強く頷いた。

――『第十八鎮守府、入渠ドッグ』――

響からは2つのことが分かった。

1、川内が重症な誰かを背負つてきた。

2、だれが重症になつたのかは分からぬが。響が見るには意識がないとかんじた。

この二つのことを聞いてさらに移動速度を上げて、入渠ドッグに向かつた。

俺たちが入渠ドッグに着くころには、あわただしく駆け回る川内と、指示を出す水川

丸、手術衣を着た明石が居た。

八「冰川丸、状況を。」

氷「はい、特務艦『流星』が意識不明、かなり危険な状態なので、すぐに手術室に移動し、手術を行います。」

響「そんな・・・流星が・・・！」

氷「一刻を争う状況ですので、詳細は後程お伝えします。」

そう伝え、すぐに明石と共に手術室の方に向かう冰川丸。

八「・・・なあ、七塚。」

七「・・・すまん、俺にはこうなることと、この後のこともわからん。」

八「・・・そうか・・・」

そう短く会話し冰川丸らが向かつた方を向きただただ立ち尽くす3人だつた。

——『鎮守府付近海域』——

張「・・・・・」

ただただぼーっと鎮守府の方を見つめる夕張。

張「流星さん、大丈夫かなあ・・・。」

静かに、そうつぶやく。

張「・・・・・」

日が傾き、水平線に沈む太陽に照らし出される海。

張「いつまで私、このままなんだろう・・・・・。」

そうつぶやき、錨の鎖をいじる夕張。

張「かわうち・・・なにやつてんのよお・・・・・。」

――――

川「ヤセンツシユイ!!・・・だれよ、私の噂してた人・・・・・」

張「・・・・・さみしいなあ・・・・・」

そう言つて、少し夜のとばりが見える空を見上げる。

張「・・・・・」

・・・・・

張「・・・・・」

・・・・・

張「誰か！誰か気付いてよおおおおおおおお!!!!」

唐突に叫びだすが、何処からも反応は無い。

張「ハア・・・・ハア・・・・」

・・・・

張「迎えにこいやあああ!!かわうちいいいいいい!!」

張「あ“か”し“さ“ん”う“う”う“う”う“う”う“う”う“う”う“う”!!!!」

少し泣きながらわめく夕張。しかしそのわめきも、ただただむなしく海の波の音にかき消される・・・。

張「ぬおおおおおおおおおおおお!!!!」「るせえ!!!!」ファツ!?」

矛「なんのよさつきからあんた!!ヤーギヤー騒がしいのよ!!!!」

夕張の前には少し小柄な少女とレ級の様な盾を持つた少女が現れた。

張「・・・・」

矛「なにあんた?敵のスパイ??それとも敵そのもの??叩き切つていい??」
そう言いながら腰に提げている刀に手をのせる矛。

矛「なにかいいなさいよ!それとも「・・・たあ・・・は?」

張「たすかつたああああ!!!!」

矛「うるせええええええええええ!!!!」

そんな二人を見て、自身の盾を前に構えてその陰でプルプル震える盾。
矛「笑うな!・・・あくもう切る!こいつ斬る!!たたつキル!!!!」

盾「ま、まつて w矛w」

矛「笑いながら止めるな!!」

盾「コホン・・・たすかつた、とは、どういう、意味?」

そう言い、夕張を睨む盾。

張「あ、ごめん。いきなり叫んじやつて。あたしは『夕張』。第十八鎮守府所属の兵装実験軽巡洋艦よ! いきなりで悪いけど、あたしを曳航してくれない?」

そう夕張が説明すると、矛と盾は目を合わせ警戒を解く。

矛「わかったわ。あたしたちもちようど今から帰るところだつたし。」

そう言われ、顔面いっぱいに笑顔を作る・・・

張「ん? 帰る?」

盾「一応、本部に確認、してみますので、ちょっとまつてて、ください。」

張「・・・本部つて、どこ?」

そう夕張が聞くと、盾は第十八鎮守府の方へ指を指した。

張「・・・へ?」

そしてしばらくすると。

盾「え・・・他の方も、もうじき、ですか?・・・はい。・・・はい。・・・了解です。急ぎ帰還します。」

という盾と通信機の会話が聞こえてきた。

盾「お待たせ、しました。えつと…夕張、さん？本部に、確認ができたので、曳航、します。つかまつて。」

そう言つて盾は左の腕を伸ばす。

張「あ、うん。ありがと…。」

張（この子たち、新しく配備された子かな…？）

盾の腕を取りながら二人の艦装を見る夕張。

張（この二人の艦装…まだ開発途中なのかな？砲がない…それに、見たことのないタイプだ。）

そう考えながら見ていると、視線に気付いた矛が刀の刃を少し見せる。

矛「なにじろじろ見てんの？失明したいの？」

盾「矛、夕張さんは、味方、です。利敵行為は、重罪、ですよ？」

そう言つて、矛を睨む盾。

矛「…冗談よ。でも、言いたいことがあるならはつきり言つてほしいのよね。」

そう言つて夕張を睨む矛。

張「あ、ごめんなさい。あなたたちのこと見たことのないなって、思つてて。」

矛「そりやそうさ、ついさつき着いたばかりだし。」

盾「詳しいことは、あとで。つきました。」

そう言つて、ドッグに入つていく三人だつた。

——『第十八鎮守府、港』——

長「艦隊、帰投しました。」

今回の作戦に参加し、戻ってきた艦全員が整列し、敬礼をしている。

八「ん、皆よく頑張ってくれた！君たちのおかげで、敵の脅威は去つた！今夜はゆつくり休み、また明日からよろしく頼む！第十七鎮守府の皆も、作戦に協力してくれてありがとう！」

そう言い、今いる全員の顔を見る。各々安堵した顔、疲れている顔等、様々な表情をしている。

・・・ただ一人を除いて。

八「では皆、解さ「提督」・・・」

疲れている皆に長々話すのは酷かと思い、早々に話を切り上げようとすると、手を挙げる者が一人いた。

八「・・・発言を許可する。手短にな。」

日「ありがとう。扶桑は何処にいるのだ？」

その言葉を聞いて周りがざわつき始める。

八「……」

日「山城は？時雨は？夕立はどうした？」

そう言いながら、俺の前まで寄つてくる日向。

日「合流時間になつても現れなかつた。それに今この場にもいない。なんの連絡もな
い。」

そして俺の肩をつかむ。

日「教えてくれ……提督よ……。4人は何処なんだ……。」

目じりに涙をためながら、懸命に問う日向。

八「……「時雨と」!?」

七「時雨と夕立は、今は、医務室で休んでいる。」

俺が悩んでいると、唐突に話し出す七塚。

日「……扶桑、山城は？」

七「……今回の作戦遂行のために全力を注いでくれた。」

そう言葉を濁す七塚。

日向は肩に置いた手を下し、七塚を睨む。

その視線を受けながらも、七塚は口を開く。

七 「扶桑型航空戦艦一番艦『扶桑』、扶桑型航空戦艦二番艦『山城』。両名共に反応が無い。」

その言葉を聞き、一部の者は驚き、一部の者は泣きだす。

その報告を聞いて日向は、

日「……は？」

うつむきながら何かをつぶやく。

七 「どうしたのかな、日向さん？」

日「捜索はしたのか？」

顔を上げ、強く問う。

七 「作戦中だったのだ。捜索する暇なんてなかつた。」

その言葉を聞くや否や、日向は海に向かい飛び込んだ。

伊「あちよ、日向?!どこ行くの?!」

八「日向!! 戻つてこい!!」

俺と伊勢が叫ぶが、全くこちらを見ようとしない。

日『伊勢! 提督に伝えてくれ! 後でなんでもすると!!』

伊勢の通信機から日向の声が聞こえる。

伊「ちよちよ! 日向!!」

八「伊勢……」

伊「あ、ごめんなさい提督!! おこ「通信機を貸せ」……はい」
渋々通信機を渡す伊勢。

八「日向……」

日『止めても無駄だ！ 私は信じぬ!!』

八「いや、 捜索隊を出す。 それにお前、 燃料はあるのか？」

日『……あ』

通信機越しに間の抜けた声が聞こえる。

八「全く……暁！ 韶！ 川内！ 神通！ 行けるか？」

そう呼びかけると、4人は、前に出てきて大きくな

川「やせんだああああああああああああああああああああ!!!!」

づくもの以外にも叫ぶバカが一人。

八「暁、 韶。 悪いが日向に燃料を届けてくれ。」

暁・韶「〔了解〕」

4人に準備をさせ、 出そうとすると

古「あの！ 八谷指令!!」

七塚の所の古鷹型重巡洋艦『古鷹』が話しかけてきた。

八 「どうした？」

古「わ、私も同行させていただいてもよろしいでしょうか?」

それを筆頭に、「私も！」「私も」とどんどん志願する船が出てくる。

八「だ～もう!!損傷している奴はすぐに直してこい!それに顔色が悪い奴は留守番!

こうして、第二次大規模作戦『扶桑型搜索』が始まった。

——フタフタニーマル【第十八鎮守府、執務室】——

七塚、俺の二人は今回のことの報告書を作成中・・・
そんな中、扉をノックする音が聞こえる。

俺は入るようにな
る

七「今両提督は不在だ、後にして。」
促したかつたです。てか促します。

青「ど、ども、青葉入ります。」

そう言つて入つて来たのは、青葉だ。

八
「どうした？」

青「は、はい！先ほど扶桑型のお二人を発見したと連絡が入りました！」

八「おおっ！！そうか！！そりやよかつた！！」

七「・・・状態は？」

喜ぶ俺に対し冷静に青葉に続きを聞く七塙。

青「はい！お二人とも艦装は全壊ですが、お体の方は特に異常はないらしいです。」

七「そつか・・・」

青葉のその言葉を聞いて、今度こそほつとする七塙。

八「よつし！すぐウチで検査しよう！氷川丸と明石に・・・あ」

すぐに二人に検査を頼むよう青葉に命令を下す前に思い出す。

青「・・・まだ、手術室からの報告はありません・・・。」

そうして全員でうつむいていると。

バンツと執務室のドアが勢いよく開く。

氷「失礼します！」

八「氷川丸!?」

氷「手術は成功しました！脈拍、呼吸は正常値です。ただ、血液が少し足りないので、しばらくは目を覚ましません。」

手に持っていたカルテを俺の机に広げ説明をする。その目はとても嬉しそうな目

だつた。

八「そうか！ああ、氷川丸。この後二人ほど身体検査をしてほしいんだが。大丈夫か？」

七「いや、三人だな。」

そう言つて七塚が立ち上がる。

氷「三人ですか・・・少しつらいですが大丈夫です。で、患者は？」

八「ああ・・・ああ、扶桑と山城。それに・・・」

七塚が扉をゆっくり締めると、扉の後ろから白目をむいた青葉が現れた。

八「お前が気絶させた青葉。」

こうして、全ての作戦は成功し、幕を閉じた。

第17話 「響の報告書」

――――

やあ、多くの司令官諸君とそうでない諸君、『響』だよ。

・・・いや、書類上では『В е р н ы й』だ。

あまりこの名前は好きではないから、響と名乗っているよ。

諸君は、『特務艦』の子達をどう思う？

かわいい？よくわからない？ゆるせない？もつとわかりやすく記せ？・・・それとも、

・・・バケモノ？

私？私は『よくわからない』に一票入れるね。

なんでこんな話をしているのか？つて疑問に思う？思つてくれ。

それは本編に急に出てきた特務艦。『矛』『盾』『桜華』『水蓮』がいかにして我が鎮守府に来たのか謎だつただろう？

今日はこの4人に出会い、今回の作戦に参加するまでの流れを綴つた『報告書』を君たちに公開しようと思う。

え？そんなモノを見せても大丈夫かつて？大丈夫だよ。理由はともかく、まあ見てく

れ。

——マルキュウサンマル『南西諸島海域』——

私達は、司令官の命令で『資源輸送任務』を遂行中だつた。

暁「もうしれないかんのばかっ！」

雷「暁姉またそれ？」

暁「だつてこの私が遠征任務に行くのだから見送りぐらいしなさいよ！」

響「姉さん、それ、5回目。」

電「まあまあ暁お姉ちゃん。司令官さんは昨日夜遅くまでお仕事頑張つていたのですから、今回ぐらいは許してあげてほしいのです。」

そんな風に4人で仲良く遠征えんそくしていた。

旗艦は1番艦の『暁』

響「ほら姉さん。前見て。」

暁「見てるわよっ！」

電・雷「暁姉「お姉ちゃん前前!!」

暁「いやだからみてるつていうわあ?!」

唐突に暁が下に下がる。

前は見ているが集中していかつた暁は、足元に発生した渦潮に気が付かず、暁のみが渦潮の被害にあつた。

暁「わあああああああああああああああああああ?!」

幸い、小さな渦潮だったので、転覆まではしないだろう。

・・・と思つていた。

雷「?!なんかこの渦潮変じやない?」

電「そ、そうですか??」

響「うくん・・・たしかに少し違和感が・・・?」

そう思い、ピヤーピヤー叫ぶ暁と渦潮を眺めていると、

響「おつ?!」

雷「へつ?!」

電「きや?!」

いつの間にか、私達まで渦潮に飲まれていた。

雷「なんでええええええええええええええええええ?!」

電「きやああああああああああああああ?!」

響「どうやら、少しずつ大きくなつていた様だね。」

各々叫びながら渦潮の回転に巻き込まれていた。

そしてしばらく渦潮が収まるまで踏ん張つていると

暁「ひびきつ?!たすけ！」

響「!!姉さん?!」

暁姉さんが渦潮の中心で姿を消した。

いや、海中に飲み込まれた。

雷「暁姉ええええええええ!!」

電「・・・うそ・・・」

響「ツツ!!」

私は、姉さんを助けるために、渦潮の中心目掛けて飛び込ん・・・

響「・・・あ。」

雷「響姉?!」

電「ええ・・・」

だはずなのだが、足元が悪く、とても中心まで距離が届かなかつた。

響「ああああああああああああああああああ?!?」

そして洗濯機のごとく回転し、渦潮の中心に飲み込まれた。

響「あ、あいるびいー。ばああつく・・・」 b

そう言い残して。

電 「雷お姉ちゃん!!どうしよう! 晩お姉ちゃんが!!」

雷 「・・・響姉は?」

電 「ヒビキオネイチャンハギセイニナツタノデス」

雷 「ええ・・・」

|

・・・・・

|

・・・・・

|

|

響 「・・・んう」

目を開けるとそこは、見知らぬ天井

響 「・・・天井すらなかつたか・・・」

雲 一つない蒼い空が広がっていた。

体を起き上げると、髪についていた砂が首筋から服の中に入つていく。

響 「・・・どこかの浜辺?」

辺りを見渡すが、それといつて目立つものが無い砂浜。

そこに私が打上れられていた。

響「お、良かつた。艦装も一緒か。」

少し遠くではあつたが、自分の艦装が見つかり、それを取りに向かう。

響「燃料は……少しあるな。」

すぐに装備し、軽くチエックをする。

響「ああでも、いろいろ海水に浸つて、とてもじやないが動けそうにないね……。
そしばやき、艦装に備え付けの時計を見るが、どこかの岩に強くぶつけたせいで画面
が割れて見えない。」

響「さて、と。どうしたものかな……。」

とりあえず、海に沿つて浜辺を歩く。

漂流物が多く、はるか遠くの無人島というわけではないようを感じる。
ペットボトル、流木、浮き輪、よくわからない物、電、雷……。
響「……えつ？」

電と雷が二人仲良くうつ伏せで倒れていた。

響「雷！電！！」

すぐに叫びながら駆け寄る。幸い、二人ともまだ気絶しているだけだつた。

目だつた外傷は擦り傷と打撲ぐらいで、二人ともゆするとすぐに目を覚ました。
雷「……あ、響ねえ、おはよ……」

電 「・・・あれ？あかつきおねいちゃん、髪脱色したのですか？」
 韶 「雷おはよ。電、私は韶だよ。」

二人とも目を覚ましたばかりで寝ぼけモードの様だ。

雷 「・・・!! ここどこ?!」

電 「はわ・・・はにや!?」

韶 「ようやく目覚めたみたいだね。」

パニック状態になる二人を落ち着かせながら、今の状態を確認する。

韶 「二人とも、一応確認するけど、所属は？」

雷・電 「第十八鎮守府」

韶 「よし、私も第十八鎮守府。記憶は大丈夫そうだね。艦装は？」

雷 「どつかに流れちゃつたみたいね・・・。」

電 「なのです。」

韶 「私たちの現状は？」

雷・電 「遭難している」

韶 「そうなんです。」

雷・電 「・・・。」

妹 二人の視線が痛い。

響「とにかく、ここ周辺を探索してみよう。何か些細なことでも見つけたら。すぐに情報共有。いいかい？」

電「了解なのです。」

雷「バラバラで探すの？」

響「いや、バラバラになつたらせつかく会えたのに二度と会えなくなるかも知れないから、三人固まつていこう。」

そう確認し合い、三人で浜辺を歩き出す。

しばらく歩くと、

響「二人とも、あれを見て。」

雷「なに？」

電「あれって……？」

大きく赤い、人工の建造物……鎮守府を見つけた。

電「鎮守府に近いところに打ち上げられたのですか?!」

雷「なにそれ！超ラツキージャン!!」

響「……たしかにラツキーだね。でも……」

見つけた鎮守府は外装は第十八鎮守府によく似てはいるが。
「別の……しかも、負けているところだね。」

十八にはあるはず物がなく。いたるところにツタが絡まり、まつたく人気が無かつた。

電 「誰もいない……のです？」

雷 「ここなら、雨風をしのげるし！体を休めることができそうね！」

響 「……とりあえず、入つてみようか。」

そう決めて、入れるような所を見つけ、中に入る。

中に入ると、ほとんどの所が瓦礫の山と化し、舗装されていたであろう所が割れ、そこから多くの草が生い茂つていた。

電 「な、なんだか怖い……」

雷 「ま、まさかここまでひどかったとは……」

怖氣づく二人のために、どんどん先陣を切っていく。

倒れ、中身が空のコンテナを見つけ、中にいたフナ虫を追い払い、二人を呼ぶ。

響 「よし、ここを中心として二手に分かれよう。私は本館に向かつて、コンパスと海図が無いか探してみる。二人は工廠跡や食堂、ドッグ跡で燃料や弾薬、飲み水、食料を探してきてくれ。」

雷 「ふ、二手に分かれるの?!」

響 「うん。島全体じやなくてこの廃鎮守府内なら何かあつたら叫べば問題無い。司令

官も心配しているだろうから、いそいで帰る方法を探したいけど、ダメだつた時用に漁船とかを待つために長期滞在するための食糧が必要になる。効率よくこの2種類のことを澄ませるのなら別れた方が早いだろう？」

雷「そ、そうね。わかつたわ。」

電「い、電も了解なのです・・・。」

響「よし、じやあ1時間後・・・つて、時計が無いや。まあ、適当な時間がたつたらここに集合ね。」

そう言つて、二手に分かれ探索を開始した。

――『廃鎮守府、本館』――

漁船を待つことはたぶん不可能だろう。負けた海域なんて、深海棲艦が多く出没するから、漁船なんて通るわけがない。そのためにも、必ず海図を見つけなければならない。

そう考えながら、廃鎮守府本館の扉を開ける。中は薄暗く、ところどころ木が腐っている。造りや部屋なんかは十八鎮と同じように感じたので、海図がありそうなところはすぐに目星がついた。

そう考え、足を一步踏み出すと、
ミシイ・・・

木製の床が軽くきしむ音がでた。するとその直後、
コンコンコンコンコンコンコン・・・・・

奥の方に逃げていくように遠ざかる足音が聞こえた。

響（誰か居る？）

足音の方を見るが、暗くよく見えない。しかもその方向は、先ほど日星をたてた部屋
があるところ。

恐怖と緊張で心臓の音が耳に脳に響く。

呼吸が無意識に荒くなる。

背中に冷たいものが流れ落ちる。

さつきは先陣を切つていたが、私だつて怖い。今すぐにでも泣き出したい。目が覚めた時だつて、独りぼっちじやないか不安だつた。

でも、そんな態度を取つていたら、妹たちが余計不安に陥つてしまふ。だから、平然
をよそつてきたが、

響（怖い・・・こわいよ・・・姉さん、雷、電・・・・）

やはり恐怖には、孤独には勝てそうになかつた。

頬にあつい物が伝つて、顎から落ちる。

響（落ち着け私！こんなところで泣くな!!）

そう自己暗示をかけて、胸を思いつきり殴る。そのせいでせき込むが幾分かましになる。

響（今会敵するのはやめた方がいい。何かが逃げた反対側にも日星をつけた部屋があるし、そこから探そう。）

そう考え、足音の反対側に歩を進める。

しばらく歩き、階段を上り、目的の部屋を見つける。

響「・・・執務室」

目の前にある扉の上の札を読み、確認する。

扉に耳を当て、中の音を聞こうと試みるが、特に音は聞こえない。ノックを軽くして、様子をうかがうが、反応は無い。

私は、意を決し、恐る恐る扉を開ける。入つてみて最初に入ってきた光景は、正面の壁から海が見える。敵の砲撃で穴が開いたのであろうと簡単に予想ができた。

そして、提督机の付近に転がる鉄の塊、上に乗っている白い丸いモノ。

中に入り、それが何なのかを確認する。・・・予想はできていた、頭からは『見るな』と命令が出てきたのにも関わらずに。

鉄の塊は、艦装。

一 ヤメロ

机の上にある

——ミルナ

白いモノは

——イヤダ

· · · 頭蓋骨

響 「はは · · · あはは · · · 」

よくよく見ると、机の向こうにも骨が散らばっている。

鉄の塊はよく見ると駆逐艦 · · 特に暁型であると予想ができる。艦装の側面に骨の

艦娘の名前であろう文字が刻まれている。

響 「 · · · ま · · · 」

文字はかすれて読みづらかったが、からうじて読めたのが『ま』の一文字。

それだけで、誰だかわかる。わかつてしまつた。

唐突に眩暈が起こり、心臓が強く脈打つ。

呼吸が荒くなる。

吐き気が込みあがる。

気持ちが悪い。

いやだ

一一一

目の前の現実を受け付けたくないと思ふが、体が否定する。

ついには、その場に座り込み、その儀装を抱きしめ、泣いてしまった。

違う人。そのはずなのに。ただの同一個体で全くの知らない人なのに自分の身近な人と被さる。

しばらく泣いていると。

？
「ひ、響なの！？」

唐突に後ろから声がした。

その声にハツとして、手で口を押え、どこかに隠れようとする。

？「だれ？響？いるの？それとも、お、おおおおオバケ？？」

その声をよく聞くと、とてもよく聞いた声だった

響
—
・
・
・
姉
・
・
・
さん?
—

? —ひ響?響なのね?】

執務室の入り口から恐る恐る顔を出すのは暁だった。

その顔を見てすぐに、目の前がかすむ。

響 「姉さん!!ねえさん!!」

暁 「うわあ?!ちよ、響!どうしたの?!」

とびかかる私を受け止め尻もちをつく暁。
しばらく、泣き続けるわたしと、困惑するもすぐに私の頭をなでてあやす暁の二人が
執務室に残つた。

・ · · · ·

暁 「・ · · 落ち着いた?」

響 「うん · · ·」

暁 「何があつたの?」

響 「怖かつた · · ·。」

暁 「そう · · ·(わたしもめっちゃんこわかった)」

響 「姉さん · · ·」

暁 「ん? なあに?」

響 「・ · · ペつたん娘」

そのとたん、頭に強烈な痛みが走つた。

・ · · · ·

合流した暁に、現状を伝える。

響 「……というわけで、姉さんには、私と行動してもらうよ。」

暁 「了解。……あ、後二人の艦装なら私の倒れていたところにあつたわよ。」

響 「！ 本当かい！」

暁 「え、ええ。」

響 「……本当みたいだね。」

暁 「嘘なんか『姉さん』ん？」

響 「……それ、電の艦装……。」

それを聞いてすぐに艦装を確認する暁。

艦装の側面には、堂々と『いなづま』の4文字が書かれていた。

響 「……姉さんと電の艦装つて……」

暁 「おだまりひびき」

※暁は改二です。

響 「姉さん、所属は？」

暁 「第十八鎮守府」

響 「最近建造された娘の艦種は？」

暁 「え？ たしか『特務艦』だつけ？」

響 「……私の知る姉さんで間違えないね。」

暁 「当然よ。」

響 「まあ、それはそれとして……姉さんはそつちの棚、私はこつちの棚を見るから、

海図があつたら教えて。」

そう言つて立ち上がり、すぐに行動を再開した。

私が立ち上がりすぐには「ひつ」という悲鳴が聞こえたが、気にしない。

棚の中にあるファイルの背表紙をざつと見ていく。

作戦報告書、会敵報告書、演習報告書、遠征報告書……どれもこれといつてめぼしいものが無い中、何も書いてないファイルを見つける。

どれもこれもしつかりナンバー やタイトルが書いてあるのにも関わらず。ただ一冊だけ何も書いていない。

少し気になり手に取り、適当なところを開く。

『○月×日、 気温XX℃ 湿度YY%』

分量	燃料	弾薬	X X X
·	·	·	X ? X
· 鋼材	·	·	X X X
· ??? の？	·	·	X ??
· ??? X ??	·	·	X ??

・開発資材 ・・・ X

結果 ・・・ 失敗

完成物：??すらと??お??、会??意??も不可。完全なる??。
ところどころ虫に食われたり、文字がかすれて読めないが、どうやらなにかの結果を
綴つたモノの様だ。

響（なんだこれ？燃料や弾薬、開発資材とかあるから、建造や、開発なんだろうけど
も。なんだか一つ材料が多いような・・・？）

他のページも同様で何かの結果の様だった。真剣に読み漁り、最後の材料が何なにか
を必死で考える。

響「深・・・木？・・・海？？・・・？」

暁「響？」

響「ふえつ?!どうしたの??」

唐突に声を掛けられ、少し驚きながらも返事をする

暁「海図あつたけど・・・大丈夫？」

そう言いながら、暁は自分の手に持っている『海図帳』という本を見せる。

響「ああうん。ナイス姉さん。」

暁「れでいとして当然よ。にしてもずいぶん古い海図ねえ。見てこれ、鎮守府が5つ

しかない。」

鎮守府が5つ?

響「姉さん。ここは第何?」

暁「え?た、たぶん第四···!!」

響「なるほど···」は『第二次防衛大戦』の時に落された、『発展の鎮守府』なんだね。」

『第一次防衛大戦』···人類が海域を深海棲艦に制圧され、日本やその他の首都にも深海棲艦が集結するのを防いだのが『第一次防衛大戦』、その後すぐに始まったのが『第一次反抗作戦』その後人類は多くの鎮守府や補給府を日本各地に設立し、多くの艦娘を建造した。計5つの鎮守府が完成したときに、敵の大艦隊が日本の首都東京めがけて進行しだしていた。その艦隊を撃退した大戦のことを『第二次防衛大戦』となつていて。その時のこちらの被害は、約鎮守府2か所分の艦娘、人材。一つの鎮守府という大きな損害を食らつた。その時落ちた鎮守府が『第四鎮守府』。

原初の鎮守府の4つは『第一次反抗作戦』やそれ以外の成績を讃え、二つ名が授与されていた。第一鎮守府は首都や漁船などの防衛、避難誘導等の功績を讃え『正義の鎮守府』。第二鎮守府はどこよりも深海棲艦の轟沈数を稼いだことにより『力の鎮守府』。第三鎮守府は、多くの場所で幅広く作戦を遂行していくことにより『自由の鎮守府』。そし

て私たちがいまいるここ第四鎮守府は、艦娘の装備、開発資材、修復材を開発したことにより『発展の鎮守府』となつた。

響 「となると……十八はここだね。」

暁 「うわあ……地味に遠いわね……。」

響 「この距離を今ある分で……うん、無理だね。」

全速力で飛ばしても半日以上かかる距離。今私の艦装の中にある燃料じや目的地のはるか遠くで停止してしまう。

暁 「誰か一人でも向かわせればいいんじゃないの？」

響 「うん……それでも足りるかな？」

渦潮に巻き込まれたとき暁は直に流されたから、燃料は少し余裕があるはずだ。私はしばらくは踏ん張つていたが、途中で自分から流されたので、少ないがある。問題は……

響 「……姉さん。電の艦装の燃料つて、どれぐらいある？」

暁 「え？ えっと……あくほどなどないわね。」

響 「となると、雷もだろうなあ……。ううん」

暁 「これつて……」

響 「多分……」

暁・響 「無理ね」だね」

二人の言葉がハモリ、それがおかしくて笑い合うが、すぐに現実に戻りため息を漏らす。

響 「……とりあえず、コンパスをさがそう……。」

暁 「そ、そうね……。」

そう決め、移動を開始した。

——『廃鎮守府、集合場所』——

私達が集合場所に向かうと、そこには雷と電の姿があつた。

響 「おくい。二人ともく」

私が叫ぶと、二人はすぐに反応し、こちらを見るやすぐに駆け寄つてくる。

雷 「あかつきねえええええ」

電 「おねいちやんううううう」

妹二人によるタツクルを正面から受け、3人ともに地面に倒れ、そのまま感動の大声で喚く二人と、行動は嫌がつてゐるが顔はまんざらでもない表情をしてゐる暁。

わいわいぎやあぎやあ騒ぐ三人を見ていると少し寂しい……。

その気持ちで少し力み、手をたたくと普段より大きな音が鳴り、3人が少し驚きながらこちらを見る。

響「はい！で？そつちは成果は⁈」

雷「あ。うん・・・カンパンみたいな保存の効くものは見つかっただけど。飲み水はどちらも日が経つていてダメだつたわ・・・。」

暁「弾薬と燃料は？」

電「響お姉ちゃんの大声が聞こえたので、食堂を探索してすぐここへ来たのです。」

私の大声・・・たしか・・・いや、忘れよう。

響「ということは・・・」

暁「4人で工廠探索ね。」

ということになつたが・・・。

響「その前に、二人（姉さんと雷）は艦装を取つてきた方がいいよ。」

雷「え？あるの⁈」

電「い、電の艦装は⁈」

雷は驚き、電は私に顔を近づける。私は、その二人に対しゆつくり人差し指を出す。

向けた先には・・・

暁「・・・。」

顔をそむける暁。私はその暁の背中をさらに指さす。

雷「・・・暁姉、それ「うつさい」アツハイ。」

電 「ど、とりあえず。艦装をとりにいくのです！」

暁 「場所は私が知つてゐるから。雷、電ついてきなさい。」

電 「暁お姉ちゃん。私の艦装おいてけ。」

（艦娘艦装回収中）

響 「よし、じやあ工廠行こうか……。」

各々それぞれ自分の艦装を装備し、工廠へ向かう。

——『廃鎮守府、工廠』——

どこの鎮守府の工廠も作りはがつしりしてゐる。そのおかげか、この廃鎮守府の工廠も崩れずに形を残したまま建つてゐる。

・・・違うところといえば、

雷 「な、なんだか・・・ものすごく怖いわね・・・」

響 「人気・・・いや、妖精さんが一人もいない」

通常、工廠では艦娘の艦装や装備、建造を手伝つたり率先してやつてくれたりする『妖精さん』がたくさんいたりする。だがここには、その妖精さんが一人？もいない。

電 「と、とりあえず、中に入つてみましよう・・・」

工廠の入り口は鍵がかかっていたり、古錆びて開かないということはなかつた（開け

辛かつたけどね・・・

暁「中は・・・やっぱり真っ暗ね・・・」

電気なんて、当然通っているはずがない。

響「姉さん。探照灯を」

暁「了解。」

暁の持つ『探照灯』のおかげで、部分的にだが明るくなつた。

響「えっと・・・あ、あつた」

そう言つて、工廠のシャッターを上げる。おかげで、工廠の中が良く見えるようになった。

電「これでいろいろ探せそうです！」

雷「よおしつし！使えそんなもの片つ端から見つけるわよ!!」

雷の掛け声で暁、電が返事をしている中、私はとあるところに目を向けていた。

響（建造ドッグが閉まつてゐる・・・？）

通常、建造ドッグは、建造中もしくは建造完了して艦娘を迎えるときのみ閉まつている。つまり・・・

私はすぐに建造ドッグに近づく。すると、作業台の上に一枚の紙が置いてあつた。内容は・・・

『建・は・・し・ やはり・・・の・・だけ・・なく、体の・・も必要だつたらしい。
今後とも・・・・・・・』

後半や一部がかすれていて読みづらく、一部しか分からなかつた。

響（これは・・・あの執務室のファイルと関係があるっぽいね・・・。）

そう深く考えていると

暁「響!!」

響「!?ね、姉さん?どうしたの??」

暁「何難しい顔してるのよ!電と雷が、奥の密閉格納庫で燃料と少しの弾薬見つけた
みたいだから、行くわよ!」

響「あ、うん。すぐ行くよ・・・」

ここはとにかく後回しにして、補給を済ませよう・・・。

（艦娘補給中）

雷「・・・お!動いた!!」

暁「私の艦装も動いたわ!!」

電「はわわ・・・う、動かないのです・・・」

響「私のもダメみたいだね・・・」

私と電の艦装だけ、内部に少し異常があつた。

響 「うん……どこかに同じ型の艦装でもあれば……」

電 「あつちにまだ未探索の部屋があるです。そこを探索してみるのです。」
電が指さす方を見ると、鉄製のスライドドアが見えた。

雷
——ちよつと待つて、見てくるわ！」

そう言つて、雷一人で扉を開けようとする。が、

「私も手伝うわ。」

雷「暁姉だけじゃ無理。」
つていうか、私達じゃ無理ね。」

そう言つて、鐵扇を眺めていると

ジヤキン!

暁が砲を鐵扉に向け、弾薬を装填した。

響
—ちよ！姉さん!!!雷！伏せて!!

その声を聴いて、雷がこちらを振り返ると同時に、暁の砲が赤く発光する。

「あともう一発つてところかしら？」

暁がどや顔を決めてると

1

妹二人から全力の突つ込み。

響 「なんで!? なんで撃つた?? もしも今の砲撃で工廠が崩れたらどうすんの?!」

響 「なんで!? なんで撃つた?? もしも今の砲撃で工廠が崩れたらどうすんの?!」

雷一なぜに!何故に撃つた?もう少しであたしは止まると云つたのだからやない?」

「うつさい!! レディである姉を侮辱するからよ!」

響・雷「「ふざけるな!!」

そう3人でギヤーギヤーやつていると。

電「えい！」ゴイン!!

電が錨を鉄扉に向け振り下ろした。すると程よい小さな穴が鉄扉に開いた。

電「いい感じの穴があいたのです！先に進んでみましょう!!」

暁・響・雷 「「ナイス末っ子!!」

電「名前を呼べ」

扉の先は、艦装置き場だつた。特型、睦月型、長良型等々・・・大小さまざまな艦装が置いてある。

「よし！」このパートをもらつていこう！」

「そう言つて、自分の壊れた艦装のパーツと同じパーツを探す。」
雷「ん？ なにあれ？」

そんな中、雷は一枚の扉を見つける。

雷「……開けちやえ」

一瞬考えたが、考えることをやめ、ためらいも無く扉を開けた。そのとたん、工廠の中にひどい悪臭が充満した。

「何この臭い!!」

電
一
はわわ
・
・
・
うつぶ
・
・
・

各々すぐに臭いに気付きどこからか辺りを見渡す。すると

突然、雷の叫む声が聞こえた。

すぐに声のした方を見てみると、腰を抜かし、床に尻もちをつく雷の姿があつた。

雷のもとに駆け寄り雷の目線の先をみてみると

響
一
!! なんだ
・
・
・
・
これ
!!

中には、多くの骨、複数個ある円柱の水槽。一部の水槽は、割れていたり中が無かつたりしているが、中が紫色の謎の液体で埋め尽くされたものもある。

曉「何? どうしたの??」

電 「ひ、響お姉ちゃん？なにがあつたのです？」

響 「見ちゃダメだ!!」

暁と電もこちらに近づいてこようとするが、私は全力で中を見せないようにした。

暁 「な、なによ「姉さん!!」つ！わ、わかつたわ・・・」

私の顔を見てすぐに、理解してくれたらしい。すぐを見るのをあきらめた。

響 「電、すまないが私の艦装の修理も頼む。姉さん、探照灯を貸して。それと雷を外へ。少し風にあたつてくるといい。」

顔を蒼くし、小さく震えている雷の肩に手を置いて、気を落ち着かせようとすると。それぞれが私の指示通りに動き、部屋の前には私一人になつた。

——『??』——

窓もなく、出入口もここだけ。暁から借りた探照灯で部屋を軽く見てみると。床や壁、天井のいたるところが黒くなっている。

響 (これはもしや・・・いや、考えちゃダメだ。)

中身の入っている水槽の一つを照らしてみる。すると、液体の中に何か固体があるよううに見えた。

ほんやりしていたり、一部無かつたりするが、私、いや、誰もが見たことのある影が見えた。

すぐに水槽のコントロールパネルを見つけ照らすと、予想は確信になつた。

響「駆逐・・・イ級・・・!!!!」

このビーカーの中には深海棲艦駆逐『イ』級が入つてゐる。すぐさまほかの中が入つてゐるビーカーを見て回ると、イ級以外にもホ級、ワ級や人型に近いル級、ヲ級等多くの種類の深海棲艦が入つていた。

響「なんで・・・深海棲艦を・・?」

そうやつて回つていると作業机の上に一つのファイルを見つけた。適當なところを開いてみると

実験はひとまず成功した。

やはり、深海棲艦の・だけではうまくいかないらしい。

・の一部を使用することで、・・・と考へられる。

あとは、・・の問・だ。

今後も・・・・・・

響「深海・・・棲艦!?!?」

ところどころ読めないが、なんとか読めるところで、この4文字が中心に入つてきた。

響（?!どういうことだ??一部を使用する??いつたい何に??まさか・・・・・・）

そういう考へていると、外の方で鈍い音が聞こえた。それと同時に電の叫び声が聞こ

えてくる。

電 「響お姉ちゃん!!!敵なのです!!」

響 「!!数は?!」

電 「確認できたのは駆逐3、軽巡4、戦艦3! ほかにも空母が少なくとも1隻はいるはずなのです!!」

その報告を受けて、私は頭の中が真っ白になつた。

戦力差は圧倒的、さらには弾薬、燃料共に補給できたとはいえない。逃げようにも空からの監視もある。

どうあがいても勝てるわけがない。逃げられるわけがない。

暁 「響!!逃げるわよ!!!」

雷 「電! 韶姉の艦装は?」

電 「修復は完了したのです!」

それぞれが逃げる準備をしている中、私はとあることを考え走り出す。

暁 「うえ?!響!」

電 「響お姉ちゃん!!どこいくですか?」

走り出し、たどり着いた先は、建造ドック

響 「ハア・・・ハア・・・か、完成しているのなら・・・・・!」

建造ドッグの開閉ボタンを力強く押す。なぜかこここの機能だけは生きていたらしく。
大きな音と共にシャツターが持ち上がる。それと同時に
バーン!!!!

敵の砲撃音が聞こえ、その数秒後、この工廠の中に敵の砲撃が命中する。

雷「ひびきねえええ!!!」

暁「う、うそ……」

電「は、はわわ……あああ……」

砂埃が充满し、視界が悪くなる。姉妹の声が聞こえる中、私は唯一見えるその艦娘の
背中をただただ見ていた。

？「大丈夫、ですか？」

戦艦ル級にも似た身の丈ほどある大きな盾を持つた女性がこちらを心配そうに見つ
める。

？「歓迎の花火にしては、ずいぶん物騒ね」

？「これお前、いつまで寝ておるのだ。シャキッとせんか。」

？「んう・・・あと・・・5年・・・」

そんな会話が後ろから聞こえてくる。

？「あ？あんただれ？つてかこどこ？」

響 「説明はあとでなんでも受け付ける。今は少々、私達に手を貸してくれないか？」

？ 「ん？ · · · なんでも · · · ？」

？ 「ふむ · · · 了解した。我もいろいろ情報がほしい。」

？ 「たのしけりやなんでもいいわ。で、あんた名前は？」

響 「響 · · · いや、正式には『Верный』だ。好きな方で呼んでくれ。」

？ 「ふむ、自己紹介感謝する。響よ、敵はどれだ？」

砂埃が晴れて、それぞれの姿が見える。

一人は小柄で、腰の左右にそれぞれ一振りの刀を下げている。

一人はとても大きな体、それと多くの主砲が付いたとても大きな艦装。

一人はスクール水着、両腕にはそれぞれ一門の長い砲が付いている。

計四人の不明な艦娘、『特務艦』がそれぞれ姿を見せる。

響 「 · · · あの正面に居る、黒い者たち · · · 『深海棲艦』だ。」

そう言うと、小柄な少女が口角を持ち上げ、腰の刀に手をのせる。

？ 「了解 · · · さあ、始めましょう!!!」

この後は、言うまでもない。矛が大暴れ、桜華が大乱射、水蓮はかく乱して敵はあつ

という間に全滅。そして、私が適当な艦名を命名し、家に帰る準備をした。

これが、『矛』『盾』『桜華』『水蓮』との出会いさ。

大体わかつたかな？この報告書を捨てるよう命められた意味が。
ふふ、この報告書を見た時の司令官の顔。すごかつたんだよ？

私だつて信じたくなかったけど、これが真実なんだ。

流星は・・・いや、『特務艦』は・・・。

・・・・・・・・・・・・

・・・いや、それでも彼女らは、私の仲間。

この鎮守府の『家族』だ。